グリムガル～灰燼を背負いし者たち～

ぽよぽよ太郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※現在更新停止中※

↓他の作品に区切りがついたら再開します。

〝目覚（アウェイク）めよ〟

そんな言葉が脳裏に響き、青年は目を覚ました。

周囲には同じような境遇の８人。

ここはどこなのか？自分たちはどうしてここにいるのか？

尽きない疑問、無情な現実、跋扈するモンスター、死と隣合わせの毎日。

それでも、進むしかなかった。

人によりますが、序盤は胸糞悪くも感じるかもしれないのでお気をつけください。
主人公たちはハルヒロたちの２つ後に来た義勇兵です。
原作未読でも読めるように書いています。
ですが、もしわかりにくい部分があれば、指摘があり次第修正します。

目次

level. 1 目覚め、出会い、そして別れる
▪ pisode. 1 始まりの塔 1
▪ pisode. 2 月が赤い世界 26
▪ pisode. 3 ギルド — 40
▪ pisode. 4 — 56
▪ pisode. 5 — 68
▪ pisode. 6 — 82
▪ pisode. 7 — 98
▪ pisode. 8 — 109
▪ pisode. 9 — 124
▪ pisode. 10 — 139
▪ pisode. 11 — 156
▪ pisode. 12 — 172
▪ pisode. 13 — 183
▪ pisode. 14 — 196

level.l 目覚め、出会い、そして別れる

▪pisode.l 始まりの塔

〝――目覚めよ(アウェイク)〟

声が聞こえた気がして、目を開けた。

どうやら地面に横たわっているようだ。

背が接する地面は固く冷たい。そっと手で触れてみるが、どうやら石でできているらしい。ひんやりとした地面に手をついて、俺はゆっくりと身体を起こす。

周囲はうっすらとした光源で照らされている。立ち上がった俺の頭の少し上のあたりにあるその蝋燭のおかげで、ぼんやりとだが周囲を見ることができた。もっとも、蝋燭が頭上にあるため足元だったりはほとんど見えない。

……ここはどこだ？

そんな疑問が浮かんできたが、それに対する答えは出てこなかった。というよりも、

何もわからないのだ。
自分がなぜここにいるのか、今まで何をしていたのか。
考えようとしても、それがふっと浮かんでは消えていく。まるで自分という存在を形作るピースがどんどん欠けていくような、そんな恐怖があった。
これ以上考え込んでも仕方がない、か。
一旦思考を切り上げて、俺は改めて周りを見渡す。だいたい１０人くらいか？　それくらいの数の気配がする。たぶん人間なんだろう。息遣いからみるに、俺と同じようにこの状況に戸惑っているようだ。
「誰か、いるのか？」
若い男の声がする。どこか意思の強そうなその声は、こんな状況でも明確な意思を持っているように感じた。
「は、はい……」
「ああ」
「いますよ～」
数人の男女の声があがり、それを皮切りに次々と声が上がる。
やはり１０人程度はいるみたいだ。
「とにかく、出口を探そう。壁伝いに歩けばきっと見つかる」

先ほど最初に声を上げた若い男がそう言い、小石を踏みしめる音が響いた。言葉通り、壁伝いに歩き始めたみたいだ。

蝋燭に照らされた彼の身長はそれほど高くはない。成人男性の平均くらいだろう。栗色の髪をしていて、ゆるくパーマがかかっている。薄暗いからか顔色までは見えないが、迷いなく進んでいる。

やはり彼は落ち着いているように感じる。この異常な状況に動じていないというか。俺も大して動揺はしていないんだが、こうやって率先して動こうとはしなかったからな。

「わ、私も行く！」

「俺も行こう」

彼に同意するように数人の声が上がる。

「……反対側にも行けそうだ」

俺の後ろから、ハスキーな低い男の声がする。俺も気になっていたが、そちらには蝋燭が置いていないのであまり気は進まない。

「今は一緒に行動したほうが良いと思う。何が起こっているのかわからないし」

栗色髪の優男は少し考えるように俯き、そう答えた。確かにな。声をかけた男もそれに納得したのか、俺を追い越して進んで行く。

こいつ、デカイな。身長は2メートル近いんじゃないだろうか。俺よりも１０センチくらい背が高い。ボクサーみたいに筋骨隆々なのが服の上からでもわかる。丸坊主で、嫌に鋭い目つきをしているのが見える。

……ボクサー？　一体何なんだ、それは……？

不意に浮かんできた単語だったが、俺にはなんのことだかわからなかった。おそらく、消えていく記憶に関係したものなのだろう。他にも妙な単語が浮かんでは消えていく。

「――きゃっ」

俺がそんなことを考えていると、背中にドンッと衝撃を受ける。その柔らかい感触に多少驚きつつ振り返ると、眼下には黒い髪をしたおかっぱの女の子が倒れていた。彼女は前を見ていなかったようで、俺の背中にぶつかって倒れたみたいだ。

「悪い、大丈夫か？」

「う、うん……」

俺が差し出した手をおずおずと掴み、彼女は立ち上がる。俺の顎くらいの位置に彼女の頭がきて、ほのかに甘い香りがした。

立ち上がった彼女は不安そうに佇んでいる。目の前にいた俺に気がつかないくらいだから、相当視野も狭くなっているのだろう。俺たち以外は歩き始めているため、この

ままだと取り残されることになる。
「とりあえず、俺たちも歩こう」
俺はそう言って彼女を先導するように歩幅を小さくして歩き始める。背中からは彼女の息遣いが聞こえるため、ちゃんとついて来ているみたいだ。足元が見えないため、ゴツゴツとした壁に手を付きながら俺たちは歩く。
延々と同じような光景が続くため、時間の感覚がわからなくなる。
どれくらい歩いたのだろうか。ものすごく長い時間だった気もするし、ごく短時間だったようにも思える。
「鉄格子……？　外に光が見える」
不意に、先頭を歩いているだろう栗色髪の優男が声を上げた。
「出口だ！」
誰かがそう叫ぶ。まあ確かに、この閉塞した空間には嫌気がさしていたところだ。
自然とみんなの足取りも軽くなる。
鉄格子付近の蝋燭――いや、あれはランプか。そのランプに照らされて、優男と先ほどの丸坊主が立っているのが見える。
丸坊主が鉄格子に手をかけてそれを揺さぶる。すると、鉄格子はガコッと音を立てて動いた。

「出られそうかしら?」
落ち着いた雰囲気の女性がそう声をかける。
丸坊主は鉄格子をゆっくりと開くと、優男とともにその先に進んで行く。
「――階段がある。上からは光が漏れてるな」
中からのその声に、喜色めいた雰囲気が広がる。
鉄格子の先はカビ臭い通路になっていて、どうにも狭苦しい。先には石の階段があり、灯りこそないが上から刺す光で比較的明るい。
俺たちはそこを一列になって上がっていった。一番上にはまた鉄格子が嵌められていて、そこには鍵がかかっているみたいだ。丸坊主がガシャガシャと音を立てて鉄格子を揺らすが、開く気配はない。
「誰かいないか!?」
優男が鉄格子の向こう側に向かってそう叫び、丸坊主は続けて鉄格子を鳴らす。
それからすぐのことだった。不意に丸坊主が鉄格子から手を離して、距離を取る。優男もそれに続いた。どうやら誰か来たみたいだ。
鍵の外れる音がして、鉄格子が開かれる。
「出ろ」
若干投げやり感のある声。鍵を開けた人物のだろう。

階段を上がると、そこは石造りの部屋だった。ランプのおかげで下よりも明るく、さらに上階へ上がる階段も見える。

ずっと感じていたことだが、ここは全体的に古くさく感じる。鍵を開けた男もそうだ。使い込まれた金属製の鎧を着ていて、同じような作りの兜を被っている。腰に下げているのは恐らく剣なんだろう。

その鎧の男は、壁に取り付けられている黒っぽい器具を引っ張った。

すると、部屋全体が振動して、壁の一部がゆっくりと開いていく。動いた壁はゆっくりと沈み込んで、そこに縦長の穴があいた。

「こっちだ。さっさと出ろ」

鎧の男はまたそう言って、穴に向かって顎をしゃくってみせた。

優男を先頭に、ぞろぞろと穴から外に出る。

「わっ！　眩しい！」

誰かが叫ぶ。

ちょうど昼頃だろうか。太陽がさんさんと照りつけていて、暗闇に慣れた俺たちには少し辛かった。

何度か瞬きを繰り返すことで、だんだんと目が慣れてくる。そして、恐る恐る周囲を見渡した。

どうやら俺たちは今、小高い丘にいるみたいだ。後ろには、俺たちがいた場所――高い塔がそそり立っていた。

人数を数えてみると、合計で9人。俺や優男、丸坊主を含めた男が6人。女性陣は先ほど俺にぶつかってきた小柄な女の子に派手めな金髪の女の子、メガネを掛けた大人しそうな女の子の計3人。もちろん全員、見覚えのない顔だ。

「あれは……砦かな?」

優男が丘の向こうを指差して呟く。

そちらに目をやると、城壁に囲まれた街があった。確かに、砦のようにも見えるな。ここからでも、街を行き交う人々の様子がぼんやりと見える。

「つーかさ、ここってどこなんだろうな?」

背の低い調子の良さそうな男が声を上げる。だが、その問いに答えられる者はいないみたいだ。もちろん、俺も。なんせ記憶がないのだ。もしかしたら、他の全員も俺と同じように記憶が欠けているのかもしれないな。

「……誰もわからねぇみたいだな」

「さっきの奴に聞いてみるってのはどう?」

丸坊主の言葉に、長い茶髪を後ろで結んでいるチャラそうな男がそう言う。

だが、出てきた場所はすでに閉じていて、普通の壁と見分けがつかないようになって

いた。
「あ～……」
気まずそうにするチャラ男。
これで、俺たちには尋ねるべき相手がいなくなった。
さて、本当にどうするか。
「――今回は9人か」
そんな感じで少しの間途方に暮れていた俺たち。そんな俺たちに、謎の男が声をかけてきた。黒っぽい鎧を着ていて大剣を背負っているその男は、俺たちをざっと見回すと歩き始める。
というか、今回ってことは何度も俺たちみたいなのが来てるってことだよな。
「とりあえず付いて来い。詳しい説明を聞きたいならな」
振り返りながら男が言った言葉に、俺たちはとりあえず従った。聞きたいこともあったが、男の発する雰囲気に当てられているみたいだ。重苦しい空気が漂う。
結局そのまま、俺たちは何も言わずに街へと入っていった。

街には様々な建物があった。石造りのものもあれば木造の建物もある。区画整備な

どはされていないようで、石畳の道は曲がりくねっていた。
道を行き交う人々は質素な格好をしていて、言ってしまえば見すぼらしいといった感じだ。ジロジロ見られるのは居心地が悪かったが、そんなことを気にしていてもしょうがない。
「君は、何か思い出せる？」
俺がそんなことを考えていると、謎の男のすぐ後ろを歩いていた優男が声をかけてきた。彼は先ほど丸坊主と話していたから、こうして皆にいろいろと聞いて回るつもりなんだろう。
「……名前くらいだな。それ以外はなんていうか、思い出そうとすると消えていく」
「やっぱり、みんなそうみたいだね。僕もそんな感じ」
優男は困ったように笑う。
「僕の名前はセイヤ。君の名前は？」
「俺？　俺は……イブキだ、たぶん」
優男――もとい、セイヤにそう答える。他にも思い出そうとしたのだが、いかんせんイブキという名前しか思い出せなかった。
「そっか、イブキって言うのか。よろしく」
セイヤはそう言って、人好きのする笑みを浮かべる。

それから少しの間言葉を交わすが、どうにも違和感が拭えなかった。セイヤは普通に人当たりの良い好青年に見えるのに、その印象がどこかちぐはぐに感じるのだ。

「――っと、他の人にも聞いてみるよ」

セイヤはそんな風に怪訝そうに眉を潜めた俺を見たからか、すぐに俺の元から離れた。

いろいろと行動的な部分も含めて、頼りになる奴なのかもしれない。だが、俺はなぜか彼の目が気になった。俺を品定めするような、そんな意図が感じられる視線だったのだ。

……いや、考えすぎか。

きっと、よく分からない環境に放り出されて疲れているんだろう。俺はこの違和感にそう結論づけることにした。

「あ、あの……」

セイヤが俺の元から離れたのを見て、先ほど俺にぶつかったおかっぱの少女が声をかけてきた。どうやらセイヤは彼女に声をかけていないみたいだ。

「ああ、さっきの」

「わ、私、マイって言います。さっきは……あの、ごめんなさい」

「いや、こちらこそ。俺はイブキだ。よろしく」

マイは少しおどおどしていたが、俺が名乗るとほぅっと息を吐いた。緊張していたのだろうか。

「や、優しそうな人で良かった……」

どうやら俺は、怖い奴だと思われていたみたいだ。確かに俺は丸坊主ほどではないが身長は高いし、身体も結構筋肉質。それに、目つきも悪い。……仕方ないっちゃ仕方ない、か。

「あ～、なんつーか、気軽に話してくれて大丈夫だぞ?」

「……うん、わかった」

俺がそう言うと、マイは笑顔で頷いた。

「お二人さん、もしかして知り合いとか?」

そんな風に話していた俺たちを見ていたのか、背の低い調子の良さそうな男とぽっちゃりとした男がこちらに近付いてきた。その顔を見る分には囃し立てるような意図はないようで、ただただ純粋に疑問を抱いてるみたいだ。

「いや、ここに来てから知り合った」

「うん、そうだと思う」

俺の言葉に、マイもうんうんと頷いて同意する。

それを見た二人は、少し驚きつつも口を開く。

「いや、てっきりアンタっておっかねえ奴だと思っていたからさ。ちょっと驚いた」
背の低いほうはそう言って、楽しそうに笑う。たぶん彼に悪気はないんだろうが、少し傷つくな。
「あ、そういやまだ名乗ってなかったな。俺の名前はシュン！　んでこっちがタケシ！　よろしくな！」
「よ、よろしく……」
シュンはそう言って、ぽっちゃりとした気の弱そうな男――タケシ共々自己紹介をしてきた。マイペースというかなんというか、シュンと話していると少し疲れる気がする。
「俺はイブキ。よろしく」
「私の名前はマイ。よろしくね、シュン君にタケシ君」
その後は、シュンを中心に俺とマイが合いの手を入れ、タケシがおどおどと話すといって具合で会話が進んでいった。
俺たちを先導する男が立ち止まるまで、俺たちはそんな感じで話しながら歩いていた。

男が立ち止まった建物は石造二階建ての古びた建物で、白地に赤い三日月が描かれた

旗が掲げられている。文字の擦れた看板も出ていて、何かの施設であることがわかる。

「……ここがオルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーンの事務所だ」

男は俺たちを一瞥するとそう言って、建物の中に入っていった。ふと看板を見てみると、確かに〝オルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーン〟と読めないこともない。

そしてたぶん、オルタナっていうのはこの街のことだろう。

俺たちは男に続いてぞろぞろと中へと踏み込む。

建物の中は酒を飲む店のホールみたいになっていて、テーブルと椅子の向こう側にカウンターがあるのがわかる。そのカウンターの向こうには男が一人立っていて、俺たちと彼以外に人はいないみたいだ。

「では、後はあそこにいる者に引き継ぐ」

ここまで俺たちを連れてきた男はそういうと、カウンターにいる男に視線を投げかけて歩き出す。カウンターにいる男はその視線にウインクで答え、なぜか腰をくねらせている。

先導してきた男が建物から出て扉を閉めると、俺たちは自然とカウンターの男へと目を向ける。

その男はファンタジックな緑色の髪の毛をしている。しかも唇は黒い口紅を塗っているのか艶やかに黒く、長く量の多いまつ毛はカールしているのかバサバサだ。その下

の綺麗な水色の瞳が余計に恐怖心を煽る。全体的に濃いめの化粧をした彼は、もちろん男だ。そのはずだ。

「ふーん……結構良い男がいるじゃない」

その男は俺たちを舐めるように見回して、自身のケツアゴを指でなぞる。今目が合ったのは、気のせいだと思いたい。

「んふふ、歓迎するわ、子猫ちゃんたち。アタシの名前はブリトニー。当オルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーン事務所の所長兼ホストよ。所長、もしくは気軽にブリちゃんって呼んでくれていいわ」

ブリトニーは腰をクネクネとさせながらそう言った。

「……すみません、所長。ここは一体どこなんですか？　僕たち、記憶がないみたいで……」

みんなを代表して、セイヤが口を開いた。口調こそ下手に出ている風だが、その瞳からは有無を言わさぬ迫力が感じられる。だが、ブリトニーはそれを見て何も思わないのか、ニヤリと笑うだけで言葉を続けた。

「……いいわねぇその目。特に変なことしようとする子もいないみたいだし、あなたたち良い子たちね。少し前来たグループは向こう見ずが多くって困っちゃったわ」

まったくもう、と愚痴りながらも、言葉とは裏腹にブリトニーの顔はどこか嬉しそう

に歪んでいる。

「男が6人に、女が3人……今回は少し少ないわね。間隔が早かったのと関係があるのかしら？　上手く戦力になってくれればいいけど」

「戦力？」

シュンが不思議そうに呟く。確かに少し物騒な言葉だ。だが、〝ここの看板〟と合わせて考えれば意味がわかった。セイヤや丸坊主、チャラ男も気が付いたみたいだ。マイやタケシは気が付いていないみたいで、キョトンとしている。シュンも同様だ。

「……俺たちに、義勇兵とかってやつになれってことか？」

丸坊主が口を開いた。その口調からはなんとなく楽しそうな雰囲気が伝わってくる。おもちゃを前にした子どものような、そんな感じの。……こいつ、やばい奴かもしれない。

「あらま」

ブリトニーは驚いたように声を上げる。

「見所のありそうな子が多いじゃない。そう、あなたたちはこれから義勇兵になるのよ。選択の余地はあるけどね」

ブリトニーはそう言って人差し指を立てる。

「アタシのオファーを受けるか、断るか。オファーの内容は、アタシたちオルタナ辺境

軍義勇兵団レッドムーンに加わること。まぁ最初のうちは、見習い義勇兵として参加してもらうことになるけどね」

彼（彼女？）の話を要約すると、この世界――グリムガルというらしい――には人間と敵対する種族やモンスターが多々いるみたいで、それらから街を守るのが辺境軍。そして、辺境軍だけじゃ手の回らない敵への攻撃を義勇兵団が行うらしい。

辺境軍ももちろん攻勢に出たりするが、補給などの制約がある。その点、義勇兵団は３人から６人程度のチームを組んでの少数行動が基本。それぞれが己の才覚、独自の判断で情報を収集し、敵を叩く。

「――これが、アタシたち義勇兵団レッドムーンの仕事よ」

ブリトニーの提案通り義勇兵団に加入するとなると、まずは見習いからスタート。支度金として銀貨１０枚、１０シルバーを渡されるらしい。きっとそのお金で色々と支度をするんだろう。

その後はモンスターを倒すなどしてお金を稼ぎ、銀貨２０枚、２０シルバーでブリちゃんから正式な団章を買うことができる。それで晴れて一人前の義勇兵になれる、というわけだ。

彼はそこまで言うと、俺たちの人数分の見習い章、そして銀貨が入っているのであろう皮袋を取り出した。

「はい。それじゃあ見習い義勇兵になる子はこれを持ってって。ならないって子は、そのまま野たれ死ぬことね」

彼の威圧的に俺たちを見渡す態度とは裏腹に、その目はとても真剣だった。それを見ると、嫌でも覚悟を決めさせられる。

「……まぁ、どうしようもないよな」

誰も動こうとしないので、とりあえず俺が最初にそれらを掴んだ。銀貨の入った小袋はずっしりとした重さがある。事実、このお金が俺の今後の生命線なのだ。軽いわけがないな。

一応皮袋の中身を確認しておく。三日月のマークが入った小ぶりな銀貨、それがちゃんと１０枚入っていた。

俺が皮袋を掴んだことをきっかけに、セイヤ、丸坊主が続く。そして他も次々と見習い章と皮袋をつかんでいく。

だが、マイとタケシは躊躇しているみたいだ。まあ確かに危険なことばかりみたいだし、義勇兵になるのは覚悟が必要だ。それでも、生きていくためには俺たちに選択肢なんてないに等しい。

「あなたたちはどうするの？　やらないなら出て行って欲しいんだけど」

ブリトニーは残った二人、マイとタケシに尋ねる。その目が決断を急かすようで、タ

ケシはおどおどしながらも慌ててそれらを掴んだ。
「わ、私は……」
一人残されたマイは、未だ決心がつかないのか目を瞑って俯いてしまう。
「――マイ」
たぶんマイは、争い事とは正反対の性格をしている。だからこそ、この瀬戸際で躊躇しているのだ。
それでも、このままだとブリトニーは本当にマイを追い出すだろう。右も左もわからないこの世界に、たった一人で。そんなことを考えたら、自然と声をかけていた。
「大丈夫だ。俺たちもいる」
「――っ……！」
そうして決心がついたのか、マイはぎゅっと目を瞑ったまま見習い章と皮袋を掴んだ。
「――おめでとう」
それを見届けてから、ブリトニーはわざとらしく笑みを浮かべて手を叩いた。
「これであなたたちは今から見習い義勇兵よ。頑張って義勇兵になってちょうだいね」
義勇兵……か。正直、道は長そうだ。

「……ショウヘイ、僕とパーティーを組まないか？」
不意にセイヤが言った。相手はあの丸坊主だ。確かに彼は背が高く力強そうで、義勇兵というのを聞いてからもどこか楽しそうにしていた。仲間としては心強いだろう。
「……いいだろう。お前となら生き残れそうだしな」
丸坊主――もといショウヘイもそう答える。
セイヤはそれに笑って頷くと、次々に勧誘を始めた。チャラ男に派手な女、メガネの女の3人だ。3人はそれぞれそれを了承し、何やら話し始める。
「――イブキ」
そして次に、セイヤは俺に声をかけてきた。
「君は、どうする？」
そう尋ねるセイヤからは、先ほどまでのお人好しそうな雰囲気はかけらも感じられない。俺の感じていた違和感はこれだ。このセイヤが、本当のセイヤなんだろう。たぶん、道中の会話や態度であたりをつけていたといったところか。
「……マイたちはどうするつもりだ？」
俺の予想が正しければ、マイたちはセイヤの選考から漏れた。マイやシュン、タケシはセイヤからそれほど話しかけられてはいない。確かに正直言うと、彼らはどこか頼りない。逆にセイヤが声をかけた者たちは、俺から見ても有望そうな人材だった。

そして――

「――彼らは……足手まといになる」

だから、チームには入れることができない。そういういうことだろう。予想通りの答えが返ってきた。

正直、ここはセイヤの誘いに乗るのがベストだ。十分な数のメンバーがいるってだけでも強みになるし、セイヤというリーダーもいる。現状、生き残るにはこれ以上の選択肢はないはずだ。

だが――

「……すまん、俺はやめておく」

仕方なかったとは言え、俺が見習い義勇兵になるよう勧めてしまったマイ。チームを組んだセイヤたちを絶望の表情で見ているタケシ。状況を理解できていないのかきょとんとした顔のシュン。俺には、彼女たちを見捨てていくことはできなかった。

「……そう言うと思ったよ」

俺の言葉を聞いたセイヤは悲しそうに、だけどどこか羨ましそうに笑う。

「……お互い、情報交換だけでもできるといいね」

最後にそう言ってセイヤたちはこの建物を出て行った。いっきに5人がいなくなり、どこか寂しく感じる。

「よ、良かったの？」
扉を見つめる俺に、マイがそう聞いてくる。どこか泣きそうなその表情に、思わず俺は笑ってしまった。
「むぅ……」
そんな俺を見て、彼女は拗ねたように頬を膨らます。だがそれもどこか子供っぽくて、俺は必死に笑い声をあげるのを我慢した。
「……はぁ～、いや、良いも何もないよ。ただ俺は、マイたちと組んだ方が楽しそうに思えたから残ったんだ」
マイだって俺の言葉が本気かどうかはわかっているんだろう。複雑そうな表情のまま俯いた。
「……それに、ショウヘイとキャラ被りだしな、俺」
俺が冗談めかしてそう言うと、マイはふふっと笑い声を漏らす。
「ん～よくわかんねえけど、俺たちは４人チームってことか？」
「まぁ、当分はそうなるな」
「よし、わかった！　頑張ろうぜ、タケシ！」
「……うぅ……だ、大丈夫なのかなぁ……？」
シュンの掛け声に、タケシは泣きそうになりながら呟く。

「とにかく、まずは外に出て情報収集だ。ほら、行こうぜ」
俺は3人の背を押して、出口へと向かっていく。そして3人が外に出たのを確認すると、後ろを振り向いた。
「所長、ありがとうございました」
一応ブリトニーに説明などをしてくれたことへのお礼を言っておく。団章を買いに来る時も会うのだから、コミュニケーションをとっておくのは大事だろう。
「――アナタに忠告しておくわ」
俺がお礼を言って外に出ようとしたら、ブリトニーが不意にそう言った。
「あなたたちより幾分前に来た子の中にも、有望な子がいたの。落ちこぼれ――いや、余り物をまとめて、なんとかチームとして形にした。リーダーとしても優秀だったみたいね」
その状況は、今の俺達に酷似していた。自分が有望だと自惚れるわけではないが、俺たち4人が余り物だというのはそのままだ。だからこそ、ブリトニーはこうして俺に教えてくれているのかもしれない。先達の経験を、俺たちへのアドバイスとして。
「そして彼は――」
しかし、なにかがおかしい。彼の顔を見て、無性に嫌な予感がした。真剣な表情の奥には、憐憫の色が見て取れたからだ。

「――すぐに死んだわ」

「……っ！」

その言葉は、半ば予想したものだった。

「アナタはそうならないことね。せっかくの戦力が勿体ないから」

義勇兵を数字としてみているような、そんな言葉。

だが、そう言う彼の顔にどこか寂しさのようなものを感じるのは気のせいだろうか。

「……忠告、感謝します」

俺はブリトニーに再びお礼を言うと、今度こそ扉をくぐった。

天然なシュンに気弱なタケシ、臆病なマイ。きっと、俺たち４人では見習いを卒業するのは時間がかかる。見習いである俺たちを喜んでパーティーに入れてくれるような、そんなもの好きはいないだろう。良くて有り金を毟り取られて放り出されるのがオチだ。

だが、それでも――

「――なんとかやってくしかない、か……」

こうして、グリムガルでの長い日々が始まった。

▪ｐｉｓｏｄｅ．２　月が赤い世界

＊

レッドムーン事務所を出た俺たち。去り際にブリちゃんから聞いた言葉は気になるものの、今はとにかく行動してなくてはならない。

そもそも俺たちはこのグリムガルという世界、オルタナという街についてほぼ何も知らない。もちろん伝手（つて）だってなにもない。だが聞いた感じだと、この世界についての〝情報〟は自分たちで集めるほかないようだ。

見た所セイヤたちはすでに付近にはいないみたいで、おそらく情報収集に行ったのだろう。

事務所の前で、俺とマイ、シュンとタケシの４人は佇んでいる。

「とりあえず、各自情報収集に行こう。何をするにもまずはこの世界、街について知らないと話にならない」

俺の言葉に頷く３人。情報収集の重要性は理解しているようで安心する。正直、シュ

ンなんかはその辺をわかっていなさそうな気がしたのだ。
マイとタケシは未だに不安そうにしているが、動けないほどではない。
「イブキはどーすんだ？　んで俺たちはなにすりゃいい？」
「俺は一人で色々と聞いて回ってくるから、３人は別れるか一緒に行くかして情報を集めてきてくれ。集合はこの事務所前。何があるかわからないからお金はできるだけ使わないようにして、飯は集合してから全員で食べよう。情報のすり合わせもしなきゃだしな」
義勇兵団章を買う以外にも、装備を整えたり生活していくために何かとお金は必要だ。情報を仕入れるまでは、迂闊にお金を使うわけにはいかない。そもそも物価すらわかっていないのだから、使おうにも躊躇するだろう。
とにかくまずは、先輩らしき人にアドバイスをもらう。物価や貨幣について知る。その二つがなによりも最優先だ。そのほかにも色々と必要なことがあるだろうが、初日はそんな感じで大丈夫……のはずだ。
再度３人が頷いたことを確認して、俺は歩き始めた。

とりあえず、俺は街の人に話しかけてみることにした。銀貨が一番小さい硬貨という

ことはなさそうだから、まずはそのことを聞こうと思っているのだ。

できれば両替を生業にしているような場所があれば利用したい。商会だったり、公的な機関なんかはどこかにあるだろう。そこならば詐欺だったりを警戒する心配はない……かもしれない。

義勇兵と話す時に万が一袖の下を求められたとしても、貨幣について知っていればどうとでもできる。ぼったくられるなら相応の対応をすればいいし、安酒の一杯くらいなら必要経費として割り切る。

そう考えて、俺は街を歩いていた。

しばらく歩くと、大きな広場に出た。

広場のようなところではたくさんの人が行き交っていて、一際豪華な石造りの建物もあった。堅牢そうなその建物の周囲にはこれまたたくさんの衛兵が立っていて、やけに厳重な警備体制を敷いている。たぶん、あの建物にはお偉いさんが住んでいるんだろう。すでに俺に目をつけているようで、数人の衛兵が注視してくる。あの手のものには近づかないのが一番だ。

俺はそう判断し、足早に広場を離れた。

広場から北のほうに進むと、妙に賑わっている場所に出た。通りの両側に屋台や露店がびっしりと立ち並んでいて、店先には食べ物やら衣類やら雑貨やら、多種多様な品物

が大量に並べられている。市場のようなものだろう。
このあたり一帯には店主たちの威勢の良い声が飛び交っていて、ものすごい活気だ。
「兄ちゃん、寄ってけ！」
「どうだい？　古着なら安くしとくよ！」
少しの間歩くだけで、どんどんと声をかけられる。とりあえず今は何も買う予定はないので、愛想笑いを浮かべつつ通り過ぎていく。
品物にはそれぞれ１Ｃだったり５Ｃ、１４Ｃとか書いてあるものもある。たぶん、これが値段なんだろう。
食べ物を扱う店からは香ばしい匂いが漂ってきて、嫌でも空腹を感じざるを得ない。
「……ここに来てから何も食ってないもんな」
ぽつりと呟く。マイたち３人も空腹を感じているかもしれない。日が傾く前にみんなのところに戻らないとな。
「おう、兄ちゃん義勇兵かい？　串肉はどうだい？　食わなきゃ身体は動かなくなっちまうぞ」
俺が腹を抑えていたのを見ていたのか、串肉屋のおっちゃんが話しかけてくる。気の良い人みたいで、豪快な笑顔を浮かべている。
「なあおっちゃん、銀貨を両替できたりするかな？　今銀貨しか持ってなくてさ」

この人なら大丈夫かな、と根拠のない考えだが、思い切って聞いてみることにした。

銀貨が一番低い価値の硬貨ということはほぼありえない。周囲の人の様子を見ていると、銀貨より一回りか二回り小さい茶色っぽい硬貨を使ってやりとりをしていたのだ。

「お、銅貨は持ってないのか？　お釣りはあるっちゃあるんだが……。いっそ、ヨロズ預かり商会で両替してきてもらったほうが早いな」

「ヨロズ預かり商会？」

何やら知らないワードが出てきたぞ。いや、知らないことばっかなんだけど。

「なんだい、兄ちゃんも知らないのか。義勇兵ってのはやっぱ変わり者が多いんだなぁ」

前にも俺みたいな奴がいたのか、おっちゃんは不思議そうにそう言うと色々と教えてくれた。

ヨロズ預かり商会。そこでは両替だったり手数料を払うことでお金などを預けることもできるらしい。結構歴史あるところのようで、街の人からは絶大な信頼を得ている。

他にも数人の人に評判を聞いてみたが、それは間違いないようだ。

場所も教えてもらっていたので、ひとまず俺はヨロズ預かり商会に向かうことにし

た。

結果からして、ヨロズ預かり商会で無事両替することができた。１シルバーが１００カパー（銅貨１００枚）という貨幣価値で、もともと銀貨を入れていた皮袋は両替した１００カパーを入れただけでパンパンになってしまっていた。

また、ヨロズ預かり商会では金を預ける以外にも物品を預けることもできるみたいで、金の場合は預ける金額の百分の一、物品の場合は鑑定評価額の五十分の一の手数料を取られるみたいだ。確かに金を持ち歩くだけでも大変だ。今後稼ぐようになってきたら、ヨロズ預かり商会をさらに利用することになるだろう。

余談だが、ヨロズ商会の会頭はヨロズという名前（襲名姓らしい）の１０歳くらいの女の子だった。やけに堅苦しい口調で話していた彼女だが、なぜか無性に懐かしくなって頭を撫でてしまった。撫でられた彼女はキョトンとした顔のまま「君のことは無礼者その２と記憶した」とか言っていたが……その１がいるのか。きっと、そいつとは仲良くなれそうだ。

「さて、次は義勇兵っぽい人に話を聞いてみるか」

ヨロズ商会を後にした俺は、気を取り直して一人呟く。

街を歩いているだけで何度もそれっぽい人は見かけた。もう少し探せば人の良さそうな義勇兵は見つかるだろう。

しばらくそうして歩いていると、チャラそうな義勇兵っぽい人が歩いているのがわかった。装備を見た限りだと、俺たちよりも少し先輩なんだろう。一人みたいで、特に急いでいる様子もない。

うん、彼に聞いてみよう。

「あの、義勇兵の方っすか？」

俺は彼に近づき、そう声をかけた。

「んん？　おおおっ!?　もしかして、新人ちゃん!?」

彼は俺の出で立ちを見ると、テンション高めに答える。なんというか、見た目通りの話し方をする人だな。

「はい、さっき見習い義勇兵になったばっかで――――」

「おおう！　俺ちゃんもそういえば先輩なんだもんなぁ～。俺ちゃんの名前はキッカワ！　いいよいいよ、なんでも聞いちゃって！」

チャラそうな男――――キッカワは、俺の言葉に食い気味でそう言う。すごくテンションの高い人だが、悪い人ではないんだろう。

その後彼としばらく話したのだが、彼は俺たちの前の前にここに来たらしい。そこか

ら色々と無駄な話をされつつ、有用な情報も多々聞くことができた。

なんでもここにはギルドという同業者の組合があり、そこは権利を保護するための団体で互いに研鑽するための組織みたいだ。

鍛治や調理師といった非戦闘系のものから戦士、魔法使い、神官、聖騎士、狩人、暗黒騎士、盗賊などといった戦闘職のものまであるそうだ。

この地である仕事をするには、そのギルドに入らないといけない。ギルドに入らないで勝手に仕事をしたりすると、必ずギルドが横槍を入れてくる。そのため、ギルドに所属していない者には誰も仕事を依頼したりしないとのこと。

また、基本的に　掛け持ち不可みたいだ。だがその代わりというかなんというか、ギルドは後進の育成にも力を入れている。ギルドに入れば、７日間の初心者講習を受け、その職業の基礎を即席で叩き込まれるのだ。

もちろん、ただで入れてもらえるわけじゃない。どのギルドも、入るためには銀貨８枚、８００カパーものお金を払う必要はあるみたいだ。

それと、パーティーでは神官と戦士は重要な職業だとのこと。確かに壁役（タンク）である戦士と治療者（ヒーラー）である神官がいなくては戦線を支えることは難しい。

ここまでを教えてもらうのだいたい一時間くらい。途中からは酒場みたいなところ連れ込まれ、なぜかお酒をおごってもらってしまった。うん、この人たぶん本当に良い

人だ。

「いやぁ～後輩っていいもんだなぁ！　ここ、シェリーの酒場って言うんだけど、俺ちゃんよくここにいるからさ。なんかあったら顔出してくれれば、バリバリ相談に乗っちゃうよ！」

「なんか悪いな。色々教えてもらったうえに酒までご馳走になっちゃって」

話しているうちに、キッカワは俺にため口で話すように言ってきた。たぶん同年齢くらいだしとの理由。それに、敬語を使ってると舐められるだとかなんとか。

真偽は定かではないが、キッカワの言うことなら覚えておいても良いかもしれない。元々敬語は得意じゃないしな。

「いいっていいって！　なんなら、いつか後輩くんの稼いだお金で俺ちゃんに奢ってちょうだい！」

「おう、すぐに稼いで来るよ」

俺は最後ももう一度お礼を言って、酒場を後にした。彼は久しぶりの休みらしく、このまま夜になるまでチビチビ飲んでいるみたいだ。

うん、キッカワに声をかけたのは正解だったな。少しテンションが高くて驚いたが、すごく付き合いやすい人だった。マイたちが待っているのに酒場に入るのは心苦しかったが、これは仕方がないだろう。しかも奢ってもらっちゃったので、何も言えない。

正直、ギルドに加入することも含めて考えると酒のお金は結構負担になる。だが、今後もシェリーの酒場は重要な情報収集の場所になりそうだ。……これは必要経費として割り切るしかないか。

現在俺は、事務所に向かって歩いている。街は入り組んでいて迷いやすそうだが、俺は物覚えが良いらしく迷うことはなかった。自分でも意外だと思ったけどさ。

時刻はだいたい午後5時を少し過ぎたくらいだろうか。時間は鐘の音が鳴るのを聞いて判断する。時鐘は午前6時から午後6時まで2時間置きに鳴らされるみたいで、それを基準に行動するみたいだ。4時の時鐘が鳴ってから体感で1時間くらい経っているので、たぶん正しいだろう。個人用の時計なんかもあるらしいが、ドワーフだかの細工師しか作れないみたいでとても高価なものらしい。これらもキッカワに教えて貰った。

きっと3人を待たせていると思い早足で戻ったが、予想に反してまだ誰もいなかった。まだ誰も帰ってきていない、もしくは俺が遅かったからどこかに行ってしまったのだろうか。前者なら良いが、後者となると俺も迂闊に動けない。

「さて、どうしたものか……」

なんとなくだが、ブリトニーに会うのは気まずかった。それに〝見習いを卒業すれば〟色々とアドバイスをしてくれると言っていたので、今また会ったとしてもマイナスだ

ろう。

結局俺は、今後の予定を立てながら時間潰すことにした。

実際、考えることは多い。４人でチームを組むなら各自の役割も重要になってくるし、宿の問題もある。キッカワに教えて貰った限り、見習いにオススメするのは義勇兵宿舎だそうだ。

義勇兵宿舎は正式な団章があれば無料で利用でき、四人部屋と六人部屋の二種類がある。何人で泊まろうと見習い義勇兵は一部屋一泊１０カパーだ。一応沐浴部屋も付いているみたいで、人気（にんき）はないみたいだがキッカワの同期のチームも使っているらしい場所らしい。

当面はそこで生活することになるだろう。３人が戻ってき次第、早めの夕飯を食って宿舎に行ってみないとな。

どれくらい一人で待っていたのだろうか。先ほど午後６時の鐘が鳴って、いつの間にか日が落ち始めていた。さすがに遅すぎる。そう思ってそろそろ探しに行こうかとしていたところ、やっと3人が戻ってきた。

「ご、ごめん、イブキくん！　もしかしてずっと待ってたの!?」

先頭を歩いていたマイは焦った様子で俺に駆け寄ってくる。その後ろから、気まずそうな表情をしたタケシとぽかーんとしているシュンが付いてきている。

思うところがないでもないが、それは一旦置いておこう。タケシの表情も気になるしな。

「いや、いいけどさ。なんかあったのか？」

俺がそう問いかけると、マイはタケシをちらりと一瞥して気まずそうにうつむく。タケシはなぜか怯えていて、俺と目を合わせようとはしない。

「いやさぁ～、俺ら結局どうすればいいかわかんなくて、あのままずっとここで待ってたのよ。だけどいつまで経ってもイブキが戻ってこないからさ」

シュンの物言いに、少しカチンと来る。たぶん、彼は悪気があって言っているわけではない。短い間しか付き合いがないが、それくらいはわかっている。だが、戻ってこないって言うが、俺はしっかり情報を集めてたんだぞ？　仕方がないんじゃないのか？

「んで、タケシが「僕たちを置いて、どこか行っちゃったんじゃ……」とか言って、俺たちビックリしちまって。もしそうだったらやばい、ってことで３人で色々歩いて飯食ってきた。そんで結局どうしようもないってんで、一旦ここに戻ってきたってわけ。いや、飯食うだけでも結構値段するのな」

シュンの独特な口調の説明に辟易しつつも、俺は思わず呆れてしまっていた。疑心暗鬼になっているタケシはもちろん、それにホイホイとつられてしまったマイとシュンにもだ。俺が大きくため息を吐いたにを見て、マイとタケシはびくりとする。

そもそも各自で情報収集をしよう、と言っていたはずなのに、ずっとここにいたらしい。その挙句、できるだけお金は使わないようにしようって注意していたのに勝手に飯食いに行っちゃうし。

そしてなにより、シュンの最後の言葉が気になる。夕飯を食うくらいでそんなに高くなるはずがない。あの結構食べ応えのありそうな串焼きだって4カパーで買えるのだ。

「……ちなみに、飯っていくらかかったんだ？」

「んん？　銀貨一枚で3人分食えたぞ。俺が払っといた！」

どうだ、と言わんばかりに胸を張り、シュンはそんなことを言う。キッカワと飲んだ酒でも10カパー程度だった。軽食もだいたいそのくらいだ。だから、余程の贅沢をしなければ普通銀貨一枚で相当な日数を暮らしていけるだろう。

……こんなことは言いたくないが、セイヤが正しかったのかもしれない。

「……とりあえず宿に行こう。安く泊まれるところを教えて貰ったから、そこで仕入れた情報を話すよ」

色々言いたいことはあったが、喚き散らしたところで何の得もない。3人はきっと、慣れない環境で不安定になっているだけだ。時間をかけて慣れていけば、チームとしてもまとまってくれるはず。正直これからのことを考えると頭痛がするが、根気良くやっていくしかないんだろう。

俺は再び大きなため息をつきつつ、教えられた宿へと歩き始めた。その後ろを3人が付いてくる。宿に向かう途中で買った串焼きに齧(かぶ)り付きつつ、俺は空を見上げた。

夜の帳が降り始めたそこには、真っ赤な月が輝いていた。

▪ｐｉｓｏｄｅ．３　ギルド

俺たちが義勇兵宿舎に着いた頃には、周囲はすでに真っ暗になっていた。義勇兵宿舎が人気がないというのは本当だったようで、俺たち以外には人影が見えない。

とりあえず俺が代表してお金は払おうと思う。四人部屋を二つ。男は三人で、マイは一人で使うことになるけど仕方がないだろう。その点は道中簡単に説明しておいて、納得してくれている。

「あ～とにかく、手続きしちゃうからちょっと待っててくれ」

シュンはともかく、ここに来るまでほとんど言葉を発しなかったマイとタケシにそう言って俺は受付っぽいところに向かおうとした。

すると、そこにぽわわんとしたおさげの少女が現れた。彼女の後ろには魔法使いっぽい服装をした女の子もいる。きっとここで生活している義勇兵の人だろう。手にはタオルやその他いろいろと入った桶を持っている。

……もしかして、これから沐浴するところだったか？
「あれぇ～新人さんたち？　また来たんねんやなぁ」
「……」
ぽわわんとした子が独特の言葉遣いでそう言う。やはり俺たちの先輩みたいだ。後ろの気弱そうな彼女は何も言わずおどおどとしている。
「どうも、俺はイブキ。一応、今日からここで生活しようと思ってて。こっちはチームのメンバーの――」
「マ、マイです」
「シュンでーす」
「……タ、タケシ……」
俺の言葉に三人はそれぞれ自己紹介をする。先輩義勇兵なら繋がりを持っておくのも重要なことだろう。
「うちはユメってゆうやんかぁ～。こっちの可愛い子がシホル。よろしくなぁ」
ユメと名乗ったおさげの少女はそう言い、シホルという魔法使いの少女に頬ずりを始める。シホルはそんなユメに戸惑っているようだが、どこかまんざらでもなさそうな表情だ。
……なんだろう。義勇兵っていうのは個性的なキャラの人が多いのだろうか？

「ねえねえ、もしかしてその子、一人で四人部屋泊まるん？」
「は、はい。そうです……」
ユメの言葉にマイは答える。確かにそのつもりなんだが、それがどうかしたんだろうか？
「えっとなぁ、やっぱり夜に一人っていうんは寂しいと思うねんよ。うちも最初は寂しい～ってなって、シホルをぎゅ～って抱きしめて眠ったりしてたやんかぁ」
ユメの言葉に、シホルは恥ずかしそうにアワアワと慌て出す。
……確かに、そういう可能性は考えていなかった。マイはただでさえ不安定というかそんな感じだ。見知らぬ世界での初めての夜、たった一人だと相当しんどいだろう。
俺はユメに言われて初めてその可能性に気がついた。……やっぱり、俺には荷が重い気がする。まとめ役なんて向いていない。
どうするべきか俺が考えていると、ユメが続けて口を開く。
「だから、マイちゃんが良かったらユメたちと同じ部屋にならん？　マイちゃん可愛いし、妹みたいでええやん。ほら、それに〝いちごいちご〟っていうやねんかぁ」
「ユ、ユメ……？」
……それを言うならたぶん、一期一会だろう。いや、突っ込まないが。
ユメの言葉にシホルが驚いている。ユメの独断みたいだ。正直俺も驚いている。な

んというか彼女は警戒心がなさすぎる気がするぞ。
だが、ありがたい申し出であることは確かだ。
「えーと、それはありがたいと思うけど……マイはどうだ？」
「ユ、ユメさんがいいなら……一緒の部屋に置いてもらえると、すごく安心できます」
「そやろぉ～？　なら、うちとシホルとマイちゃんで同じ部屋や」
「……うん、それでもういいよ……」
ユメの言葉にシホルは諦めたようにため息をつく。……なんか、苦労してそうだな。
あれよあれよという間にマイを連れて部屋へと戻ろうとしているユメたち二人。
「ありがとう。一応一泊１０カパーってことだから、三分の一はこっちで出すよ。そこは甘えられないし。とりあえず、今日の分のカパーは受け取っておいてほしい」
俺は若干慌ててそう言うと、皮袋から予め両替しておいたお金を４カパー取り出す。そしてそれをユメへと手渡した。
一泊してみて、ここに泊まり続けるかどうかは改めて話し合おうと思っている。その場合は、ある程度まとめて払わないとな。
「んん～そやったら、これ返しとくよ。見習いのうちはお金かかるしなぁ。節約しなきゃあかんよ」
ユメはそう言って俺が手渡した４カパーのうち３カパーだけを受け取り、１カパーは

返してきた。

……ここは受け取っておくべきだろう。本当、出会った先輩たちが良い人ばかりで良かった。

「……ありがとう」

「ええってええって。それじゃあ、うちらはマイちゃん部屋に案内したら、そのまま一緒にお風呂入ってくるよ。明日の朝にでもハルくんたち紹介するなぁ」

「よ、よろしくお願いします」

マイは嬉しそうにユメにお礼を言い、一緒に歩いていった。ハルくんというのは、ユメのパーティーの一人なんだろう。確かにここまでしてもらったのだ。ユメのパーティの人たちにもお礼は言わないと。

「……とりあえず、受付に行ってくるよ」

「俺も一緒に行くよん」

「……」

残された俺たち三人は、そうして一緒に受付へと歩いて行った。

翌朝、俺はハルヒロと言うユメのチームリーダーにお礼を言って、いろいろと教えて

もらうことができた。ランタとかいうやつがうるさかったが、ハルヒロたちが何も言わないので俺も黙っておいた。

驚いたことに、彼らがキッカワの言っていた同期のチームだった。もう一組いるみたいだが、彼らはここには泊まっていないみたいだ。

ちなみに四人部屋を借りたのだが、ベッドは藁を集めただけの簡素なもので、部屋自体も隙間風がひどかった。ぶっちゃけ、正式な義勇兵から人気がない理由がわかった気がした。

それから、俺たちはチーム内でお互いの持ち金を確認しあい、各々が（というかほぼ俺が）集めた情報を共有しておいた。ハルヒロから聞いた話も合わせて情報の真偽を確かめておいたから、比較的精度は高いだろう。

「さて、そういうわけだから、誰がどの職業に入るか決めよう」

現在俺たちは、宿の中庭みたいなところにあるテーブルとベンチに集まっている。

俺は三人にそう言った。当初はモンスターと戦うことに消極的だったマイとタケシも、今ではどうしようもないことは理解したのか真剣に考えている。

「最低でも、戦士と神官が一人ずつ欲しい。あとはできれば遊撃兼準壁役の聖騎士と、遠距離攻撃ができる魔法使い、斥候ができる狩人か盗賊も欲しいな」

考えれば考えるほど、たった四人という制限が厳しい。戦士と神官、聖騎士がいれば

なんとかなるか？

「ぼ、僕は、できれば神官が良い……かな。た、戦うのは、怖い……」

「私は……魔法使い……かな。シホルさんもそうみたいだし……」

タケシが申し訳なさそうにそう言い俯き、マイもそれに続く。……確かに、タケシやマイに前衛職は厳しそうだな。

「んん～ぶっちゃけ俺はなんだっていいんだよなぁ。イブキは何やるんだ？」

「俺は戦士をやろうと思ってる。身体もでかいし、適任だろ」

シュンの問いに、俺は元々考えていたことを話す。身体の太さでいったらタケシもまあありっちゃありだと思ったが、性格が向いていない。身長もそれほど高くはないしな。消去法で言っても、俺がやるしかないだろう。

「そんなら俺は狩人やろうかな～。カッコ良さそうだし」

シュンはあっけらかんとした表情でそんなことを言う。まあシュンが狩人をやってくれるなら心強い。良くも悪くもマイペースなシュンなら、比較的落ち着いて立ち回ってくれるはずだ。

「よし、それならマイが魔法使い、タケシが神官、シュンが狩人で俺が戦士。これでいいな？」

全員が頷く。欲をいえば聖騎士や盗賊が欲しかったが、こればっかりはしょうがな

い。最悪落ち着いてから考えればいいだろう。
「じゃあ、各自でギルドに行って習ってこよう。お金はできるだけ使わないようにな。講習後、門のところで待ち合わせってことで」
そう言って、俺たちは別れた。
七日間の初心者講習は泊まり込みで行われる。再び会うはそれが終わってからだ。
この期間のうちに、できるだけ技術を吸収する。それが今後の生死を分けるかもしれない。

そうこう考えているうちに、俺は戦士ギルドの前にたどり着いた。比較的広い石畳の道沿いにあるここは、情報通り荘厳な空気のある石造りの建物だった。戦士ギルドと書いてある看板が出ているから、ここで間違いないだろう。
「すみませーん」
扉の前で俺はそう声をかける。勝手に入るべきか迷ったのだが、一応声をかけておくことにしたのだ。
しばらくすると、軋んだ音を立てて扉が開いた。中からは髭面の大男が現れ、面倒そうに俺を見る。

「なんだ、坊主？　なにか用か？」
「はい、ギルドに入れてもらおうと思って来ました」
「おお、今日は二人目だな。中に入れ」
だが、俺がギルド加入希望者だと言うと嬉しそうに笑った。二人目ってことは、セイヤたちのグループの誰かかな。……だとしたらたぶん、ショウヘイだろう。
中はホールのようになっていて、壁際にはカウンターが一つある。奥のほうには通路があって、いくつか置かれたテーブルでは数人がジョッキで何かを飲んでいる。
俺は髭面のおっさんに空いているテーブルへ座るよう促された。特段断る理由もないのでそれに従い、俺は木の椅子に座る。
「んで、うちに入るってことは、しっかり金も用意してあるんだな？」
「あ、はい。ここに」
俺はそう言って皮袋を取り出し、中から銀貨八枚を取り出した。これで残金は1シルバーに諸々あって34カパー。銀貨一枚を使ってしまったシュンと俺のカパーを分けたため、残ったのはこれだけだ。マイとタケシは……正直不安だったが、10シルバーをそのまま持たせている。
「どれどれ……ふい、ふう、みい……うん、八枚あるな。よし、それじゃあ――」
髭のおっさんは銀貨を数えると、両手を広げて笑顔を見せた。

「――ようこそ、戦士ギルドへ」

＊

七日間の初心者講習は、あっという間に終わった。

俺は七日間かけて、あのガルバスという名前の髭のおっさんに徹底的にボコボコにされた。体育会系のノリといえばいいんだろうか。ガルバスは脳筋な考え方をするおっさんで、ひたすら身体で覚えさせられたのだ。敵がこうしたらこう、ああしたらこう、みたいな感じで攻撃してきて、俺がミスったら攻撃がクリーンヒット。おかげで身体中あざだらけだ。

装備はといえば、鎖帷子に皮製の手袋やグリーヴ、皮のヘッドギアにブーツを中古で譲ってもらえた。使い手がいなくなった装備をギルドで保管しているらしく、それをもらえた感じだ。気になってガルバスに「使い手はどうなったんだ?」と聞いてみたが、気持ちの良い笑顔ではぐらかされた。……あまり想像しないでおこう。

本当は兜も欲しかったのだが、そこまで贅沢は言ってられない。

そして、俺の武器はハルバードという斧槍だ。だいたい2メートルくらいか。俺の身

長よりも少し大きい。重量は結構あるが、慣れてしまえばそちらのほうが使いやすかった。

大剣だったりが人気らしいが、ハルバードのほうが間合いが広く取れるため比較的広範囲を牽制をできる、という考えもあった。俺たちのパーティーには壁になれるのが俺一人しかいないからな。敵が後ろに流れそうになっても、ハルバードの間合い内ならなんとか惹きつけられるだろう。

それ以外には特に荷物らしい荷物は持っていない。薬などの購入も考えたのだが、いかんせん所持金が足りない。目的地であるダムロー周辺ならば一時間程度ということもあり、今回は大荷物を持っていく必要はないという判断だ。

この七日間初心者講習で学んでことは、あくまで知識だ。実践を通して経験を積むことで、初めて自分のものになる。それを七日間でガルバスに耳にタコができるほど言われ続けた。

「……正直、ここまでしんどいとは思わなかったな」

ギルド内の訓練場と部屋を行き来するだけの毎日だったので、こうして外に出て日の光を浴びると久しぶりに穏やかな気持ちになれた。

「みんなとは門のところで集合だもんなぁ。なんか久しぶりで新鮮だ」

俺は久しぶりに見る街並みを楽しみつつ、門へと向かった。

門の付近には義勇兵っぽい人がたくさんいる。俺がいるのは北門で、ここからダムロー旧市街周辺まで行き、付近の森でゴブリン狩りに向かう予定だ。四人でもゴブリン程度なら倒せるだろう。たぶん、きっと。

誰かすでに来ていないか周囲を見渡すと、見覚えのある顔を見つけた。ハルヒロたちのパーティーだ。義勇兵宿舎で顔を合わせた五人に、見たことのない神官の女性が一人いる。

俺が挨拶のために近付くと、ハルヒロが俺に気付いた。

「あ、イブキ」

「おす。ハルヒロたちもこれからか？」

「まあ、そういう感じ……かな。最近はサイリン鉱山でコボルトを狩ってる、っていうか」

サイリン鉱山か。俺たちからしたら、だいぶ先のことだろうな。

「イブキくんたちは、これからが初めてなんやねんっけ？　マイちゃんはまだおらんのぉ？」

「ここで待ち合わせてるんだけど、まだ来てないって感じかな。そういえばマイは、シホルを目標に魔法使いになるって言ってて、魔法使いのギルドに行ったみたいで」

「ほぇ～そーなんやぁ～。シホル、お師匠さんやんかあ、うりうり～」

「え、わ、私……？　その、私、太ってるし……」
ユメは前に会った時と同じく、ぽわわんとしている。シホルはいつも通りおどおどしつつ（たぶん、俺に怯えてる）、よくわからないことを呟く。
「あの、イブキくんは、戦士に？」
モグゾーというハルヒロのパーティーの戦士が俺に聞いてくる。この人は俺の先輩になるんだよな。身長は同じくらいだけど、彼のほうが身体は大きい。なんというか、熊みたいで頼り甲斐がありそうだ。
「俺らのパーティー、俺以外あまり適正がなくって……。それに、俺の体格も生かせるかなって」
「つーかよ、イブキ。お前後輩だよな、俺たちの？　敬語使えってんだ、敬語ぉ」
俺がモグゾーにそう言うと、今まで黙っていたランタがつっかかってくる。いや、ランタの言うことはわかるんだけどさ……。
「ハルヒロとかユメがタメ口でいいって言ってくれたからさ。歳も同じくらいだろうからって」
「え、おぉう。べ、別に睨まなくたっていいだろ？　コミュニケーションだよ、コミュニケーション！」
俺は睨んだつもりはないんだが、ランタはなぜか怯えてしまった。まあ、別にいいか。

「そういえばさ、イブキのパーティーって、他はなんの職業なんだ？」
「えーと、タケシが神官で、シュンが狩人かな」
「神官……？」
俺の言葉に神官の女性が怪訝そうな顔をして何かを呟いた。だが、そのまま何も言わずに元の無表情に戻る。なんだか、やけにその表情が気になった。というよりは、彼女にどこか――。
「――イブキ……」
と、そこでハルヒロの声がした。そちらを向くと、ハルヒロが真剣な目をして俺を見ている。少し控えめなイメージを持っていたが、今の彼は経験を積んだ義勇兵のそれだ。少なくとも、俺にはそう見えた。
「たぶん、これからゴブリンを狩るんだろうけど、油断だけはしないほうがいい」
そして、一言。その言葉には、先達ゆえの重みがあった。ユメやランタ、シホル、モグゾーの顔が少し曇ったことから、ゴブリンとの戦いで何かあったのかもしれない。
「……ありがとう。その忠告、絶対忘れない」
言葉以上の何かを感じ、俺は神妙にそう返す。
「……なんていうか、さ。説教みたいになっちゃったな。そんなつもり、なかったんだけど……。それじゃあ、俺たちはもう行くよ」

ハルヒロは照れくさそうにそう言うと、全員で北門から出て行った。
神官の女性のことがひっかかったが、今はとりあえずいいだろう。
「あ、あの、待たせちゃったかな……？」
「お、マイか。俺もさっき来たばっかだから、大丈夫」
俺がぼんやりとしながら立っていると、マイがやってきた。
黒っぽい三角帽子に同じ色のローブを着ていて、先ほどまでいたシホルとほぼ同じ格好をしている。
「まだ二人は来てないの？」
「ああ、まだ……いや、今来たみたいだ」
俺とマイが話していると、通りからシュンとタケシがやってくるのが見えた。シュンは狩人らしく動きやすそうな革鎧を着て、腰に鉈のようなものを差している。背中には狩人の象徴ともいえる武器、弓も背負っていて、すごく狩人っぽい。
タケシはというと、怯えたように周囲をキョロキョロと見回していた。俺たちに気付いていないのか？　神官服を着ていて腰にはスタッフを下げているので、一応それなりの神官に見える。体型は七日前と変わってないけども。それに、タケシはやけに顔色が悪かった。
「おーす、イブキ、マイ！　久しぶりだな！」

「は、はやく行こう……」
元気の良いシュンに比べ、タケシはやはり体調が悪そうだ。遅れたことを気に病んでいるのか急ごうと言ってくれるが、少し心配だ。ハルヒロからも注意されたし、油断はできない。
「タケシ、大丈夫か？　体調悪いなら、後日改めてって感じでも大丈夫だぞ？　みんなまだ、お金は残ってるだろうし」
「い、いや、大丈夫……！　少し疲れてる、だけだからさ……」
二人に挨拶を返してから、タケシにできるだけ優しく問いかけた。
だが、タケシは頑として譲らない。まあ自分のことが一番分かっているのは本人だろう。
ここは彼の心意気を尊重するべきか。
「……わかった。それならもう何も言わない。ただ、どうしても厳しくなったら言ってくれ。タケシだけじゃなく、みんなが危険なことになる」
俺の真剣さを感じ取ったのか、タケシはこくりと頷いた。
他の二人も見ると、同じく神妙そうに頷いている。
「――よし。それじゃあ、行こうか」
俺はそう言って、みんなの先頭に立って歩き始めた。

▪ p.i s o d e. 4

＊

ダムロー周辺まではだいたい一時間くらいかかる。戦士ギルドで書き写させてもらった簡易的な地図を見ながら、俺を先頭に隊列を組みつつ俺たちは歩いていた。

柔らかな空気を胸いっぱいに吸いつつ、ゆっくりと周囲を見渡す。このあたりはモンスターの跋扈する世界だとは思えないほど長閑（のどか）で、ペビーやミルミなどが楽しそうに走り回っている。

このあたりのペビーは基本的に真っ白な体毛をしていて、ときには人に慣れてしまうほど温和な生き物だ。ただし敵意には敏感なので、無理に近付くと逃げられてしまう。もっとも、群れから離れたペピーは獰猛で危険らしいから注意が必要なんだけど。

ミルミなんかは街中にも生息してるし、ペットみたいなイメージだ。小さいアリクイみたいな。……んん？　アリクイってなんだ？　知らない単語が、自然と頭に浮かんで

きた。

このあたりはもともと辺境と呼ばれるような土地じゃなかったらしい。人間族が反映していた時代はたくさんの国があった。

だが、不死の王（ノーライフキング）と呼ばれる者が現れてから状況が一変。不死族（アンデッド）という新たな種族を生み出し人間族に敵対する種族を束ね、戦いを挑んだのだ。結果、人間族はあっさりと破れて、滅びるか天竜山脈の南へと逃れた。

その後、不死のはずの不死の王（ノーライフキング）が崩御した時の混乱が起こるまで、このあたりには人間族の居場所はなかったみたいだ。

そんなことを含め、道中はフォーメーションの確認やお互いが使えるスキルを確認して時間を潰した。そして色々と話し合った結果、当初の予定どおり今日は森にいるはぐれゴブリンを倒してみるということになった。その成果次第で今後のダムローに行きの時期を考えよう、といった感じだ。

帰り道に獣を狩って帰ろうかという話にもなったのだが、狩人でもあるシュンが反対。というのも、ギルドの方針なんだとか。明確には禁止されているわけではないのだが、実習で触れ合ったこともあり複雑な感じらしい。まあそれは全然稼ぎがない時の最終手段だな。

そうこうしているうちに、目的地である森へとたどり着いた。広葉樹らしい木々や雑

草が生い茂り、獣道すらろくに見当たらない。地面はボコボコとした凹凸ばかりで、ふかふかだったりグニュグニュしたりしていてとにかく歩きにくい。俺やシュンはまだしも、マイとタケシは歩くだけでも一苦労だ。

今は狩人のシュンに斥候ということで先頭を歩いてもらっている。マイとタケシにペースを合わせているので、進むスピードはだいぶ遅いが。

一応はぐれゴブリンはよく水場に現れるという情報を得ていたので、そこらを中心に探索している。そのため水場付近でゴブリンを待ちつつ休憩もできるので、俺たちの疲労はそこまで溜まってはいなかった。あくまで、肉体的には。

それに、俺のハルバードでは木々が邪魔で十全に扱えないので、開けた水場のほうが有効というのもある。

「……いた、ゴブリン一体！」

森に入ってからしばらく経過し、このまま帰るのも視野に入れ始めていた頃。何度目かの水場でシュンがそう声を上げた。今まで2体以上のゴブリンは見かけたのだが、初戦でいきなり2体っていうのは不安だった。ハルヒロの言葉もあったし、気を抜くわけにはいかない。

だから、このチャンスは逃せない。

ゴブリンは水場で水を汲んでいるのか、俺たちには背を向けている。周囲に他の敵影

はなく、ゴブリンの武装は錆びたメイスの一つだけ。後は背負った袋とボロボロの兜をかぶっているくらいだ。静かに近付いての奇襲も考えたが、失敗した時のリスクがでかい。ここは正面からぶつかってみて、無理そうだったら撤退という形にするか

「まず俺が突っ込んで正面を抑える。シュンは俺と一緒に突っ込んで、ゴブリンの死角を取るように動いてくれ。マイは俺たちの援護で、タケシは周辺を警戒しつつマイを守っていてくれ。俺の後ろから離れるなよ」

俺もたぶん、緊張している。みんなもそうだろう。顔がこわばっている。いや、俺もか。

命と命のやり取りだ。油断は禁物。

「これは初めての実戦だ。油断せず行こう!」

三人が頷いたのを確認し、俺たちは動き始めた。周囲を囲むように散開して、位置につく。

攻撃開始の合図は俺の声。

背中から下ろしたハルバードを両手で持ち、深呼吸。

ハルバードは2メートルほどの長さで、先端に刺突用のスピア、側面に小振りな斧があり、その反対側には鉤爪と呼ばれるフックが付いている。先端に重量がかかっているためより重く感じるそれを、両手でゆっくりと握り直す。

そして、再び深呼吸。

よし――

「――うおぉぉ！」

雄叫びを上げつつ、俺はゴブリンへと接近した。

俺の雄叫びに驚きつつも、ゴブリンは振り返ると腰に吊るしたメイスを抜く。否、抜こうとしていた。

だが、その動きはあまりにも緩慢で、迂闊だった。

ゴブリンがメイスを抜こうと下を向いているところを、俺はハルバードで殴りつける。左足を力強く踏み込み、身体ごと捻ってスイング。講習中、毎日振るい続けた型通りに。寝る前と起きた後、毎日自主練した通りに。全力で。

「ギギャアァッ！」

ハルバードの斧部分がゴブリンの頭にめり込むのと同時に、ゴブリンからは苦痛の声が漏れた。俺の攻撃で、兜を凹ませながらゴブリンがぶっ飛ぶ。凹んだ兜の隙間からは赤い血が滴っていて、こいつらも生きているんだってことを理解させられた。

「や、やったか!?」

「いや、まだだ！」

吹っ飛んだ先にいたシュンの叫び声に、俺は大声でそう返す。想像していたよりも手

応えがなかった。このぬかるんだ地面に足を取られて、踏み込みの力が拡散したのだろう。

俺の言葉通り、ゴブリンはフラフラとよろめきながらも立ち上がる。それでもダメージは入っているようで、ゴブリンは身体を揺らしながら威嚇するように声を上げている。その声はとても必死で、生きたいって叫んでいるようで、苦しかった。

「……っ、シュン、牽制！　マイは魔法を準備！」

「わ、わかった！」

シュンはそう返事をしつつ、剣鉈をふるって立ち上がったゴブリンと一定の距離を保つ。

一方のマイからは、返事がない。

「マイ、どうした!?」

「え……あ……うぅ……」

声をかけつつ振り向くと、そこでは腰を抜かしたマイが目を瞑って座り込んでいた。隣にいるタケシも、ゴブリンを見て顔が青ざめている。スタッフも手から抜け落ち、ぐしょぐしょの地面に突き刺さっていた。

「――くそっ……！」

初めての実戦だ。実際に生きている生物を殺すための、無情な戦い。マイとタケシに

はしんどいことだってことは、わかっていたはずだ。あの二人は徹底的に戦闘に向いていない。

ちくしょう！　ちゃんと見ていれば気がつけたはずだ。むしろ、どうして気が付かなかった……！

――いや、気付こうとしなかったのか……？

「ぐあぁっ……！」

「ギギィッ！」

刹那、シュンが悲鳴をあげる。そちらを見ると、シュンの左腕にメイスがかすったみたいだ。ばっさりと切れているのか、傷自体は大きくはないが結構な量の血が流れていた。

ダメだ。今はまず、目の前のことに集中しないとやばい！

「シュン、今行く！　俺と変わったらタケシんとこまで下がれ！　タケシはそのままシュンの治癒！」

「ぐぅっ……わ、わかった！　頼む、イブキ」

俺の言葉にシュンは頷くと、ゴブリンの前で剣鉈を一振りしてから飛び退いて距離を取る。その際にゴブリンはメイスを振るうが、シュンは低い身長を生かして屈んで避けた。そして、そのまま後ろへとジャンプした。こちらからは遠のくが、俺の攻撃のため

にゴブリンの隙を作ったのだろう。
ゴブリンは攻撃を空振ったことで、俺に背を向けたままたたらを踏んでいる。
「サンキュー、シュン！」
シュンにそう声をかけて、俺は前に出る。大回りでタケシのほうへと向かうシュンは、苦痛に顔を歪めながらも笑顔を見せる。
「おらぁああっ！」
声を上げながら、中ほどを持ったハルバードで素早くゴブリンを突く。背中に突き刺さると、ゴブリンはグェと声を漏らして倒れこむ。同時に、俺はさらに踏み込む。狙うは首元。そこをめがけて、上段から思い切りハルバードを振り下ろした。そして、そのまま斧部分が倒れたゴブリンの首にめり込み、押し潰しす。
ゴブリンも今度は声すら漏らせず、ビクリと大きく痙攣するとその動きを止めた。
「はぁ、はぁ、はぁ……っ！」
命を奪った。初めて、この手で。
息は荒いが、思ったよりも動揺はしていない。なんていうか、無感情。……一体どうしたんだ、俺？　まるで、命のやり取りを何度も経験しているような……。
そんなことを考えると、何かが浮かんでは消えていく感覚がした。
――やめよう。これ以上は考えてもどうにもならない。

俺はゴブリンが息をしていないことを確認すると、シュンたちのところへと向かう。
「シュン、大丈夫か？」
「痛っ、今、治療中～」
マイは未だに座り込んだままで、シュンは腕を押さえ顔を歪めている。タケシはというと、青ざめた顔でシュンの治療を行っていた。
治療とはいうが、傷はものすごく緩やかに塞がっていっている。シュンの怪我は血こそ結構出ているが、決して重傷なわけじゃない。俺が聞いた話だと、癒し手（キュア）は重傷でもなければ比較的すぐふさがるって話だったんだけど……。
まあ向き不向きもあるだろうし、動揺したままのタケシにそれ以上なにかを求めるのは酷かもしれない。
とりあえずシュンのことはタケシに任せ、マイへと近づく。彼女は今回何もできなかったが、慣れるまでは俺たちでフォローしなきゃな。
「大丈夫か、マイ？」
座り込んだマイに、優しく声をかける。
「ご、ごめん……。何もできなくて、怖くて、私……」
「いや、初めてなんだ。しょうがないさ。……俺のほうこそ、無理言って悪かったな」
マイはそれ以上は何も言わず、申し訳なさそうに俯いてしまった。

「……一体程度なら大丈夫だってことがわかったんだ。これから徐々に慣れていこう」

マイは落ち込んでるようだし、少しそっとしておいたほうが良いかもしれない。

俺は気を取り直し、倒したゴブリンの元へと向かう。

ゴブリンは持ち物を首に紐で吊るすか、ゴブリン袋と呼ばれる皮袋に入れていることが多い。このゴブリンは、幸先よくゴブリン袋を背負ってくれていた。

そっとゴブリンから取り上げ、中をひっくり返してみる。

「おぉっ……!?」

ゴワゴワとした質の良くない皮袋からは、銀貨2枚と欠けた銀貨、何かの牙、複数の金属片が出てきた。牙や金属片はともかく、銀貨が3枚だ。1枚は欠けているんだけど、ゴブリン一体相手にしては結構な稼ぎだろう。ゴブリンの持っていたメイスは錆ついていてボロボロで、お金にはなりそうもない。

「痛てて……。イブキ、どうだったん～?」

治療が終わったのか、シュンが声をかけてくる。

「ああ、ラッキーだ！　このゴブリン、銀貨持ってたぞ！」

「マジ?　やったじゃん！」

俺の言葉に、シュンは嬉しそうに喜ぶ。タケシやマイも、口にこそ出さないがほっと

しているようだ。確かに残金が心もとなかった俺たちからしたら、初戦でしっかりと稼げたのは大きい。これで最悪でも2週間程度は暮らしていけるだろう。

「とりあえず、今日はこれで一旦帰ろう。みんな初めての実戦だったんだ。精神的にも疲れているはずだし、ここで無理する必要はないと思う」

「まぁ、そうだよなぁ。欲張ったら良いことがなさそうだもんな」

「……うん、私もそれが良い、と思う。何もできなかったけど……次は……」

「……そ、そうだね」

怪我をしたにも関わらずシュンは笑顔だし、マイは落ち込みつつも前を向いている。顔色の悪かったタケシも少し元気が出たみたいで、顔色が戻っている気がする。

「反省会は明日やるとして、今日はとにかく帰って美味しいもんでも食べよう。ここで少し休憩してから出発だ」

少し茶化しつつそう言うと、三人は座り込む。俺は一応、見張りとして周囲を見て回ろうかな。

そう思って、周囲を警戒しつつ歩きながら考える。

所々違和感だったりはあるが、このまま順調に進めばきっとちゃんとしたパーティーになれる。シュンは決定打にはなりえないけど遊撃として優秀だし、タケシもスピードこそ遅いけど血を怖がらずに治癒をできていた。マイだって、慣れてくれば形になるだ

ろう。

あとは俺がしっかり指示を出せれば、なんとか義勇兵に手が届きそうだ。

「よし、やってやろうじゃねえか……っ！」

俺は座り込んでいる三人を見て、そう決意を固めた。

――――いろいろことから、無意識に目を逸らして。

▪ｐｉｓｏｄｅ．５

＊

俺たちがグリムガルに来てから九日。俺たちの初めてのゴブリン討伐を終えて、現在シュンと二人で市場の店々を見て回っていた。

ゴブリンとの戦闘後、充分に休息を取った俺たちはモンスターに襲われることもなく無事に街に到着した。

そして、ぐったりとしているタケシとマイを先に帰して、比較的余裕のあった俺とシュンでゴブリンの持ち物を売りに行くことにしたのだ。

「とりあえず、適当な店で鑑定してもらおうか」

「そうだな～。欠けた銀貨って普通に使えんのかな？」

「……どうだろう。一応、欠けた銀貨も鑑定してもらおうか」

シュンと話しつつ、市場全体をぼんやりと眺める。この市場には複数の買取を行って

いる店があるようで、同じく義勇兵っぽい人たちの姿が何人も見えた。その中でもある程度の人が利用していて、且つ一番空いているところを選ぶつもりだ。普通に話しているが、シュンの顔にも少し疲れが見えているしな。

少しの間見て回って、良さそうな店を選んだ。白髪の痩せた爺さんがやっている露店で、衣服や装備などといった義勇兵向けのものが店頭に置いてある店だ。小さなカウンターの向こうで椅子に座っている爺さんは、むすっとした表情で近付いてくる俺たちを睨みつけている。

「すみません、鑑定お願いしたいんですけど……」

「……見せてみろ」

爺さんは痩せた身体に見合わない鋭い眼光をしていて、声をかけた時に少しだけ驚いた。シュンなんかも俺の陰に隠れてるし。

「えーと、なにかの牙と金属片、後は欠けた銀貨です。あ、後ゴブリン袋も」

俺はゴブリン袋から牙と欠けた銀貨、駄目元で金属片を取り出して、ゴブリン袋と一緒にカウンターに置く。爺さんはそれを一瞥して、口を開いた。

「……欠けた銀貨は３０カパー。牙は1シルバーで買い取ろう。金属片はダメだな。これは鎧のサイズを調整した時に出る鉄くず、ただのゴミだ」

「ぎ、銀貨が３０カパーっすか!?」

シュンが思わずといったふうに声を上げる。
爺さんの言った査定額には俺も驚いたが、彼の俺たちを見る目は騙そうとしているような目じゃない。真剣に、そう言っていた。
「あの、欠けてるだけでそんなにダメなんですか？」
「……この状態だと貨幣として使うのは難しいからな。辺境伯様が集めてに鋳潰した新しい硬貨にしているが、いちいち等価交換していたら財政が破綻するだろう？」
俺の問いに爺さんは淡々と答えた。確かに、その通りだ。
「牙は魔除けの材料になるから、比較的高値で売れる。あくまで、ゴブリン関係ではな」
それから、と言って爺さんは続けた。
「ゴブリン袋は取っておけ。大した値段はつかないし、その長い紐を切って腰で結んでおけば、収集した素材を保管するのに役立つ」
……この爺さん、昔は義勇兵だったのかもしれない。なんとなく、そう思った。
「わかりました、ゴブリン袋は取っておきます。他のはその値段で買取をお願いします」
俺の言葉に爺さんはふん、と鼻を鳴らして頷くと、無言で1シルバーと30カパーを取り出して手渡してきた。

「ありがとうございます。たぶん、また来ると思うので、そん時もよろしくです」
「よ、よろしくお願いしまっす！」
俺とシュンは、そう言って爺さんに頭を下げる。先達からのありがたい助言だ。
爺さんは俺たちを追い払うように手をぷらぷらとさせ、何も言わなかった。

「ということで、俺たちの今日の稼ぎは3シルバーと30カパーになった。とりあえず3シルバーは三人で分けてくれ。俺は今回は30カパーだけもらえればいい。この分は、次に端数が出た時融通してくれ」
あの後西町の義勇兵宿舎に戻った俺とシュンは、マイとタケシを呼んで今回の分け前を話していた。事前にこのあたりはシュンと話し合っていて、最後まで不満そうにしていたが結局シュンも頷いてくれた。
俺の言葉に依存はないようで、三人とも何も言わない。シュンだけはやはり不満そうにしているが、ここは押し通させてもらおう。マイとタケシには、しっかりと稼げたという実感を持ってもらいたい。それで少しでも、初陣の恐怖心だったりを忘れてくれればいいんだが……。

一応明日は休息日にして、身体と心を休めることにした。みんなも内心それを望んでいたようで、ホッとした様子を見せていた。

俺の残金はこれで1シルバーと４０カパー。４カパーは宿代ということで割り勘して払っていて、２０カパーは帰り道に下着を買った時に使ってしまった。６０カパーで６着という格安の値段まで値切れたので、シュン、タケシと2着ずつ買った感じだ。タケシには聞かないで買ったので、最初はシュンと2人で３０カパーずつ払ったのだが、宿舎で聞いたところタケシも欲しがったのでこうなった。ちなみに今回買った下着は安いやつだったが、綿製のものはもっと高い。肌触りが良いが、買えるのはまだまだ当分先になると思う。

贅沢をしなければ、まだしばらくは暮らしていけるだろう。お金の入った皮袋は多少かさばるが、まだヨロズ紹介に預けるほどではないと判断して腰のポーチに突っ込んでいる。

正直、ヨロズちゃんを見に行きたい気持ちもあるのだが、我慢だ。

マイは宿に戻った時に沐浴部屋がちょうど女性用の時間だったようで、汗を流してこざっぱりとした格好をしている。とはいっても、寝巻きにしているのはここに来た時に来ていた服なのだが。

マイの場合は下着関係でも出費が嵩みそうだし、なるべく早くコンスタントに稼げる

ようにならなきゃな。

その後、俺とシュン、タケシは沐浴部屋で頭と身体を洗い、男部屋へと戻った。洗濯も済まして、部屋に吊ってある。当初はみんなで飯を食いに行く予定だったが、マイが疲れていて眠たそうなので中止にした。シュンとタケシも疲れたとのことで、飯は食わずに寝るみたいだ。

薄いわらのベッドに寝転びながら、俺はゴブリンとの戦闘のことを考えていた。

ガルバスに口うるさく言われたほど、ゴブリンが脅威には感じなかったのだ。牽制のつもりで振るったハルバードすら避けられていなかったし、技術も拙かった。ゴブリンの脅威は数にあるってことはわかっているのだが、どうにも納得できなかった。命の奪い合い。それは熾烈で、過酷で、残酷なもののはずだ。それなのに、あのゴブリンは。あのゴブリンとの戦いでは、俺は全然――

「――満たされなかった……っ？」

自分の口から出てきた言葉に、鳥肌が立った。

何ふざけたことを考えているんだ、俺は。たまたま初戦がうまくいったからって、もう調子に乗っているのか？

……明日は戦士ギルドに行って、ガルバスに鍛えてもらったほうが良さそうだ。お金がないのでスキルは覚えられないが、基礎訓練がしたいならいつでも来いと彼は言っていた。個人的に鍛えてやる、と。

〝油断だけはしないほうがいい〟

ハルヒロの言っていた言葉の、本当の意味がわかった気がする。

たぶん今の考え方のままだと、取り返しのつかないことになりかねない。

「やっぱり、明日はギルドで訓練だな……」

ぽつりと呟くと、いつの間にかシュンとタケシのいびきが聞こえてきた。二人はもう寝たみたいだ。いつもより全然早い時間帯だが、それだけ消耗していたのだろう。

一方の俺は、なぜか寝付けない。身体の中に何かがくすぶっているようで、うずうずするのだ。

「――外、出るか」

情報収集がてら、シェリーの酒場にでも顔を出してみよう。

そう思い立った俺は、二人を起こさないよう静かに着替えて、夜のオルタナへと繰り出していった。

夜のオルタナは、昼間の喧騒と比べるといくらか落ち着いていた。気持ち冷ためな空気を風が運んで、落ちているゴミをさらっていく。

オルタナ南区の西の端。俺たちの泊まる宿舎はギリギリ南区といえるこの場所に建っている。西町はスラム街ということもあり、夜に出歩く人はほとんどいない。昼間ならまだしも、好き好んで夜にこのあたりはうろつこうとは思わない。

俺はそんな誰もいない通りをブラブラと歩く。こんな図体のでかい男を襲おうとするアホはいないだろうということで、それほど警戒もしていない。

シェリーの酒場は、南区の宿屋街にほど近い花園通りと呼ばれる飲み屋街の一角にある。そのあたりは義勇兵たちがよく集まっていて、夜通し賑やかな場所でもある。

ハルヒロたちやキッカワもよくそこで飲んでいるとか。

そうこう考えながら歩いていると、すぐに花園通りへと辿り着いた。道中で酔っ払った義勇兵を何人も見つけたが、娯楽といえるのが酒くらいしかなさそうだからしょうがないのかもしれない。

中には、酒に逃避する人もいるのだろう。

シェリーの酒場のドアをくぐると、もわっとした熱気とともにアルコールの匂いが鼻

についた。どこを見てもどんちゃん騒ぎで、正直耳が痛くなる。

俺は一旦その騒がしさから目をそらしつつ、カウンター席の一つに腰掛けた。だいたいが団体のようで、カウンター席に座っている人は少ない。というか、俺しかいなかった。

ハルヒロたちやキッカワの姿は見えない。

俺が座ったのを見て、ウエイトレスが注文を取りに来た。俺は適当に酒を注文し、周囲の話に耳をすませた。情報収集なら、こうして周囲の聞いているだけでもだいぶ意味がある。

まあ本当のところ、今日はあまり他の義勇兵を見ていたくないっていうのはある。

俺たちはゴブリンを一匹討伐しただけでこうして立ち止まっているのにっていう、焦りみたいなもの。周囲にいる良い装備を身につけた義勇兵たちを見ていると、嫌でもそういった現実を突きつけられるのだ。

「お待たせしましたぁ～！」

ウエイトレスが元気いっぱいに注文した酒を持ってくる。たぶん俺たちのような見習い義勇兵をたくさん見てきたのだろう。その接客態度からは、どこか母性めいたものも感じられる。

俺は彼女にお礼を言って、木製のジョッキを受け取る。

そして、それをグイっと呷(あお)った。

「〜〜〜ぷはぁっ……！」

喉を流れる酒を感じつつ、大きく息を吐いた。

一仕事終えた後の酒は、やけに心地良く感じる。

周囲からはやれ誰々が怪我をしただの、誰々が逃げ出しただの、誰々に女ができただのといった、くだらないことばかりが聞こえてくる。まぁ、これも特段変わったことがない証拠だろう。俺たちが来る前なんかは、オークの軍団がオルタナに侵入した、なんていう事件もあったみたいだし。

……これなら、もっと静かなところで飲めばよかったかもな。

若干後悔しつつも、ぼんやりと酒を呷(あお)り続ける。

「ごちそうさま」

ぐいぐい飲んでいると、あっという間に酒はなくなった。俺はウエイトレスの一人に声をかけ、5カパーをジョッキの横に置く。そして、これだけで帰ることに若干の罪悪感を感じつつも、足早に酒場を後にする。

ドアをくぐって外に出ると、なんの気なしに上を見上げた。頭上で輝く赤い月を見ていると、やはり違和感を覚える。どこか遠く、今の俺の知らない場所では、月は赤くなかった気がする。考えたところで答えが出ないことはわかっているのだが、こうした時

にふと思ってしまうのだ。

――俺は、どういう人間なんだろう？

不意に、冷たい風が頬を撫でた。肌寒さに驚くが、むしろ火照った身体にちょうど良いかもしれない。

軽く頭を振って、花園通りを歩き始める。

夜風を感じながら歩いているうちに、火照りも冷めた。同時に、少し飲み足りない気もしてきた。どこか酒場にでも入るか？

無駄遣いはまずいが、今日くらいはいいだろう。

それっぽいところを探すため、路地を含めていろいろと見て回ることにした。

そうして歩くこと数分。

花園通りの端、路地を少し入ったところにその酒場があった。酒場というよりは、もっと落ち着いた雰囲気の店構えの店だ。周囲に人影はない。路地の外からは相変わらずの喧騒が聞こえてくるが、このあたりは静かだった。

――とりあえず、入ってみるか。

味のある木製のドアを開いて、中に入る。ドアをくぐる時、微かに甘い匂いがした。これは……果実の匂いか？　店全体に仄かに香っている。

内装は木製で、穏やかな色をしたランプがいくつか天井から吊り下げられていて、落

ち着いた雰囲気を作っている。カウンター席が7つ、奥にテーブル席が二つあるだけで、程度な狭さといえばいいのだろうか、それぞれのスペースがちょうど良い広さに設計されているように感じる。

店内を見回すと、それほど客は入っていなかった。カウンターに連れ合いらしき男女が2人。4人掛けのテーブル席には3人の男が座っている。

俺はカウンターに座る二人とは反対側の位置に座ることにした。少し重量のある木製の椅子を引き、カウンター席に腰掛ける。その瞬間にもふわりと良い香りがしたので、木自体に匂いが染み込んでいるのかもしれない。

俺が座ったのを見て、カウンターの向こうにいる60代くらいのマスターがこちらへ視線を投げかけてくる。彼は白髪と黒髪の混じり合った長髪を後ろで縛っていて、目が糸みたいに細かった。

「……お任せでお願いします」

なんとなく、そう注文してみた。

酒の種類もわからないし、ここはプロに任せるべきだろう。

正直いうと料金的な意味で少し不安なのだが。

頼んでから数分、グラスに入った酒が出てきた。

透明で中にフルーツが浮いている。

「――貴方は見習い義勇兵ですか？」
「……そうですけど」
グラスをテーブルに置いた時、マスターがそう声をかけてきた。少し嗄(しわが)れた、柔らかくて落ち着きのある声だった。
「ふふふ、そうですか。ここはそこまで高くはないから、安心してください」
「……なんか、すみません」
マスターは茶目っ気たっぷりな笑みを浮かべると、音も立てずに下がっていった。
なんていうか、すごいな、あの人。達人みたいだ。
そっとグラスを傾ける。口に含むと仄かな甘さが鼻から抜けて、次にぐっとした辛味が喉に来る。だけど、喉元を過ぎるとそれがすっと消えていって、心地良い熱さが胸に広がる。
上手く言えないが、すごく気分が楽になった気がした。
たぶん、無意識に身体がこわばっていたんだろう。
疲れていないと思いつつも、俺だって初めての実戦で戸惑っていたのかもしれない。
それを、気付かされた。
その後もチビチビとグラスを傾けながら、時間が過ぎていくに任せた
今までのこと。これからのこと。いろいろ考えないといけないことはあったけど、今

は何も考えないでぼんやりとしていたかった。
どれくらいそうしていたのだろう。
そろそろグラスの中身がなくなるかといところで、ギィと音を立ててドアが開いた。
無意識にそちらへ目をやると、思わぬ人物がそこに立っているのが見えた。
「――イブキ……？」
驚いたように目を見張る彼は、俺の名前を呟いた。
それが少しおかしくて、苦笑しつつも言葉を返す。

「……久しぶりだな、セイヤ」

▪ｐｉｓｏｄｅ．６

＊

「……イブキはよくここに来るのかい？」
「いや、今日が初めてだな」
「なんだ、僕と一緒か」
セイヤはそう言って苦笑する。
俺たちはカウンターで隣同士に座って、酒を飲んでいる。俺は二杯目で、セイヤは一杯目。
「今日、初めてゴブリンを倒したんだ。だけど、問題ばっかでさ。全然眠れなくて、一人でシェリーの酒場で飲んでたんだけどどうにもしっくり来なくて、気が付いたらここにいた。俺はそんな感じかな」
「なんか、わかる気がするな。僕たちも、先輩たちを見て焦る気持ちはあるし」

マイ、シュン、タケシの三人を「足手まとい」と評して置き去りにしたセイヤ。正直言うと、あの時は少し憤りだってあった。だけど今は、生きていくためにああやって最適な判断をできることが、純粋にすごいとも感じている。

だからだろう。今はこうしてサシで酒を飲んでいても、特に何も思わなかった。むしろ、話しやすくさえあった。ああやってぶつかった後だから、くだらないことでも話せる気がする。

俺以外の3人からしたら、そうじゃないのかもしれないけどさ。

「……なんか最近さ、パーティーが家族みたいに思えてきたんだ」

セイヤは嬉しそうにそう言い、グラスを傾ける。酒には弱いのか、少し顔が赤くなっている。

「ショウヘイは手のかかるヤンチャな長男。ケンボーは奔放な次男で、マイカは意外と家庭的なお母さん、理屈っぽいトミは末っ子って感じでさ」

チャラ男がケンボー、派手めな金髪の女がマイカ、メガネの女がトミというらしい。

あの派手めな女――もとい、マイカって意外と家庭的なのか。うん、意外だよな、確かに。

「セイヤはなんなんだ？　親父か？」

「いや、僕は……なんだろう、ペット？」

「ペットって……なんだよ、それ」
自分のことは考えていなかったみたいで、セイヤは困ったように笑った。
「――まあ、損得で彼らを切り捨てた僕に、こんなこと言う資格はないのかもしれないけどね」
そう言って、寂しそうに笑う。後悔は、したんだろう。きっと悩みもしたんだと思う。あの時見せた力強い瞳はなく、不安そうに揺れる子犬のような瞳があるだけだった。確かに少し、ペットっぽいかもな。
そんなことを思ったりもしたが、結局俺は何も言えなかった。
「だけど――」
だが、セイヤの瞳が一瞬だけ鋭く炎を灯す。
「――家族が危険に陥ったら、なりふり構わず守るつもりだ。何も犠牲にしても、何度後悔することになっても、きっと……」
それは、重みのある言葉だった。グリムガルという死と隣り合わせの、命が極端に安いこの世界で、〝守る〟ということの難しさは計り知れない。俺自身、あの三人とともに義勇兵としての戦いを経験し、それが良くわかった。
だけどセイヤは、なんの迷いもなく言い切った。
セイヤのこういうところが、すごいんだよな。

俺はセイヤみたいになれないと、そう思った。そして同時に、俺がリーダーに向いていないってことも理解させられた。

俺たち四人は、どうなのだろう。これからどうなるのだろう。セイヤたちみたいに、いつかお互いを家族だと思えるような、そんな日は来るんだろうか？

……いや、俺たちは俺たち。セイヤたちはセイヤたちの形がある。

ここで焦っても仕方がない。

だが――

「――きっついなぁ……」

リーダーとしての差を、まざまざと見せつけられた気がする。

「……どうかした？」

「いや……なんでもない。それよりさ――」

その後も、俺とセイヤは様々なことを話した

セイヤたちのパーティーの役割だとか、俺たちの役割分担。セイヤたちの初陣。俺たちの初陣とそれの愚痴。

セイヤたちもまだ本格的に始動してから二日目で、問題も多いみたいだ。

やっぱり、最初から上手くことなんか少ないんだと思う。だからこそ、時間をかけてでも調整していかなきゃな。

結局、マスターが店を閉めるまで、俺たちは一杯の酒をお供に話し続けた。

＊

それから俺たちは、森のゴブリンを中心に狩り続けた。

なんでもゴブリンスレイヤーと呼ばれていたパーティーがサイリン鉱山のほうに狩場を移したみたいで、ゴブリンが少しずつ増えたみたいだ。そして、数が増えたことでダムロー旧市街からあぶれたゴブリンたちが、森へと落ちてくる。

そんなゴブリンたちを狩る日々を通して、だんだんと連携も良くなっていった。稼ぎこそ最初みたいな額は出ないが、コツコツと貯め続け装備も少しずつ整えられ、今では誰も怪我を負わずに立ち回れるようになった。

マイもゴブリンに魔法を当てられるようになったし、タケシもスタッフでゴブリンに立ち向かえるようになった。今だに癒し手（キュア）のスピードだけは遅いんだけど、これはもうしようがない。

一応、2体程度のゴブリンなら難なく倒せるようになっているから良い方だろう。

また、貯めたお金で各々スキルを覚えたりもした。俺は〝雄叫び（ウォークライ）〟という、相手を怯

ませるスキル。シュンは〝斜め十字〟という剣鉈スキルで、マイは光弾を飛ばして攻撃する〝魔法の光弾（マジックミサイル）〟と〝影縛り（シャドーボンド）〟という足止め用のスキルを覚えた。タケシは〝癒光（ヒール）〟という癒し手（キュア）の上位版を覚えたみたいだ。もっとも今は怪我をすることすらほとんどないために、未だ使う機会はないのだが。

それと、情報交換がてらに例の酒場でセイヤと飲んだりもしていた。あの酒場は白い月という名前らしく、それを知った時はセイヤと二人　でなぜか妙に納得してしまった。お互いに近況を報告しあったり、情報のすり合わせをしたりなどして、ずっと交流は続いている。

先日セイヤたちは団章を買えたみたいで、俺たちより一足先に義勇兵になった。それでもダムローの旧市街でコツコツと経験を積んでいる段階のようで、サイリン鉱山に行くのはまだ不安みたいだ。

「次から、ダムローに行ってみようかと思ってる」

「ダムロー？」

いつも通り森でゴブリンを狩り、その持ち物を物色していた俺たち。そこで俺は、み

んなにそう言った。前持ってダムローについては色々と話していたのだが、シュンはダムローのことが頭から抜け落ちているのか、きょとんとした顔で首を傾げている。

「えと、ダムローって、ダムロー旧市街のこと……だよね？」

「私たちにできるかな……？」

タケシとマイはダムローのことは憶えているようで、少し不安そうにそう呟く。

確かにダムロー周辺は徒党を組んだゴブリンたちが多くいる。だが、その分持ち物は高価なものが増えるし、その中でも少数で行動しているゴブリンたちだっている。そこらに狙い目を絞れば、俺たちでもなんとかなると思う。

最近は森ゴブリン程度なら慣れてきている二人だが、そろそろステップアップする頃合いだろう。惰性は慢心を生む。今の所は連携に不安はないし、ダムローの方ならば少しが稼ぎが良くなるみたいだから義勇兵に近付ける。

「大丈夫だ。ダムローは広い。中には少数で行動しているゴブリンもいるから、それを狙い目にすればいい。そうすれば、今となにも変わらないんだ。むしろ森ほど歩きにくくないから、楽な部分もある」

実際、マイとタケシは最初のほうは靴づれを起こしたりして結構大変だった。それに転んで服を破ったりしたこともあるし、虫だって苦手みたいでしょっちゅうびっくりしてる。

それに比べれば、ダムローのほうがいくらかやりやすいのかもしれない。
だが、ダムローは森と比べるとイレギュラーが起こる可能性が高い。頭の良いゴブリンなどは人間を罠に嵌めようとするだろうし、そういったことに咄嗟に対処できるよう、ここで経験を積む必要があったのだ。
「俺が賛成かな。ぶっちゃけ、このままじゃいつまで経っても団章買えなさそうだし」
シュンがそう言って同意してくれる。
シュンは最初のほうこそ立ち回りに迷いが見えたが、今は臨機応変に対応できるようになった。回避重視で、且つ敵の注意を引きつける立ち回り。それのおかげで、俺は目の前のゴブリンを集中して倒せるのだ。俺は長くても一分あれば一体倒せるので、それまではシュンを前にマイが魔法で援護しつつもう一体を足止め、タケシは二人のフォローといった具合で戦闘を進めていた。
たぶん、一番成長したのはシュンだろう。身体は小さいが、肝が座っている。本人はまだまだ不満みたいだが、ギルドの教官からも結構な評価をもらえているらしい。
もっとも、これらは俺の武器がハルバードだからこその戦術でもあるんだけどな。ハルバードは一対一に強い。ましてやゴブリンのように間合いの狭い相手なら、何もさせずに一方的に攻撃できるのだ。
スピアでの刺突や斧での殴打、それらを避けられても引き際に鉤爪(フック)で足を引っ掛けれ

ば、それだけで相手の体勢を崩すことができる。あとはそこにもう一度攻撃を行えば、接近を許すことなく倒せる。仮にそれが決定打にならなくても、また繰り返せばいいだけだ。

ガルバスに散々扱かれたおかげで、武器の扱いは相当に上手くなったと思う。上手くは表現できないが、戦っていると自然と身体が動いてくれるような感覚がある。対人戦闘という一見無駄に見える訓練だったが、おかげで今まで人型のモンスターに遅れを取ることはなかった。ガルバスレベルの実力者でもない限り、負けることはない……と思いたい。まあヤバそうだったら逃げるけどな。

俺はシュンの言葉に頷いて、二人を見る。

「マイ、タケシ、試しに一回ダムローに行ってみて、厳しかったらまた森に戻ることにしよう。ダムローで問題なく狩りができれば、今よりも稼ぎは確実に増える」

稼ぎ、という言葉にタケシが反応した。食用が旺盛なのか、はたまた元々浪費家なのか、タケシは常に金欠みたいだ。シュンにしょっちゅうお金を借りている。シュンもシュンで断れないのか、毎度苦笑しつつも貸してあげているようだ。ダムローに行けば、それがいくらか解消されるだろう。

マイもお金を稼げることに越したことはないようだ。見知らぬ場所に行くことへの不安感が大きかったようで、最悪ここに戻ってくると言ったら頷いてくれた。

「ありがとう、みんな。それじゃあ帰ろうか」
この日はゴブリンを合計で7体倒した。稼ぎは、初めて5シルバーを超えた。

「へえ、もうダムローに行くんやなあ」
「ああ。連携も良くなってきたし、団章を買うために稼がなきゃなんないからな」
その日の夜、俺は共用炊事場近くにあるベンチが置かれた場所で、ユメと話をしていた。ハルヒロからダムローに関する話を聞いた帰り、ばったりと会ったのだ。なんでもマイが出かけていてまだ帰ってこないから、帰って来るまで起きているつもりらしい。
一緒の部屋に泊まらせてもらっているだけでもありがたいのに、本当に感謝しかない。
シホルは半ば無理やり寝かせて来たみたいだが、ユメだって眠そうにしている。ここに来たのも、眠気覚ましに顔を洗おうとしてのことみたいだ。
グリムガルの季節は変わるのか知らないが、夜は少しだけ肌寒い。なので、ベンチの近くにはある火を焼べる場所で、白湯を作って二人で飲んでいた。火かき棒みたいなもので温まった瓶を引っ掛け、そのまま傾けてカップに注ぐ。カップは共用炊事場に置い

てあるハルヒロたちのものだ。ユメはもちろん自分のを、俺は余っているカップを借りて使わせてもらっている。

グリムガルで目覚めた当初はこういった古典的な道具の使い方に戸惑ったりもしたが、今ではもう慣れたものだ。

「ユメたちなあ、ダムローには良い思い出と嫌な思い出、どっちもあるんやねんかあ。だから、イブキくんたちも気いつけないとあかんよ」

嫌な思い出については、聞かない。きっと、パーティーの仲間以外に軽々しく話したくない内容なんだろう。ユメは普段通りぽわわんとして見えるが、なんとなく哀愁のようなものが感じられた。

その後もユメと話して時間を潰していた。本当はユメにもダムローについて色々と聞きたかったのだが、気が付いたらハルヒロのことばかり話し始めるので諦めることにした。たぶんユメ、無意識なんだろうけど。……ハルヒロのやつ、羨ましいな。

しばらくすると、ユメのウトウトが極限まで来てしまったので、説得して部屋に返した。

マイのことは俺がホールで待っていることにしたのだ。今まで各自のプライベートについては全然詮索していなかったので、こうして迷惑をかけていることは知らなかった。今日が初めてだったみたいだが、これについてはマイに一言言っておかないとユメ

たちに申し訳ない。

マイのプライベート。……全然知らないな。

シュンのも、タケシのも。タケシも休日前はよく宿舎を空けているが、特にそれについて聞いたことはない。シュンだってたまに一緒にシェリーの酒場に行ったりはするが、それ以外はあまり交流はしていない。

なんとなく、お互い立ち入らないようにしているのだ。

それが正しいことなのかはわからないが、少しずつ慣れていくしかないのかもしれない。

うじうじとそんなことを考えていると、宿舎の門から人が入ってくるのが見えた。どうやら二人組みたいだ。暗くて顔が良く見えない。片方は少し背の高い、ショートカットの女の子。もう片方は、背が低い女の子だった。

「――マイか？」

もしかしたら、と思って声をかけてみる。誰かに送ってきてもらったのだろうと思ってのことだ。

だが、返事はなく、むしろ警戒するような雰囲気に変わった。

この棟は一号宿舎で、ハルヒロたちとマイ、俺たちの一つ先輩の義勇兵たちが泊まっているらしい。俺たちは二号宿舎に泊まっているから、今まで接点らしい接点はない。

どの棟へ行くにもこのあたりを通るため俺はここで待っていたのだが、どうやら彼女は人違いだったみたいだ。

確かに夜にデカイ男が一人で座ってて、しかもそいつから突然声をかけられたら警戒するわな。背の低い女の子を庇うように、ショートカットの女の子が俺との間に立った。

「な、なにか用ですか？」

ショートカットの女の子は気丈にそう言うが、その声は少し震えていた。

……なんだろう。すごく罪悪感がある。

「あー、すまん。人を待っててな。どうやら人違いだ」

「……そうですか」

俺の言葉に、彼女は安心したようにほうっと息を吐いた。

「あなたもここにいるなら、義勇兵なんですよね？　早く寝なくていいんですか？」

ショートカットの女の子は俺に害意がないのがわかったのか、皮肉げにそう言う。たぶん、私たちより先輩なのにここに泊まってるとか恥ずかしくないの？みたいな意趣返しなんだろうけど……。

「あー、俺この前来たばっかの見習いなんだよな……。今は色々あって、パーティーメンバーが帰ってくるのを待ってるだけでさ」

「え？　見習い？　ってことは、後輩？」

ショートカットの子は驚いたようで目を見張っている。二人はだいたい15～16歳くらいに見えるから、俺の方が二つくらい上だ。いや、俺自身自分の正確な年齢はわからないんだけどさ。まあ身体もデカイし、先輩だと勘違いするのもしょうがない……のかな？

俺は一応首から下げている見習い章を見せる。

「まあなんつーか、よろしくです、先輩」

「～～～っ！　チョコ、もう行こう！」

俺が皮肉っぽくそう言うと、彼女はむっとした顔になり歩いていく。その後ろから、チョコと呼ばれたボブカットの女の子も慌てて駆けて行った。年下に見えるけど、あの二人は首から義勇兵の団章をかけていた。俺らの先輩なんだし当然なのかもしれないが、俺らって、彼女たち以下なのか……。

若干気落ちしつつも、そのままベンチに座ってマイの帰りを待つことにした。瓶から白湯を注ぎ、静かに口に含む。

「……イブキくん？」

彼女たちとの邂逅から程なくして、ぼけ～と待っていた俺は声をかけられた。

声のしたほうを見ると、案の定不思議そうにしているマイが立っていた。
「ど、どうしてここに……？」
「いや、ユメとばったり会って、マイが戻らないからって心配しててさ。帰ってくるまで起きてるって言ってたから、俺が代わりに」
「あっ……！　ご、ごめんなさい！」
ユメに何も言っていないことに気が付いたのか、マイは焦った様子で慌て始める。
そんな様子に苦笑しながら、俺は立ち上がった。
「――明日、ちゃんと謝っておけよ？　ユメも俺も、心配してたからさ」
「……うん」
「んじゃあ、おやすみ」
それだけ言って瓶を片付けようとしたが、不意に服の裾を掴まれる。
「……なにも聞かないの？」
マイは、小さな声でそう言った。
「……なにしてたんだ、とか。どうして遅くなったんだ、とか」
「――俺たちはパーティーだ。だけど、プライベートにまであれこれ言う権利はないだろう？」
そこまで介入していたらキリがない。きっと面倒なことになる。

俺たちは、セイヤたちとは違うんだ。
――いや、俺がセイヤとは違うのか。
俺の言葉に、マイは「……そっか」とだけ呟く。
そして、裾を離して数歩下がった。
「……うん、わかった。それじゃあイブキくん、また明日ね」
「……ああ」
そして、そのまま宿舎へと駆けていく。
……俺は、どう答えるべきだったんだろうか？
不器用な自分が酷く嫌になり、ベンチに座り込む。
焼べていた火は、いつの間にか消えていた。

▪ pisode. 7

翌日、俺たちは初めてダムロー旧市街へと足を踏み入れていた。

オルタナの北西約四キロ。市街というよりは、かつて街だった場所というべきだろうか。少なくとも今は人間族は誰も住んでいない。市街を囲んでいた防壁は八割方崩れていて、建物もそのほとんどが壊れている。あちこちに雑草が生い茂り、朽ちかけた建物の瓦礫がこれでもかと転がっている。

かつて人が住んでいたのだという痕跡は、そこらじゅうに落ちている骸骨くらいだ。犬とも猫ともつかない生き物が壊れかけた塀や屋根の上を歩いているが、こっちに気づくとすぐに逃げてしまう。鳴き声のほうに目を向けると、大きな建物の残骸が数十羽、それ以上の鳩の止まり木になっている。

昔、ダムローはアラバキア王国第二の都市だったらしい。それこそ、オルタナとは比

べものにならないほどの強大な都市だったのだ。だが、不死の王率いる諸王連合軍に攻め滅ぼされて、一旦は不死族の領地となった。その後、不死の王崩御の混乱に乗じて奴隷扱いだったゴブリン族が蜂起。そのまま不死族を追い出してこの街を我が物とした。

だから、現在のダムローはゴブリンたちの根城になっている。上位のゴブリンたちは主に新市街で生活していて、旧市街には下級のゴブリンのみが住んでいるため整備されることも荒れ果てている。低級なゴブリンたちは小規模な群れを作ったりもしているが、基本的には群れているだけではぐれ者だって多い。

だが、今日は少しゴブリンの姿が多い気がした。多いというか、複数で行動するゴブリンが目に付いたのだ。

「……いた。ゴブリン一体……。どうする？」

ダムローに入ってから一時間。やっと単独のゴブリンを見つけた。

シュンが見つけたゴブリンは壊れかけた家屋の中、壁を背にして座っている。いや、どうやら寝ているみたいだ。時折首がこくりと船を漕いでいる。

このあたりに住んでいるゴブリンは、森に生息する泥ゴブリンとは少し違った。比較的装備がしっかりとしていて、衣服を身につけている。森にいた泥ゴブリンはゴブリン袋を持っている個体はほぼいなかったが、こちらでは基本的に誰もがゴブリン袋を背負っていた。

「……やろう。俺だと鎧で音が出るから、シュンとタケシが先に近付いて不意打ちを頼む。俺とマイはその後ろに付いて、気づかれない位置で待機しておく。もし不意打ちで息の根を止められなかった場合、シュンとタケシはすぐに下げれ。いつも通り俺が前に出て引きつけるから、みんなはその援護だ。いいな？」

俺は森で少し稼げたこともあり装備を整えたため、現在は鎖帷子の上に革鎧を着ている。ガルバスにお願いして、ギルドの中古品を格安で買わせてもらった。機動性を削がないように、且つ防御力を高める為の苦肉の策なのだが、どうしても物音が出てしまう。だから、こういったことには軽装なシュンがうってつけなのだ。

全員が頷いたのを確認して、ゆっくりと深呼吸。

——よし。

「——行くぞ」

俺の声で、シュンとタケシが進む。俺たちの隠れる瓦礫から家屋まではすぐだったが、家屋の中は瓦礫だらけのようで少し手間取っているみたいだ。俺とマイは家屋の外から、崩れた壁越しに中の様子を伺っている。シュンが剣鉈を構え、ゴブリンへ突き刺そうと構える。そして、俺のほうへ視線をよこした。

俺は静かに頷く。シュンはそれを見て、剣鉈をそっとゴブリンの胸へと突きつけ、一息に刺し込む。ゴブリンは低くうめき声あげて暴れるが、タケシが慌ててスタッフで頭

を殴りつける。それで一瞬動きが止まり、シュンが剣鉈を引き抜いて再度突き刺す。それでもなお暴れるが、シュンとタケシの二人で取り押さえているとだんだん動きが鈍くなり、最後にはがくりと力が抜ける。

「はあ、はあ、はあ……っし、やれたぞ……！」

「ふう、ふう……そ、そうだね……」

二人だけで倒せたことが嬉しいのか、シュンとタケシは笑顔を見せてる。確かに今まで俺がメインで倒していたからな。俺が関わらずに倒せたのは初めてかもしれない。

「マイ、とりあえず俺たちも中に入ろう」

「……うん、わかった」

昨夜のこともあり俺とマイは最初のうちは少しぎこちなかったが、今では一応元に戻っている。多少の違和感程度は時間が解決してくれる……と思う。

マイを先に行かせ、俺は周辺を警戒。その後、敵影がないことを確認してから中に入った。

中ではシュンがゴブリン袋を外し、その中身を確認していた。

「どうだ？」

「すげえよ、銀貨が何枚か入ってる！」

シュンがゴブリン袋をひっくり返すと、中からは銀貨が４枚と綺麗な石や牙が数個出

てきた。たった一体でこれか……。やはり、ダムローだと稼ぎが増えるな。今回がたまたまなのかもしれないが、今まで見てきたゴブリンたちも相応の格好をしていたから、期待はできる。

「……よし、幸先が良いな。大変だろうけどさ、これを継続していこう」

「だね。だいぶ動けるようになってきたし、俺たちもだんだん義勇兵っぽくなってきた気がする」

シュンは嬉しそうな笑顔を見せる。確かに、連携の面ではだいぶ進歩したな。

森での稼ぎ一回分に相当、下手するとそれ以上か？　それくらいの稼ぎをゴブリン一体で稼げた。義勇兵の団章がぐっと近付いた。もちろんそう上手くいくとは思えないが、希望は見えてきた。それだけでだいぶ意味がある。

結局、その日は合計でゴブリン四体を倒した。手に入れたものは銀貨が6枚に様々な色の石、牙や骨など。いつも通り市場の爺さんのところへ持っていくと、銀貨以外は全部で1シルバーと16カパーになった。四人で割ると一人当たり1シルバーと79カパー。

これで俺の総資産は4シルバーと46カパー。ここから食費や宿舎代がかかるんだけど、それでも結構お金が貯まってきた。

だが、翌日は芳しくなかった。というよりも、ゴブリン自体は問題なく狩れるのだが、

狙い目になるような少数のゴブリンと遭遇しなかった。不意打ちで一体ならどうとでもなる。二体もなんとか。だが、三体以上になると一気に難易度が上がるのだ。聞いていた情報だと、群れも多いがあぶれ者も多いって話だったんだけどな。どうにも最近はきな臭い感じがする。この日は結局、ゴブリンを倒せないまま終わった。もちろん、稼ぎは０だった。

三日目も初日、二日目と同様にダムローの入り口付近を探索した。ハルヒロたちはダムローの地図作りをしていたみたいだが、正直今の俺たちにはあまり必要ないと思う。人数が少なくてそこまで手が回らないし、ダムローの入り口付近以外だとゴブリンの数が多すぎて危険すぎるためだ。すでに見慣れてきた入り口近辺を探索し、ゴブリン二体を狩った。稼ぎは合計１シルバーと８１カパー。一人当たり４５カパーで余った１カパーは次回に持ち越した。

ダムロー突入から三日目の夜。俺、シュン、タケシの三人は宿舎で色々と話していた。主に、ダムローのことを。最近のダムローは少し様子がおかしい。嫌に統率の取れたゴブリンも見かけるし、はぐれているゴブリンはなぜか仲間であるゴブリンに迫害されたりもしていた。このままだと危ない気がする。

「なあ、今日で一旦ダムローの探索は終わりにしないか？」

薄いわらのベッドで横になり、俺は二人にそう言った。二人は驚いたようで、ベッド

がぎしりと軋んだ。

四人部屋に泊まる俺たちは二段ベッドの下にタケシ、上にシュン、俺がもう一つのベッドの下の段で寝ている。こうして体重の軽いシュンでも身じろぎすればベッドが軋む音がするのだ。安いから仕方がないのかもしれないが、慣れないうちは気になって寝付けなかった。

「え？　ど、どうして……？　森よりも、全然稼げるよね？」

タケシは不思議そうに、少し非難めいた視線を向けてくる。浪費家っぽいタケシからしたら、森に戻って稼ぎが減るのは嫌なのかもしれない。

「まぁ、確かに最近は単体のゴブも見つけにくいけどさぁ。でも、なんとかなりそうじゃん。俺だってイブキなしでもゴブと戦えるようになってきたし」

シュンは少し自信有り気にそう言う。確かにシュンは成長した。それこそ、狩人らしく中距離から弓矢で奇襲し早々に一体を仕留めることもあれば、剣鉈での近接戦闘でタケシと協力して倒すこともある。タケシもダムロー突入初日にゴブリンを倒し少しだけ自信がついたようで、敵に攻撃することへの忌諱感はなくなっている。

だが、それでも不安だった。

「いや、それでもなにかあってからだとまずい。ハルヒロたちに聞いたんだけど、頭の良いゴブリンは旧市街で力をつけようとしているらしい。前にもこうやって徒党を組

むゴブリンが増えた時に、リーダー的なゴブリンがいたとかなんとか……」

セイヤたちも今は慎重にダムローでの狩りを続けているみたいだ。セイヤたちのパーティーだって俺たちよりも数段優れている。そんな彼らも違和感を覚えているくらいなのだ。

「でもさぁ、ハルさんたちがそう言ってたからって、確定ってわけじゃないじゃんか？」

「そ、そうだよね。もしそうだったとしても、すぐに逃げればいいんだし……」

やはり二人は反対みたいだ。せっかく稼げたのに勿体無いということなのだろうか？

……明日マイにも話す予定だし、マイにも聞いて判断しよう。本当はマイもいる時に話したほうが良かったのだが、考えをまとめるのに時間がかかってしまったのだ。実際、街に帰って戦利品の買取を終えたら俺たちは各々行動するようにしている。だから、全員で話し合うなら朝集まった時か帰り道しか選択がない。

「……わかった。なら、とりあえず明日はダムローへ行くことにしよう。明日以降はまだ保留だ。マイにも話を聞いてみないといけないからな」

俺の言葉に二人はまだ不服そうにしているが、こればかりは譲れない。欲をかいて全滅してからじゃ遅いんだ。二人は結局なにも言わずにそのまま毛布をかぶり、しばらく

すると寝息を立て始めた。最後まで不満そうだったが、疲れを取ることを優先したのだろう。

俺も少し疲れはあるが、どうにも寝付けなかった。まだ寝るには早い時間帯だし、仕方がないかもしれない。

……外、出るか。

寝息を立てる二人を起こさないように、俺はそっと部屋を出た。

そして、いつものように白い月へと向かう。まだ夜が早いせいか、装備姿の義勇兵もたくさん見かける。シェリーの酒場に行った帰りなのか、アルコールで顔を真っ赤にした人ともたくさんすれ違った。

良い宿に泊まっている義勇兵はまだしも、俺たちのような新兵（ルーキー）は盗難の可能性があるため装備を宿に置いておくことはできない。だから、街の外に行った帰りにそのまま酒場へ直行、この時間まで飲んでいる人が多いのだろう。

「あ、アンタはあの時の！」

行き交う人々を眺めつつ歩いていたら、不意にそんな声がした。

ふむ、どこかで聞いたことがある声だ。そんなことを考えつつそちらを向くと、いつ

ぞやのショートカットの少女が俺を指差していた。
宿舎で会った時とは違い、彼女は現在装備姿だ。魔法使いらしいローブを着ていて、杖を持っている。彼女の横には盗賊風の装備をしたチョコとか呼ばれてた女の子もいる。さすがに二人だけのパーティーってことはないだろうから、別行動してるのかな？
「……ああ、どうも」
「ふん、なによ、後輩のくせに生意気ね」
あの時のことをそんなに根に持っているのか？　顔が赤いから酔っ払っているんだろうけど、やけに突っかかってくるな。
俺は助けを求めるためチョコと呼ばれていた小柄な少女に視線を向けるが、面倒そうに目をそらされてしまった。
「あ～……謝ればいいのか？」
「はあ？　なんでそうなるのよ？」
……もう勘弁してくれ。
「……飲みに行くわよ！」
「……は？」
「先輩命令！　いいから行くわよ！」
またしてもチョコに視線を向けるが、チョコは諦めたようにため息をついて肩をすく

める。

結局この後、二人と一緒に白い月へ行くことになってしまった。

▪pisode. 8

＊

白い月についてすぐ、ショートカットの少女――リンという名前らしい――はお酒を注文した。彼女の「たくさん飲めるやつ！」というよくわからないオーダーにも、マスターは笑顔で頷く。

そんなリンは現在、カウンターに上半身を倒してぐでーっと力を抜いている。

顔は酔いで赤くなっていて、苦しそうなその吐息はどことなく色っぽい。もどかしそうに左右に揺する脚も健康的で、ローブから覗く肢体はほんのりと桜色に染まっている。正直、すごく扇情的だった。宿舎で突っかかってきたときは子供っぽいという印象のほうが強かったが、こうして見ると女なんだな。

そんなある意味場にそぐう感想を抱きつつ、リンがこうしている理由を求めるようにチョコに目をやる。だが、チョコはこちらを見ないでまた目をそらす。やはり話す気は

なさそうだ。

俺はため息をついて、リンへと意識を向ける。俺を無理に連れてきたのも、何か話したかったからかもしれない。俺もセイヤに愚痴ったりしていたから、気持ちはすごく良くわかった。答えはなくていい。誰かに聞いてもらうだけで、意外と気持ちは楽になるものだ。

少しの間無言で酒を飲んでいると、リンがゆっくりと話し始めた。自分たちがここに来てからのことを。

気が付いたら記憶もなくグリムガルに来ていて、同時期に来た人たちでそれぞれパーティーを組んだこと。その同期のもう一つのパーティーが解散し、各々がクランに入ったこと。それを知って、自分たちはこのままでいいのかということ。

きっと何かのきっかけがあって、こうした不安が表に出てきてしまったんだろう。

「……むう、何も言わないの？」

こうなった原因は話さなかったが、リンは一通り愚痴り終わったのかむすっとした表情でこちらを睨む。俺の反応が薄かったのが気に入らないのかもしれない。

だが――

「何か言って欲しいのか？」

苦笑しつつもそう答える。

たぶん彼女は答えは求めていない。明確に何かを聞かれたわけでもないし、そもそも外野がとやかく言うことじゃないだろう。やはり、誰かに聞いて欲しかっただけみたいだ。

俺の返答を聞いたリンはきょとんとした表情を浮かべ、少し笑みを浮かべる。

「……美少女の株を上げるチャンスだったのにねぇ～？」

いたずらっぽく笑うリンは、少し魅力的に見えた。

「美少女……？　どこにいるんだ？」

だからなのか、なんとなくそんなことを言ってしまっていた。

「あっ、言ったなぁー！」

うん、こっちのほうがリンっぽいな。知り合ったばかりの俺が言うのも変だけど。

子供っぽくポカポカと殴ってくるリンの頭を、俺は落ち着かせるようにゆっくりと撫でる。どことなく動物っぽく唸るリンは、それでだんだんと静かになっていった。

こうも馴れ馴れしく接してしまうことに自分でも驚いたが、自然とやってしまっていた。よろずちゃんの時といい、俺は撫で癖があるのかもしれない。誰かの頭を、よくこうやって安心させるように撫でていた気がする。いったい、誰を？　考えれば考えるほど、何かが霧散していく。答えはきっと、消えていった記憶の中にあるのだろう。考えるだけ無駄だということはよくわかった。

撫でているうちに、ふとリンの栗色の髪が目に付いた。少しパサついていて、義勇兵として生活していく過酷さを感じさせる。見たところ彼女やチョコはまだ15、6歳くらい。おしゃれだってしたいだろうし、こんな生活をしていかなきゃならないことに憤りだって覚えたことだろう。でも、彼女はこうして必死に生きている。

そしてそれはたぶん、マイだってそうなのだ。

心に支(つか)えていた何かが、すとんと落ちた気がした。マイだってリンたちと同じような年齢の少女だ。なのに俺は、それを棚上げして積極的に関わろうとしなかった。プライベートだのなんだの、適当な言い訳を重ねて。ユメやシホルはこういうことを経験しているから、マイを同じ部屋に泊まるよう誘ってくれたのかもしれない。やはり彼女たちは先輩なんだなと思い知らされる。

マイを待っていた日、彼女は俺に何かを聞いて欲しかったんだろう。あの時はかすかにお酒の匂いもしたし、今のリンみたいにお酒を飲んできたのかもしれない。それなのに、俺は知らないふりをした。……最低だな、俺って。

俺は現状、パーティーメンバーとの距離を縮めようとはしていなかった。

なぜだかわからない。近付くのが怖かったのかもしれないし、それを失うことも怖かったのかもしれない。だから俺は、基本的にプライベートは不干渉にしたのだ。俺たちはお互いの好きなものさえ知らない、近いけど遠い関係。

目をそらしていたことを突きつけられた気がして、正直しんどかった。でも、それでも、明日からはもう少しだけ距離を縮める努力をしてみるのも良いかもしれない。

なんとなく、そう思えた。

そんなことを考えていたら、いつの間にかリンはカウンターに突っ伏して眠ってしまった。酔いのせいか顔を真っ赤にしていて、うーうーと苦しそうに呻いている。……たぶん、飲みすぎて疲れてしまったんだろう。

ここまで半ば無理やり連れてこられた俺とチョコだけが残され、若干気まずい空気が流れる。

俺はあまり話すことは得意ではない。必要とされるならばまだしも、俺は別段自分から場を盛り上げようとはしないタイプだ。チョコも同様のようで、お互いがちびちびとグラスを傾けるだけの時間が続いた。

「――仲間が」

「……ん？」

チョコが、ぽつりと呟いた。

「……今日、仲間が――」

チョコは、ゆっくりと話し始めた。それは、リンがこんなに酔っ払っている理由。

なんでも今日、ダムローの旧市街で仲間が重傷を負ったらしい。ゴブリンたちに罠に

嵌められて、神官の男が矢を受けたとか。なんとかオルタナまで戻ることができて神官は一命を取り留めたみたいだが、本当に危なかったようだ。

彼女たちのパーティーは今日まで順調にきていたようで、仲間が重傷を負ったことなどなかったみたいだ。だからこそ初めてのことに動揺し、こうして深酒をしてしまったのだとか。油断もあった、と彼女は反省しているみたいだ。

……やはり、ダムローが少しおかしい気がする。

彼女たちのパーティーは、油断したとはいえども俺たちよりも場数を踏んでいる。そんなパーティーを罠に嵌め、しかも神官を狙った部分にゴブリンの狡猾さを感じさせた。もし俺たちが遭遇したら、きっと誰かが命を落とすだろう。そう思わずにはいられなかった。

今後、チョコたちのパーティーは神官が回復するまで森でゴブリンを狩るらしい。安全マージンときちんと取って、誰も怪我を負わないように。まあ、それが最善だろう。神官のいないパーティーほど危険なものはない。

俺たちも明日はまず様子を見て、手に負えなさそうだったら撤退しよう。そうしなければ、チョコたちと同じような、いや、下手したらもっと酷いことになるかもしれない。

その後もチョコとダムロー周辺のことなどを少し話しつつ、だいぶ良い時間になってきたので宿舎に帰ることにした。

マスターに言って三人分の会計を済ませると、俺たちは外へ出る。
リンは未だに目を覚まさないので、仕方なく俺が背負って運ぶことに。さも当たり前のようにチョコにそう言われたが、リンが起きたらまた絡まされそうで気は進まない。まあチョコには文字通り荷が重そうだし、選択肢は一つしかなかった。うん、しょうがない。
背中に感じる柔らかい感触を密かに楽しみつつ、俺たちは宿舎へと帰った。

翌日。時刻は午前１０時。
いつも通り俺たちは宿舎の前で集合していた。朝食は各々露天で買って食べ、装備もすでに整えている。
昨夜言った通り、俺はシュンとタケシとともに話した内容をマイへと伝える。
「――ということなんだけど、マイはどうかな？」
ダムローの危険性を鑑みて、一時的に探索を見合わせる。この提案にマイは肯定的だった。
「私も、そうしたほうがいいと思う。正直、何日かやってみて少し怖かったんだ……」

そう言ったマイは申し訳なさそうに笑う。そんな素振りには全然気がつかなかった。これも、見ないふりをしていたのかもしれない。

シュンとタケシはまだ納得がいっていないようで、不満げな顔を崩していない。厳しく言うべきなのかもしれないが、そうしたところで雰囲気が悪くなるだけだ。それに、この二人も言い分もわかる。まだ何が起こったわけでもなく、あくまで予想での提案。実際に危険を感じてからでないとわかってもらえないのも無理はない。

「……あ、でも、今日1日様子を見てからっていうのには賛成……かな」

マイもそんな二人を見て、気まずそうにそう呟く。本心からではないのかもしれないが、ここは我慢してもらおう。この二人の言い分も聞かないとまずいしな。パーティー内がバラバラだと勝てるものも勝てなくなる。

「――よし、それじゃあ今日はダムロー旧市街で探索をしよう。万が一俺が危険だと判断した場合は、どうか素直に従って欲しい」

マイは頷き、シュンとタケシも渋々といった感じで同意してくれる。

俺はそれを見て、少しだけ不安を抱きつつも歩き始めた。目標はダムロー旧市街。いつも通りのゴブリン狩りだ。

ダムロー旧市街へと辿り着いた俺たちは、予想とは打って変わって順調にゴブリンを

狩ることができていた。今日は今までとは違い、個別に行動しているゴブリンが多い。集団になっていたゴブリンが、ごっそりといなくなっていたのだ。ホブゴブリンさえほとんどいなかった。

いや、思えば今までのほうがおかしかったのかもしれないな。俺たちは基本的にダムローへの入り口付近のみでゴブリンと戦っている。そんな外縁の、それも義勇兵と戦う可能性の高いところに頭の良いゴブリンがいつまでも居座っているわけがない。

だからこそ、俺たちはこの外縁部からあまり中に進まないようにしていた。調子に乗って奥まで進むと、そいつらと鉢合わせするかもしれないからだ。

未だに油断だけはしていないが、出発前のピリピリとしたムードは少しだけ弛緩していた。

「ほら、言ったとおりでしょ？　別段危険な戦闘もなかったし、俺らならいけるって！」

シュンは誇らしげにそう言う。ここまでの稼ぎはゴブリン四体を楽して銀貨６枚と多様な石、骨、牙の数々。下手すると、１０シルバー近くになるかもしれない。確かにこれは、誇らしくもなるな。

「い、未だに誰も怪我をしてないし、良いことだよね」

タケシは嬉しそうに言った。タケシが人を癒す機会がないというのは、それだけパー

ティーとしての安定が見えてきたってことだ。

確かにこのまま順調にいけば団章も近いだろう。俄然、やる気が出てきた。

現在俺たちは旧市街の廃屋内で休憩を取っていた。俺が背負ってきたリュックから水筒や軽食だったりを取り出し、周囲に小さく広げる。

周囲の建物より幾分もデカイこの廃屋にはゴブリンたちがいなかった。何度か周辺の警戒を行ったが、それでも特に問題もなかった。まだここで人間族が繁栄していたときは、パーティー会場にでも使われていたのかもしれない。それくらい、ここは大きかった。

入り口は二つあり、一つが市街の奥のほうへと続いていく方面、もう一つがオルタナ方面だ。警戒しておくべきなのは、奥へと続くほうの入り口だ。ここからゴブリンが入ってきた場合は、即逃走することになっている。オルタナ方面の出口は損傷が激しいが、最悪の時はそこを崩せば時間稼ぎにも使えるだろう。

もっとも、他にも出口になりえる隙間はたくさんあるため、あくまでも気休め程度かもしれない。

まあ万が一に備えて、合流ポイントはいくつか作っている。地図は作っていないが、このあたりの道はすでにだいぶ頭に入っている。最悪は各々で逃げてそのポイントのどこかで合流、といった形を取るべきだろう。

水筒に入った果物を絞った水を飲みつつ、この後のことを考える。

ここまで順調だったからこのまま先に進もう、と提案するシュンとタケシ。逆にすでにだいぶ稼げたから一旦戻るのもありじゃないか、というマイ。

正直な話、危険はあるがもう少し稼いでおきたかった。壁役（タンク）の俺は、装備にも少しお金がかかる。今でこそギルドのお下がりを格安で譲ってもらえているが、それがいつまでも続くとは思っていない。それに質が良い武器や防具はまったくないし、そもそも今の時点ですでに俺の装備している以上のものは見当たらなかったのだ。だから、ここらで金を稼いで高めの防具を買っておきたい。

幸いにも今は単独行動のゴブリンが多いし、チャンスといえるだろう。

……果たして、これも油断なのか？

「……俺も、シュンたちに賛成かな。先に進むのはまずいと思うけど、この周辺なら万が一のときは逃げ安そうだし」

俺の言葉に、シュンもタケシもうんうんと頷く。マイはまだ不安そうな顔をしているが、俺が賛成したことで諦めてくれたのか何も言わなかった。

「でもさあ～、なんで今日はこんなに違うんだろう？」

まあシュンの言う通り、昨日までのダムローとはゴブリンの行動の質が違った。

「で、でも、僕たちが楽になるなら、それに越したことはないよね」

タケシは若干吃(ども)らせながらもそう言う。
タケシの言葉もわかるが、こうまで露骨にゴブリンの動きが変わると罠なのかとも勘ぐってしまう。調子に乗らせて油断したところを付く。そんな罠だったらだいぶ成功しているかもしれないな。
だが、ゴブリンたちは俺たちを罠にはめようとしているとは思えない。俺たちはまだ新米なんだし、物量で押されればひとたまりもないだろう。こうやって遠回りしてまで俺たちを罠に嵌める価値はない。
だが、万が一の可能性も考えて行動しておくべきだろう。
「あのさ――」
俺が再度みんなに情報を共有しておこうと口を開きかけた時、遠くから怒号のようなものが聞こえた。
「――るぞ！　こっちだ！」
「ねえ！　まだ来てるよ！」
「――逃げきれない……っ！」
どこかで聞いた事のある声を先頭に、切羽詰まった声が。
精鋭っぽいゴブリンはこのあたりにはいなかった。　それは俺たちを罠に嵌めるわけじゃなく、別の、もっと言えばゴブリンにとってより厄介なパーティーを罠に嵌める

ためだったとしたら……っ！　カチリとピースが嵌った気がした。
そして、ダムローの奥へと続く扉が、大きな音を立てて開かれた。そこから見知った顔を先頭に合計五人の人影が駆け込んでくる。
「――みんな、こっちだ！　はやく！」
「セイヤ……？」
セイヤを筆頭とした、俺たちと同期のパーティー。
セイヤたちのパーティーのうち、怪我をしていない者はいなかった。全員がどこかしらに怪我を負っていて、戦士であろうショウヘイは右腕がぐっしゃりと潰れてしまっている。だが、彼は武器は持たずに左腕一本で誰かを背負っていた。あの金髪の魔術師はたぶん、派手な女のマイカだ。ぐったりとしていて、意識も朦朧としていそうだ。
激しい戦闘から逃げ出してきたような、焦った表情のセイヤたち。
「――え……イブキ……？」
そしてセイヤは、前方で休んでいた俺たちに気が付く。その顔は驚愕に包まれていて、本当にイレギュラーな遭遇だということがわかった。
セイヤのパーティーがやばいということはわかった。だから、俺はタケシに治療を任せようと声をかける。否、かけようとした。
だがその時、不意にセイヤの目があの時と同じ、取捨選択をするような非情な色に変

わり、叫ぶ。

「みんな、このまま直進！　後ろを振り返るな！」

セイヤはそれだけ言うと、有無を言わさずみんなを急かす。自らが殿（しんがり）に立ち、血にまみれた錫杖を力強く握り締めて。

セイヤのパーティーメンバーは何も言わず、ただ前を向いて俺たちの横を通り過ぎていく。セイヤと目があったが、彼は何も言わない。一瞬申し訳なさそうな顔をしたが、次の瞬間には非常なリーダーの顔になっている。俺と目を合わせることは、なかった。

――きっと、逃げないとまずい。

そう思ったが、俺たちはその様子を唖然として見送るしかなかった。俺を含めて、人伝てでしか聞いたことのなかった死の予感。それをセイヤたちから色濃く感じて、俺たちはあてられてしまったのだ。

そしてそれは、致命的なミスになった。

「みんな先に行け！」

オルタナ方面の入り口。そこでセイヤは一人立ち止まる。……まさかっ！

「セイヤ、やめろ！」

セイヤのしようとしていることを感じて叫ぶ。

だが、俺の制止も空しく、セイヤはその入り口のドアに思い切り錫杖を叩きつけた。

何度も、何度も。俺は止めさせるためにセイヤの元へ走ったが、損傷の激しかったそこは数度の衝撃でゆっくりと崩れ落ちていった。

瞬間、セイヤと目が合った。

〝――家族が危険に陥ったら、なりふり構わず守るつもりだ。何も犠牲にしても、何度後悔することになっても、きっと……〟

その目は、あの時の目と同じだった。きっとセイヤたちは、なにかから逃げている。俺たちよりも数段強い彼らが、逃走の一途をたどる。相当な相手だ。そして、俺たちの手に負える相手でもないだろう。

だが、俺がそう思ったのと同時に、無情にも目の前で入り口が崩れていく。

今日はいつもよりも順調だったかもしれない。それでも、油断だけはしないようにしてきた。オルタナに帰って結構な稼ぎだったと笑い合い、俺から少しみんなに歩み寄ってみようかとも思っていた。

そんな矢先に――

背後から、複数のゴブリンの怒号が聞こえてきた。

俺たちは、セイヤたちに敵をなすり付けられたのだ。

▪ｐｉｓｏｄｅ．９

＊

完璧に出口を潰され、しばし唖然としてしまう。だが、続いて聞こえてきた怒号で冷静になれた。何かを探しているような、明確な意志を持った声だった。

セイヤたちは何から逃げていた？　俺たちよりも強いパーティーが、あそこまで追いつめられる相手。俺たちの手に負えるわけがないのだ。ここは逃げの一手に徹するべきだろう。

「みんな、荷物はそのままで最低限の装備を持つんだ！」

俺の叫び声とともに、三人は行動を始める。

だが同時に、唯一残った入り口からゴブリンが入ってくる。その数、全部で四体。先頭にいるやつは相当にデカく、俺よりも少し大きいくらいだ。ホブゴブリン……なのか

？　あの体躯はそうじゃないと説明がつかない。だが、そいつは立派な鎧をつけていて、手には大きなバスターソード。ボロボロだけど、明確な凶器だ。

なにより気になったのはあいつの雰囲気。あれは普通のホブゴブリンとは違う。本来ホブゴブリンは知能が低く、ゴブリンに使役される立場だ。それなのに、あいつは違う。あいつがゴブリンを率いているんだ。

その予感を証明するように、理知的な瞳からは油断なくこちらを伺うような素振りが見えた。

そして、その瞳が神官であるタケシを射抜く。

……まずい！

「集合はポイント2！　万が一はぐれてもそこを目指してくれ！　シュン、二人を頼んだぞ！　俺が来なかったら先にオルタナへ戻るんだ！」

「わ、わかった！」

この建物にはいくつもの穴がある。そこから外に出れば、撤退は楽だろう。このデカブツは通れなさそうだしな。そして、撤退する時間を稼ぐには誰かが囮になるしかない。まあ、適任なのは俺しかいないだろう。ゴブリンたちとの距離は１０メートルもない。ここまで接近されてしまえば、全員で一緒に逃げ切るのは不可能だ。

みんなそれがわかっているから、何も言わずに走ってくれた。

「――きゃあっ！」

だが、不意にマイの悲鳴が聞こえた。俺は迫るゴブリンたちから視線をそらさず叫ぶ。

「シュン、どうしたんだっ!?」

「ゴブが一匹いて、マイが棍棒で殴られた！」

「わ、私は大丈夫！　痛いけど、動けないほどじゃないから！」

すぐさま二人の返答がある。極限状態だからか、マイも普段見せないような大声でそう言ってくる。おそらくゴブリンはすでに倒したようだ。

「イブキ！　絶対追ってこいよ！」

最後にシュンのその言葉が聞こえ、遠ざかっていく足音が響いた。

俺は改めて目の前のホブゴブリンを睨む。

すでに他のゴブリンたちは俺を囲むように移動していて、正面にホブゴブリンとゴブリン一体、左右に二体といった形だ。周囲のゴブリンたちは普通の個体みたいでボロボロの鎧を着ていて、武器もメイス装備が一体にショートソード装備が二体。こいつらだったら、どうとでもなる気がする。

だが、問題はホブゴブリンだ。人間の、それも大男が着るような重厚な鎧を着ていて、兜こそないが籠手のようなものまで装備している。見てくれは立派な重戦士だ。今も

俺を射殺すように睨んでいて、明確な知性を感じさせた。やはりこれは、相当異常なことだろう。

俺は手に滲む汗を拭うように鎧へ擦りつけ、ハルバードを握りしめる。グローブ越しだから意味がないのはわかっているのだが、自然とやってしまっていた。

ちくしょう、なんだよこれ。俺に任せて先に行けとか、キャラじゃない。こういうのはあいつのほうが……あいつ？　くそ、なにかが引っかかる。俺は今誰のことを思い出したんだ？　記憶が集まり、そして霧散していく。　――いや、今は目の前のことに集中しなくちゃな。

こういった死地を経験するのは初めてだ。目の前に立つホブゴブリンは、強者だ。戦士ギルドの教官であるガルバスと対峙しているような、そんな圧倒的な威圧感があった。救いは、背後に守るべきものがいないことだ。一人きりなら、逃げるくらいはなんとかなるかもしれない。そのためには、主導権を握らないと……！

――やるしか、ない……！

「うおおおおおぉぉぉぉおおおおお……!!!!」

戦士のスキル〝雄叫び（ウォークライ）〟。

独特な発声方法で特殊な大声を出して、相手を威圧する。身構えてなければどんな生物だって少しは怯むだろう。

事実、ゴブリンたちは怯んだようで動揺しているようだ。ホブゴブリンでさえ面食らっているみたいで、一瞬の硬直の後に急いで身構えようとした。

だが、俺はその隙を逃さない。

「うらあぁっ……！」

自分を鼓舞するように大声を張り上げ、右側にいたゴブリンへと斬りかかった。ハルバードを大きく振るって力任せに叩きつける。ゴブリンは必死に剣をハルバードの進行方向に出して遮ろうとするが、それは悪手だ。これでも膂力には自信がある。ゴブリンごときに負けてたまるか！

ゴブリンの防御もろともハルバードを叩きつけ、ゴブリンを吹き飛ばす。体重の軽いゴブリンなら、こうすることで距離を取ることができるのだ。本来ならもう少し丁寧な戦い方をするのだが、今はそんな余裕はない。

狙い通りにゴブリンを吹き飛ばしたことで、脱出口が見えた。俺はなりふり構わずそこから逃げようと、全力で地面を蹴って進もうとした。

だが不意に強烈な殺気を感じ、俺は何も考えず左に飛び退いた。すると、今まで俺のいた位置をものすごいスピードでショートソードが通り抜けていく。

まさか、剣を投げたのか……？

俺は地面で受け身を取って、急いで立ち上がる。敵に囲まれた状態で寝転がっている

なんていうのは自殺行為だ。すぐに周囲を確認し、再びハルバードを構えた。
俺が吹き飛ばしたゴブリンはすでに立ち上がっていて、俺の前で四体が集まっている。
剣を投げたのはホブゴブリンみたいだな。あんな威力、ゴブリンには出せない。ゴブリンのうちの一体はそのまま武器を持たずに俺を威嚇していた。
どうやら、逃がす気はないらしい。後ろを向いて逃げ出したら容赦なく攻撃してくるだろう。さっき避けることができたのだって、運が良かっただけだ。
俺は、こいつらを倒せるのか……？　目の前の四体を見て、どうしてもそう思ってしまう。ゴブリン三体はまだなんとかなると思う。だけど、このホブゴブリンはどうだ？
こいつはたぶん、相当強い。セイヤたちもこいつにやられたんだろう。そんな相手にたった一人で、勝てるのか？
……いや、勘違いするんじゃない。勝たなくていい。生き残ればそれでいいんだ。
そう思ったら、なんとなく落ち着いた。
俺はハルバードの持ち方を変える。ゴブリンたちから目を逸らさず、ゆっくりと。
左足を前に出し、半身に構える。そして両手の親指を中心に向け、穂先をゴブリンたちに向ける。この持ち方では膂力を生かした一撃は期待できないが、その分小刻みな動きに対応できる。勝負を急ぐのではなくて、耐えて耐えて、少しずつ削っていく。それ

が今の俺にできる最善だ。

俺の雰囲気が変わったのを感じてか、ゴブリンたちが飛びかかってきた。ホブゴブリンは悠然と後ろで構え、俺を観察している。まず一体が殴りかかってきたので、それをハルバードで弾く。本当ならここで突き刺して戦闘不能にしたいが、そうすると後続への対応が追いつかない。斧の横腹で素手のゴブリンを左側に殴りつけ、次にかかってきたメイスのゴブリンに意識を切り替える。メイスは打撃武器だ。ショートソードよりも間合いは狭いが、その分下手に受けると武器を弾かれる。でも――

「――ふんっ……！」

メイスで殴りかかってくるより早く、俺は鋭く穂先を突き込む。ゴブリンは痛みで呻くが、浅い。その怯んだゴブリンを尻目に残りの一体が斬りかかってくる。だけど、それも想定済みだ。他の二体はまだ体勢を立て直していないし、ホブゴブリンも手出しをしようとはしていない。ここは決めるべきだろう。

一気に左足を踏み込み、そのゴブリンを石突き付近で思い切り下から殴りつける。ゴブリンは慌ててショートソードでそれを防ぐが、俺はそのまま右足を踏み込みショートソードの刃の上を滑らせ、ゴブリンの胸へと石突きを突き入れた。人間でいうとことの鳩尾のあたり。そこを思い切り突かれたことで、ゴブリンは「かひゅ……っ」と掠れた声を漏らす。隙だらけだ。ハルバードを手元に引いて、次は左から素早く斧の部分でそ

のゴブリンの首筋を狙う。

「がひゅっ……！」

空気の漏れるような小さな呻き声と共に、ゴブリンの首から血が噴き出す。そして、地面に倒れてビクビクと痙攣を始めた。よし、最小限の動きで一体倒せたのは良い成果だ。

すぐに残った二体のゴブリンに意識を切り替える。人数的に不利な場合は、待ちに徹するのが一番良いだろう。だが、浮き足立っている今なら……！

俺はそう確信して、最初に殴りつけたゴブリンとの距離を詰める。その一歩で持ち方を従来のものへと変えて、右から大きく振りかぶりゴブリンを斧部分で殴りつける。避けようとしたゴブリンだったが、避けきれずに　右足を切り裂かれる。痛みに気を取られている隙に、俺はハルバードを振るった勢いを殺さず回転させ、頭上で振り被る。

「うおおおぉぉぉ……！」

両手で柄の下部を握りしめ、全力で振り下ろす。足を切られて立ち止まったゴブリンに避ける術はない。悪あがきなのか防具をつけていない両手を眼前で構えるが、そんなものは障害でさえなかった。眼前に掲げた両腕もろとも、俺はゴブリンを叩き潰した。頭部を潰されたゴブリンは、力なく地面に崩れ落ちる。周囲に血だまりができるが、気にしてはいられない。

最後に残ったゴブリンは唖然としていた。仲間が二人やられたことで動揺しているのか、隙だらけだ。素早く近付いて、首をひと突き。それだけであっけなく崩れ落ちた。

これで、残るはホブゴブリンが一体。

途端に、汗が噴き出してくる。今までにないくらい集中して戦闘を行ったが、こんなにも疲れるものなのか……。息が少し荒くなるが、相手はそんなことを考慮してくれるほど馬鹿ではない。

隙を見せないように息を整えつつ、残ったホブゴブリンを睨みつける。

問題はあいつだ。セイヤたちのパーティーを崩壊させたのもあいつに違いないのだ。油断なんてできるわけがない。ホブゴブリンは仲間がやられたのを見ても、特に何も思っていないみたいだ。こいつはゴブリンを仲間だと思っていないのかもしれないな。

ホブゴブリンはニヤリと笑みを浮かべて、錆び付いている大剣を構えた。どうやらやっとこいつが出てくるみたいだ。

俺にはゴブリンの表情なんてわからないが、心底楽しそうに笑っていることだけはなんとなくわかった。

「ギイイイイアアアア……！」

ホブゴブリンは、耳障りな大声をあげて突進してくる。その姿はだいぶ様になっていて、それこそゴブリンらしからぬ力強さがあった。そしてなにより――

「――こいつ、速い……っ！」

一足飛びに距離を詰めてきて、ホブゴブリンは大剣を振るう。仕方なく俺はハルバードで受け止めるが、想像以上に衝撃が強くて弾き飛ばされそうになる。それをぐっとこらえて、ギリギリと鍔迫り合った。

キツイが、耐えられないほどじゃない。ホブゴブリンは押し合うだけじゃなく、膝をもぶつけてくる。どうにかして体勢を崩そうとしているみたいだ。

このままじゃジリ貧。逃げようにも背中を見せればばっさりといかれるだろう。ならば、打ち合うしかない。

俺は思い切り力を込めて、ホブゴブリンの大剣を押し返す。自身の二の腕が膨れ上がるのを感じながら、全力で。無理に耐えてくれれば楽だったんだが、ホブゴブリンは俺の力を受け流すようにして後ろへ下がった。

そこへ追撃。俺は飛び退いたホブゴブリンを追って前へと詰め、ハルバードを突く。だがそれは、軽々と躱されてしまう。引き際に鉤爪（フック）で足を取ろうとしたのだが、それすらもだ。そしてホブゴブリンは躱しざまにも大剣を振るい、俺の頭の位置を水平に薙（な）いでこちらを攻撃してくる。俺は必死に首を傾けてそれを避けようとするが、行動にうつるのがあまりにも遅すぎた。

「――くそっ……！」

頭に装備した皮製のヘッドギアもろとも、こめかみをパックリと斬られてしまう。義勇兵になってから初めての怪我らしい怪我だ。だが、意外にも冷静でいられた。どくどくと血が流れてくるが、ギリギリ目には入らない。

……あの攻撃は、避けられたはずだ。

ハルバードでの戦闘がゴブリン相手には有効だっただけに、少しだけ気を抜いてしまったのかもしれない。カウンター気味の攻撃を喰らい、咄嗟に反応ができなかった。

下手な攻撃は、こいつにはまず当たらない。それを念頭に置かないと今みたいにキツイしっぺ返しを食らうことになるだろう。

ホブゴブリンは楽しんでいるのか、ニヤニヤとした笑みを浮かべている。

その顔はものすごくムカつくが、冷静さを欠いてはいけない。

一度、深呼吸。

意識を変えろ。

今まで通りじゃいけない。

目の前の存在と戦うには、もっと集中しないといけない。

弱いままでは、いけない。

すぅ、と息を吐いて、ホブゴブリンを睨みつける。

コイツを、殺す。

地面を蹴ったのはどちらが先だったのか。俺とホブゴブリンはほぼ同時に飛び出し、ぶつかり合った。金属と金属が激突する甲高い音が響き、大気が震えた気がした。何合も打ち合い、その度に衝撃で手が痺れる。それでも、一瞬でも気を抜けば致命傷を受けるのがわかっているから耐えるしかない。

時には拳を、時には蹴りを、時には足踏(スタンプ)みを。いろいろな手段を用いて撹乱し攻撃を繰り返すが、ホブゴブリンだけあってどうしても決定打にはならない。とんでもない耐久力だ。話に聞いていたオークとも遜色ないどころか、それ以上の力を持っているように感じる。

すでに俺は身体のいたるところを斬られていて、体力的にも消耗していた。こいつの剛剣は革鎧や鎖帷子程度は布切れ同様なのだろう。ハルバードで逸らしたりはしているが、どんどん身体を刻まれていく。自分の命が血となって身体中から流れ出ているような気がして、どうにもしんどかった。

ホブゴブリンの鎧も俺の攻撃で所々凹んでいるが、あくまで打撲程度だろう。それくらい、俺とこいつには装備にも差があった。まったく、モンスターに装備で負けてるとか笑えない。質で勝ってるのは武器くらいだ。

だが、そんな不利な状況でも不思議と絶望感はなかった。むしろ、どこか心地良くて満たされていくような感覚。身体中の細胞が生きたい、生きているんだと叫んでいるよ

うで、妙な高揚感を覚えた。そして、それが無性に楽しかった。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……ッ!!!!」

俺は吠えながら、全力でハルバードをぶつける。近距離でガンガン音がなり耳が痛むが、それがどうした。自分の口角が上がっていくのを感じる。

どれくらいそうして打ち合っていただろうか。

それは、唐突だった。

ガキインッ！　と一段と高い音が鳴り、ホブゴブリンの持つバスターソードがポッキリと折れる。ホブゴブリンも、そして俺もそれに唖然としてしまうが、これはチャンスだった。

――このままこいつを叩き斬るか、それとも背を向けて逃走するか。

迷ったのは一瞬だった。

隙を見せたホブゴブリンの足を斬りつけ、くるりと振り返る。そして、そのまま振り返らずに走った。

こいつを倒しても、集合ポイントまでたどり着けなければマイたち（あいつら）が危ない。すでにオルタナへと脱出しているかもしれなかったが、万が一まだ待っていた場合、日が落ちてからだと危険すぎる。

斬りつけた足のせいか、ホブゴブリンは追ってこないようだ。

脱出用の穴から建物の外へと這い出て、血まみれのヘッドギアをむしり取ると投げ捨てた。廃屋からは、悔しがるようなあいつの叫び声が聞こえた。

集合ポイント２。

入り口近くから順に番号付けしただけなので、ここは集合ポイントの中では二番目にオルタナから近い場所だ。あの廃屋から逃げ出した俺は、ようやくそこに辿り着いた。

万が一に備えて、足音を殺して進む。もっとも、俺の場合は鎧の音が少なからずあるためあまり意味はないのだけど。ゴブリンがいた場合、少しでも発見されるリスクは減らしておきたかった。

「――おい、タケシ！　どういうことだよ!?」

だが、ゆっくりと進もうとしていた俺の耳に、突然そんな怒号が聞こえてきた。声の主は……シュンか。シュンがこうして怒鳴ることなど初めて見た。何かがあったのか？

俺は急いで廃屋内へと入っていく。

「――すまん、待たせた！」

廃屋に入った俺を待っていたのは、ものすごい形相でタケシを問い詰めるシュンと、そんなシュンに怯えるタケシ。そして、ぐったりと地面に横たわったまま動かないマイだった。

▪pisode.10

＊

「――イブキ！　大丈夫だったのか!?」
駆け込んできた俺を見て、シュンが言った。その顔から未だに怒気は萎えていないことがわかるが、とにかく状況を説明してほしかった。
マイはぐったりしているが、微かに呼吸はしているようだ。俺はマイの枕元へと向かい、片膝をついた。見た所外傷はないが、身体全体から力が抜けているみたいだ。
「――それより、マイはどうしたんだ？　それに、なんでシュンはタケシと揉めているんだ？　頼むから、説明してくれ」
正直身体中の傷が痛むが、この状況を把握しなくてはいけない。こんな時に仲間割れなど自殺行為だ。
「――マイは、ここに辿り着くまではなんともなかったんだ」

シュンの話を聞く限り、マイはここまで逃げてきてからいきなり崩れ落ちたんだとか。それまでは普通に会話もできていたし、毒矢だってくらっていないから毒の可能性もない。だからたぶん、逃亡の際に頭に食らった棍棒のダメージだろうというのがシュンの見解だった。それは俺も同意だ。

頭部へのダメージは楽観視できない。現にマイは力なく横たわったまま動けないみたいだ。下手したら、すでにどこかに麻痺が出てきているかもしれない。

考えてみれば、ゴブリンの棍棒を頭部に食らうなんてことは相当な衝撃だ。ゴブリンは体躯こそ小さいが力はある。人間族と鍔迫り合いだってできるし、その一撃の威力は馬鹿にできない。それを頭部に食らって、無傷でいられるわけがないのだ。マイの場合は裂傷がなく血が出ていなかったこともあり、それに頓着しなかった。だが、こぶさえできていないというのはまずい。脳内で出血していた場合、手遅れになるかもしれなかった。

「それなら、早く治療を……！　タケシ……ッ！」

だが、それならばなぜ、タケシは治療をしていないんだ……？

癒光（ヒール）を使えば、なんとかなるかもしれないのに。苦しそうなマイの痛みを、少しでも和らげることができるはずなのに。

俺の叫び声に、タケシはビクリと肩を震わせた。シュンは依然として、軽蔑するよう

にタケシを睨んでいる。
「ぼ、僕には……僕にはできない……！」
「さっきからずっとこの調子で、マイを治そうとしないんだ！」
「……タケシ！　いったいどういうことなんだ？」
タケシは何を言っているんだ？　魔力切れとかそういう雰囲気じゃない。何かを怖がっている。早くマイを治療しないと取り返しのつかないことになるかもしれないのにだ。
「ぼ、僕には……ッ！」
だが、タケシは突然走り出した。まるでゴブリンたちから逃げるような、そんな恐怖に歪んだ顔をして。
「はぁっ!?　おい、待てよタケシ！」
シュンが咄嗟にタケシを捕まえようと手を伸ばすが、空を切る。俺はあまりのことに唖然としてしまい、動けなかった。本当に、意味がわからない。
兎にも角にもタケシを追いかけ、マイを治療してもらわなけらばならない。迷っている時間はなかった。俺は立ち上がり、シュンに叫んだ。
「シュン！　俺が追いかけるから、マイのことを頼む！」
「あ、ああ……。もう、意味わかんねえよ……」

シュンは俺の言葉に頷いたが、力なく俯いてしまう。俺だって同じ気持ちだ。だけど、うだうだしている時間はなかった。

「……イ……ブキ、くん……？」

だが、駆け出そうとした俺に弱々しい声が聞こえた。

「マイ？　気がついたのか……！」

俺は再びマイの横で片膝をついて、声をかける。

「マイ、大丈夫か!?　聞こえるか？」

「イブキくん……？　シュンくん、タケシくん？　ど、どこにいるの……？　なんで私……真っ暗で何も見えないよ……っ」

マイは俺の言葉に答えずに、不安げな口調でつぶやいている。目は開いているが、どこか虚ろで何も写していないように見える。そしておそらく、耳も聞こえていないんだろう。俺の声が聞こえている様子はない。

そんな彼女の様子を見て、俺は何も言えなくなった。そっと、彼女の手を取る。

「……っ！　誰なの……？」

触覚はあるようで、自分の手が取られたことには気がついたみたいだ。俺はマイに優しく声をかける。

「マイ、待ってろ。タケシを連れてすぐ――」

「――私、死にたくないよ……」
「え……？」
否、かけようとした。
「私は……嫌だったのに、怖いって言ったのに……ッ！　どうして私が……！　もう、こんなの嫌だよぉ……」
漏れる嗚咽。マイから聞こえるのは、隠していたであろう本音。
「イブキくんのせいだ……ッ」
それは、俺の胸を容赦なく抉った。
「私は義勇兵なんて、なりたくなかった……！　それなのに……！」
マイは俺の手を握りつぶさんばかりに握りしめ、涙を流していた。
「死にたく、ないよぉ……」
それが本音なのかもしれないが、俺に言うつもりはなかったのかもしれない。だが、こうも面と向かって言われると、やはり、結構辛かった。
涙を流すマイから手を離し、立ち上がる。
「シュン、マイの手を握っててやってくれ」
「イブキ……」
「……頼んだ」

オルタナに帰ったら、マイに謝ろう。そして、今までのこと、これからのことをしっかりと話そう。そのためにはまず、タケシを見つけないといけない。

シュンがマイの横に座り込んでその手を握ったことを確認してから、俺はタケシを追って廃屋を飛び出した。

「くそっ！　どこまで行ったんだ!?」

廃屋を出た俺は、半ば闇雲に走り回っていた。

どこかへ走り去ってしまったタケシを一刻も早く連れ帰らないと、マイが危ない。マイとシュンを連れて探すことも考えたが、頭部にダメージを負ったマイはできるだけ動かさないほうが良いだろう。

それに、本来神官は真っ先に狙われる存在だ。俺たちのパーティーは運良く今まで奇襲を受けることがなかったが、少しでも知能のあるモンスターは神官がパーティーでの重要な役割を担っていることを知っている。そんな神官であるタケシがたった一人。相当に危険だ。

もしタケシがここから逃げようとしたのなら、オルタナ方面へと向かっているはず。そんな淡い期待を込めて、俺はオルタナ方面へと走っていた。少数のゴブリンやホブゴブリンは見かけるが、あの鎧のホブゴブリンのような奴らはいないみたいだ。それだけ

が、救いだった。

しばらく周囲を警戒しつつ進むが、タケシらしい人影は見当たらなかった。

一旦戻るかこのまま探し続けるかを考えていると、不意に叫び声が聞こえた。

「ひぃぃぃっ……!! く、来るなぁ……っ！」

「タケシ……っ!?」

聞こえてきた声は確かにタケシのものだった。

どうやら何かに襲われているようで、聞こえてきた声は切羽詰まっているようだ。聞こえた声は比較的近く。俺はそちらへと走った。

俺がいた場所から数本横の路地。そこでは3体のゴブリンが何かを追って廃屋へと入っていくところだった。おそらく、タケシを追っているんだろう。

俺は急いでそちらへと向かい、中の様子を伺った。中は比較的広く、崩れた天井からは陽の光が差し込んでいる。急いで中へと突っ込むことも考えたが、闇雲に突っ込んでいってもどうにもならないだろう。

「や、やめ……来るなぁ……！」

タケシは廃屋の壁を背にしてスタッフを振り回している。それをあざ笑うかのように、三体のゴブリンはタケシを囲んでニタニタとした笑みを浮かべていた。剣持ちが二体に棍棒持ちが一体。そいつらは武器でタケシを突く振りをしたりして、完全に遊んで

いる。

周囲への警戒も薄く、奇襲するなら今がチャンスだ。

俺は一気に中へと踏み込んだ。当然ゴブリンたちも俺に気がついたが、武器を構える前にハルバードで一番手前のゴブリンをひと突き。首元を狙ったそれは寸分違わずゴブリンの首を貫いて、絶命させた。

残りは剣持ちと棍棒持ちの二体。残った二体は未だに動揺しているみたいで隙だらけだった。

俺は剣持ちに突きを放ち牽制。剣持ちがガードしたのを見計らって、棍棒持ちを思い切り蹴飛ばした。俺に攻撃をしようとしていた棍棒持ちはまさかの攻撃にたたらを踏んで後退する。それに一瞬気を取られた剣持ちの足を突こうとするが、ギリギリ剣持ちは飛び上がってそれを避ける。

だが、狙い通りだ。着地際を狙って剣持ちの足を薙ぎ、転倒した剣持ちの胸へとハルバードを突き入れる。「ぎぃ……！」と短く鳴いて、剣持ちゴブリンは動かなくなった。これで、あと一体。

俺が残った棍棒持ちのゴブリンに向き直ると、そいつは振りを悟ったのか後ろを向いて逃げ出した。一瞬追撃しようかとも考えるが、今はタケシを連れ帰るのが先決だ。

逃げていくゴブリンから視線を切り、壁際で蹲るタケシを睨む。

「――タケシ……！」

なんで逃げ出したとか、なんで治療しないんだとか、聞きたいことはたくさんあった。だが、それはあとでいい。今はとにかく、一刻も早くタケシを連れ帰らないとマイが危ないのだ。

俺にも怯えているようで、タケシは涙目になって何も言わない。

「……あ～もういい。さっさとマイたちんところに戻って、治療してくれ……」

俺はため息をつきつつ、諦めたようにそう言った。怒ったところでタケシは動いてくれない気がしたし、正直彼に呆れてもいた。

「ふざけるな……ッ！」

だが、予想に反してタケシから出てきたのは怒声だった。

「なんなんだよアンタは！　いつもいつも偉そうに！」

いつもの大人しいイメージのタケシとは違う、恨みの籠った視線を俺に向け射殺さんばかりに睨んでくる。

「あいつらの誘いを断って、誰も頼んでないのに恩着せがましく俺たちに付いてきてさ！　それで勝手にリーダー気取って、何様のつもりなんだよ！　別に僕たちは戦いたくなんてなかったんだ！」

タケシは俺のことを、ずっとそう思っていたのか。確かに俺は残されたタケシたち三

人に同情し、パーティーを組んだのかもしれない。でも、俺がいなかったら三人ともこうして生活できてはいなかっただろう。思い上がりかもしれないが、そう思う。

これがただのタケシの八つ当たりで、他の二人はそう思っていないのかもしれない。だが、先ほどもマイから同じようなことを言われた俺には、笑って流すことができなかった。

「タケシお前、そんなこと思ってたのか……？」

「気がつかなかったのか？　そうだよなぁ、アンタは孤高を気取って僕たちのことなんて気にしてなかったもんなぁ？　だから僕たちのことを何も知らなくても無理ないさ！」

タケシの顔には狂気が宿っていた。だが、その表情はどこまでも真剣で、本気だった。

確かにタケシの言う通り、俺は三人とはまったく話をしていなかった。いろいろ言いたいこともあったんだろうけど、こうして溜め込んでいたのかもしれない。

だが――

「――今は時間が惜しい。早く戻ってマイを治してくれ。そして、全員でオルタナに帰って、しっかりと話し合おう」

言いたいことはオルタナに帰ってから聞く。三人のことをもっと知ろうと、そう決めたのだ。その時に、こうやって罵倒されることも予想はしていた。タケシやシュン、マ

イだって俺やそれぞれに言いたいことがあるはずだ。
言いたいことを言い合って、全部を吐き出して、そうすれば俺たちはやっと本当のパーティーになれるだろう。そのためならいくらでも罵倒は受けるし、嫌ってもらっても構わない。
だから今は、マイを助けることが最優先だ。
「――……っ！」
俺の言葉にタケシは驚いたように目を見開く。そして、申し訳なさそうに俯いた。
「タケシ……？」
「もう遅いよ……ぼ、僕はマイを治せない……」
タケシは小さく呟く。その声音からは涙を堪えているようにも感じられ、タケシの痛みが伝わってきた。
「治せないって、どうしてだ……？」
「だって、僕は――」
タケシが言葉を続けようとした時に、ヒュンと空気を裂く音がした。同時に、タケシの口から真っ赤な血が漏れてくる。
「……ごふ……っ？」
タケシは自分の手に落ちてきた血を見て、信じられないといった表情を浮かべて膝を

ついた。その首には鋭利な矢が突き刺さっていて、空気が漏れているのかぷくぷくと泡立っている。

「――タケシ……ッ！」

俺は急いでタケシの元へ向かおうとするが、その前にもう一本矢が飛んでくる。そしてそれはタケシの頭に突き刺さり、膝立ちだったタケシが崩れ落ちた。俺はもう一射こないうちにタケシを遮蔽物の裏へと引っ張る。おそらく崩れた天井から狙撃されたのだ。横たわったタケシはピクピクと痙攣していて、口からは止めどなく血が溢れている。タケシの瞳からは、すでに光が失われていた。

「おい、タケシ！　しっかりしろ！　みんなで帰るんだろ?!」

そう言っても返事がないことはわかっていた。でも、それを受け入れるなんてできるわけがなかった。

さっきまで目の前で話していて、ずっと言ってこなかったタケシの本音を吐露してくれたばかりだったのだ。オルタナに帰って、お互い言えなかったことを話して、喧嘩でもなんでもしようとそう思っていた。

「その矢先に、これかよ……」

もう、どうすればいいのかわからなかった。不思議と現実味がわかなかったが、タケシがいなければマイが危険なままなのだ。だが、タケシは死んでしまった。それをもう

あっさりと。人はこうも簡単に命を落とすんだと、ぼんやりと感じた。

本当にもうどうすればいいのかわからずに、途方に暮れるしかなかった。

「……とりあえず、シュンたちんとこに戻らないと」

現実味を感じなかったことが逆に良かったのかもしれない。そのおかげで、なんとか動ける。目の前で仲間を失ったが、まだ冷静でいられた。

タケシを物陰に引きずり込んでからしばらくは矢が射ち込まれていたが、今はもう諦めたのか射ってはこなかった。俺は周囲の様子を伺いつつ、タケシを背負った。不死の王（ノーライフキング）の呪いで、死んだ者は数日で生ける屍に変わってしまう。タケシをそんな風にはさせられない。

俺はシュンたちの元へと急ぎつつ、今後の行動を考えていた。とにかくマイを早く治療しないとまずいことになる。最悪は、タケシを置いて三人でオルタナへと向かうべきだろう。シュンにマイを背負わせて俺が先導し、最速でオルタナへと帰ってマイを治療する。そして、それからタケシの亡骸を取りに戻ればいい。

頭の中で考えをまとめつつ、先を急いだ。探している時は半ば闇雲だったから時間がかかったが、今はシュンたちのいる場所がわかっている。ほどなくしてシュンとマイの待つ廃屋へと辿り着いた。

だが、どこか様子がおかしかった。妙に静かで、生き物の気配がない。そして、廃屋

内からはすでに嗅ぎ慣れてしまった嫌な臭いが漂ってくる。さきほども感じた、ツンと鼻をつく血の臭い。

嫌な予感がして、俺はタケシを下ろして廃屋内へと駆け込んだ。

「シュン！　無事か!?」

廃屋内には、ばらばらに点在する3体のゴブリンの死体。ここを出た時と同じように横たわったマイ。そして、全身から血を流すシュンの姿があった。

シュンは執拗に全身を刺されたようで、文字通り血まみれだ。シュンの近くには一体のゴブリンの死体があるが、そいつの剣だけが異様に血まみれになっていた。あいつがシュンを刺した奴なんだろう。背中にはシュンの愛用する短剣が刺さっていて、それが致命傷になったようだ。シュンの剣鉈は近くに落ちていて、その刀身はぽっきりと折れていた。

全身の力が抜けて、俺は膝から崩れ落ちた。無力感に苛まれ、頭がガンガンと痛んだ。少し考えればわかることだったのだ。シュンは狩人、その攻撃ではゴブリンと対抗することは難しく、仲間と連携することで真価を発揮する。そんなシュンをたった一人残していけばどうなるかなんてことは明白だった。

「――イブキ……？」

小さな声がした。うっすらと目を開けたシュンが、虚ろな瞳で俺を見ている。俺は急

いでシュンの元へと向かい、膝をついた。
「シュン!?　大丈夫か!?」
一縷の望みをかけてシュンに声をかける。
「ごめん……。俺、できると思ったんだ……」
咳き込みながら、シュンが言葉を紡ぐ。一言話すたびに口から血が漏れてきて、もうシュンが助からないであろうことがわかった。
「俺、イブキみたいに強くなりたいって、そう思っててさ……。イブキのこと見返したくって、必死に頑張って……だから、ダムローから逃げ出したくなかった。イブキがビビるようなところで俺が活躍すればって……そう思って……結局、マイも守れなかった……」
シュンの言葉にマイのほうを見るが、確かに彼女はすでに息をしていなかった。横たわったまま、その瞳はただただ虚空を見つめている。
そんな俺を見て、シュンは苦笑いを浮かべた。その瞳からは涙が溢れ、静かにこぼれ落ちていく。
「……死にたく、ないなぁ……」
そして、そう言ったきりシュンは何も言わなくなった。
遠くから何かの動物の声がする。それは虚しく木霊し、周囲に響いた。

朽ちた廃屋内で、俺はただただ途方に暮れていた。これからだと、これから俺たちは変われるんだと、そう思っていた。

いつも通りにゴブリンを倒して、いつも通りオルタナに帰ってくる。そして、俺は三人との距離を縮めるためになけなしの勇気を振り絞って食事に誘う。たくさん酒を飲んで、酔いに任せてお互いが思っていることをぶつけ合って、大喧嘩だってする。最初はギスギスするかもしれないけど、時間が経つに連れて少しずつ解けていって、パーティーとして成長する。そうして正式な義勇兵になって、それでもまだまだ俺たちの未来が続いていく。

そう、思っていたんだ。

だけど、それはもう叶わない。今だに現実味がなく、頭がぼうっとしてるけれど、それだけは理解できた。

俺は前のめりに倒れこんだ。だんだんと身体に力が抜けていき、糸が切れた人形みたいに身体が動かなくなった。思えば血を流しすぎたのかもしれない。未だに頭部の出血は治(ねさま)っていないし、身体中からも血が出ている。

薄れゆく意識の中、俺はただ己の無力さを呪うことしかできなかった。

この日、一つのパーティーが壊滅した。

▪ｐｉｓｏｄｅ．１１

＊

サイリン鉱山での狩りにも慣れてきて、第三層にしばらく通うことで少しずつお金も貯まってきた。

三層に現れるフォアマンとフォロワというコボルドの労働者たちを標的にして、ひたすらに経験値を貯めたのだ。強さはフォアマンたち次第で、フォアマン単体での戦闘能力はもちろん、指揮能力によっても難易度が変わってくる。ただ、どっちにしろフォアマンさえ楽してしまえば、フォアマンの子分であるフォロワたちは敵じゃない。

この狩りは地味にうまかった。この先の四層、五層を見越せるのもいい感じだし、自然と四層、五層が視野に入ってくるのでモチベーションが上がるのだ。

そうして貯めたお金を使って、おれたちは新しいスキルも覚えた。おれは蜘蛛殺（スパイダー）しという後ろから組みついて致命傷を与えるスキル。それを覚えるために、バルバラ先生に何度も何度もその技をかけられ続けた。正直、思い出すだけでもしんどい。女云々の話もされたしで、あまり思い出したくないんだよなあ。

おれ以外のみんなも各自で新しいスキルを覚えて、パーティーの戦力は大幅に増強された。そのおかげで、第三層での戦闘も格段にやりやすくなった。今日もフォアマンとフォロワを無傷で倒すこともできたし、稼ぎだって割と良かった。ランタが四層に行こうと言い出したりはしたけど、明日に回すと言ったら素直に頷いてくれた。うん、意外だったよな、ほんと。

そして今、シェリーの酒場でメリイと二人で飲んでいる。嫌がられたらどうしよう、とか思ったけど、さいわいなことに杞憂だった。うん、よかった。ランタがいうようにおれは臆病（チキン）なのかもしれないけど、バルバラ先生にからかわれたこともあったからしょうがない。

お酒を飲みながら、メリイと色々なことを話した。宿のこと、おれたちのこと、レンジたちのこと、メリイの仲間のこと。

メリイのかつての仲間たちは、サイリン鉱山で命を落とした。おれたちも、このままいけばいずれそこにたどり着くかもしれない。おれたちだって、仲間を亡くした。それは辛いし、とても苦しい。マナトが息を引き取ったその場所には、おれたちは一度も近付いていない。そんな場所が存在することを、忘れてしまいたいくらいだ。だからこそ、メリイはどう思っているのか、聞いておかないといけなかった。

「――迷惑かもしれないけど」

メリイは自身の覚悟を告げると、最後にそう付け加えた。そんなメリイが、かわいいと感じた。そして、守ってあげなきゃ、とも。実際守れるのか、と言われると、まあ微妙なんだけどさ。

「迷惑なんかじゃないって」

おれは笑みを浮かべて見せた。柄じゃないかもしれないから、頼り甲斐はなさそうかもしれない。でも、少しでもメリイが安心してくれたらと思った。

やばいな、これ。なんとなく、メリイのことを好きになってしまいそうな気がした。ならないけど。

――だって、おれなんかじゃ、釣り合わないって。

「――そういえば」

おれが自分自身の強力な煩悩と戦っていたら、不意にメリイが呟いた。

「この間の見習い義勇兵って、大丈夫そうなの？」

この間っていうと、イブキたちのことかな？　一つ後輩のパーティーも同じ宿舎だけど、彼らはメリイと面識はなかったはずだ。

おれはあの大きな後輩を思い出し、苦笑い。イブキはしっかりとやっていると思う。四人パーティーって人数的にも難しいと思うけど、他の三人を先頭に立って引っ張っていく姿は少しだけレンジっぽい気がした。レンジほど際立ってはいないけど、なんとな

く。いや、レンジがありえないだけなんだけどさ。

確か戦士ギルドに入ったって言ってたし、モグゾーも後輩ができたって少しだけ嬉しそうにしていたのを覚えている。モグゾーほど厚みはないけど、鍛えているのは衣服越しでもわかる。

おれなんかとは違って、すごく男っぽい身体つきだ。グリムガルでの日々で結構筋肉はついたけど、イブキほどではない。羨ましいか羨ましくないかでいうと、すごく羨ましい。おれがああいう風にマッチョだったら、恋愛ごととかにも積極的になれるのかな、とか考えてしまう。たぶん、マッチョになってもおれの性格は変わらないだろうけど。

ランタなんかはイブキのことを生意気な奴だって言ってるけど、見た目からして少し年上っぽいし、なんとなくタメ口でいてくれたほうがしっくりくるんだよな。たぶん、メリイと同じくらいの歳だと思うし。なにより、生意気さでいったらランタのほうが格段に上なのだ。まあでも、イブキはその辺りに気を使っているのか、基本的におれとしか話すことはない。たまにユメやモグゾーとも話すみたいだけど。

「イブキたちが、どうかしたの？」

まさか、メリイはイブキに気があるのかな。そんなことを思ってしまうおれはたぶん、結構、酔っ払っているかもしれない。おれの問いに、メリイは何かを考え込むよう

にしてから口を開いた。その顔はどこまでも真剣で、少しだけ酔いが覚めた気がした。
「ハル、もしかしたらなんだけど、彼のパーティーの――」
「――すみません！　ハルヒロさんですか!?」
だが、メリイの言葉を遮るように、横合いから声をかけられた。おれも、そしてメリイも驚いたようにそちらを見る。そこには魔法使いっぽい装備をしたショートカットの女の子と、不安そうな顔をしているユメが立っていた。ユメが一緒ってことは、ユメの知り合いの子なのかな？
「え、えっと、そうだけど……。いや、どうかしたの？」
ショートカットの子は切羽詰まったように見える。なんというか、焦っているような感じだ。
「あの、イブキたちってどこに行ったのかわかりますか!?」
「え、イブキたち？」
突然出てきたその名前に少し驚く。ちょうど彼の話をしていたところだったし。この子はイブキとどういう関係なんだろう。恋人……とか？　モテそうだもんな、イブキって。頼り甲斐がありそうだし、顔だって悪くない。ちょっと怖い顔だけどさ。
いや、今はそんなことを考えている場合じゃないって。この子がなんの用事なのかを聞かないと。……やっぱりおれ、少し酔ってるのかもな。

「えっと……イブキたちが、どうかしたの？」
「あの、まだオルタナに帰ってきてないみたいで、ユメさんに聞いてみたら、ハルヒロさんなら知ってるかもって」
ユメのほうをちらりと見ると、ユメは相変わらずのぽややんとした雰囲気のまま眉をひそめている。
「あんなぁハルくん。イブキくんも、マイちゃんだってまだ戻ってきてないみたいでなあ。だから、ハルくんは何か聞いてないかなあって」
そう言うユメはやはり不安そうだ。イブキのパーティーの魔法使いであるマイは、ユメやシホルと同じ部屋に泊まっている。ユメがやや強引に誘った結果だ。でも、ユメの言い分もわかった。このグリムガルで、たった一人で朝を迎えるなんてこと、女の子には厳しいことかもしれない。
ユメが言うにはこのショートカットの女の子はひとつ後輩の義勇兵みたいだ。イブキにお酒のお金を立て替えてもらったらしくて、それのお礼がしたかったらしい。でも、宿舎で待っていても帰ってこないから、顔見知りだったユメに尋ねてみたとか。
男のほうとは沐浴部屋で会って挨拶されたりはしてけど、女の子のほうは初めて見る。確か二人いるという話だったから、彼女はそのうちの一人なのだろう。
それにしても、イブキたちが帰ってきていないって、どういうことなんだ？　ダム

ローに行き始めたってことは聞いているし、今日もダムローへ行ったんだと思う。でも、ダムローって一時間弱あれば辿り着く距離にあるし、向こうで野営なんて危険なこともしないはずだ。

「いや、宿舎にいないなら居場所はわからないけど……。イブキたちはダムローに行くって言ってたから、もう帰ってきててもおかしくない時間だよな」

サイリン鉱山での狩りを終えたおれたちが帰ってきてから、すでに相当な時間が経過している。それなのに帰ってこないってことは、何かがあったと考えるべきだろう。

誰かが怪我をして移動ができないとか、もしくは、全滅――。

「……っ」

最悪の事態を考えても、マナトの時ほどの衝撃はない。いや、マナトの時もことも正直言って現実味はないんだけどさ。万が一、今の仲間たちの誰かが死んでしまったら、こうも冷静ではいられないと思うけど。

事実かどうかわからないってこともあるけど、やっぱり、別のパーティーのことだからなのかもしれない。薄情なのかもしれないけど、マナトの死というものを経験したことで、こうした別れだってあるんだということを刻み込まれた。

でも、仮にそうだったとしたら、この子になんて言えばいいんだろう。

「あ……」

そして、彼女もその可能性に思い至ったんだろう。複雑そうにして、うつむいてしまう。

「あ、えっと……向こうでなにかあって、帰ってこれないだけかもしれないしさ。今はとにかく、待つことしかできないと思う」

我ながら、曖昧な言い分だ。はっきりと可能性を提示してあげることもできたけど、やっぱり、それは勇気がなかった。

「一応、所長に話を聞いてみるのもいいかもしれない。義勇兵の情報なら、所長のところにも集まってくるから」

俺の答えに補足するようにメリイがそう言う。彼女も仲間の死というのを経験したこともあるから、動揺はないみたいだ。というよりも、イブキたちとは顔見知りってほどに親しかったわけでもないし、当たり前か。

「それなら、おれも一緒に行くよ。イブキたちのこと、気になるし」

「ユメも行く。マイちゃんのこと心配で、あんまり寝られそうにないしなあ」

メリイの言葉の先も気になったけど、それはまた今度で良い。まだまだ時間があるんだし。夜ももうだいぶ遅いから、明日に備えてメリイとは解散することにした。メリイはやはり何かを言いたそうにしていたけど、今はとりあえずイブキたちの情報を聞きに行かないと。

「それじゃあ、また明日」
「ええ、また明日」
メリイと挨拶を交わして、おれたちはシェリーの酒場を出る。今日も、月は赤かった。

「見習い義勇兵の情報？」
ブリちゃんのねっとりとした視線を感じて、身体中に鳥肌がたった。舐めるように男を見るのは、正直やめてほしい。
「そう……です。あの、イブキっていう戦士のパーティーのこと……なんすけど」
「義勇兵ならまだしも、見習い義勇兵のことねえ」
ブリちゃんは真っ黒な唇をぺろっと舐めて、ケツアゴに手を当てる。一応ここに来た経緯は簡単に話した。イブキたちがダムローへ行ってから帰ってきていないということも。
ブリちゃんの視線がショートカットの子――リンという名前らしい――にちらりと向いたのは気のせいではないだろう。
「ま、特になにも情報なんてないわね。ダムローがなにやら怪しいって話しは聞くけ

ど、それくらいかしら」

「え、ほ、本当ですか……？」

リンが驚いたような、そして気落ちしたように呟く。おれとしては、まあ想像通りだった。ユメのそのあたりはわかっているのか、なにも言わない。

「私が嘘を付く意味なんてないじゃない」

ブリちゃんはそう言って呆れたようにため息をついた。多分今のは、意味さえあれば嘘をつくということだろう。

「――そういえば彼って、余り者だった子たちのためにもう一つのチームの子たちの誘いを断ったみたいね」

不意に、ブリちゃんがおれを見て口を開いた。

「もう一つの子たちはこの前義勇兵になれたみたいだけど、彼はまだ難しそうね。仲間があれじゃあ、しょうがないのかもしれないけれど」

マナトと似ている、と言いたいのだろうか。ブリちゃんはマナトのことをある程度は評価していたように思う。そして、この口ぶりからはイブキのことも。でも、イブキの仲間があれって、どういうことなんだ？　イブキのパーティーについて、何か知っているような言い方だ。

「まあ、また明日にでも来てみたら？　帰ってくるにしても来ないにしても、今日中に

はなにもわからないわよ」

ブリちゃんの言葉は正しい。イブキたちのことは気にはなるが、おれたちにはどうすることもできないだろう。仕方なく、おれたちはこのまま帰ることにした。リンはやはり不安みたいだ。表情が優れないようだ。でも、おれには気の効いたことは言えなかった。

「あと、一応忠告はしておくわ」

帰り際、ブリちゃんが口を開く。思わず振り返るが、ブリちゃんの目は全てを見透かすような、冷たい目をしていた。

「万が一にでも、助けに行こうなんて思わないことね。自惚れの代償は、高くつくわよ」

助けに行く。その考えが出てこなかったと言ったら嘘になる。でも、すぐにそれは自分の中で否定した。おれたちはまだまだ新米のへっぽこ義勇兵だ。そんなの考えること自体がおこがましいし、行ったところで二の舞になるのがオチだ。おれも、そしてたぶんリンも、誰かを助けたいと思うには圧倒的に実力が足りなかった。

ブリちゃんの言葉になにも言えず、おれたちは微妙な雰囲気のまま事務所を後にした。結局、今はこれ以上はどうすることもできないので、明日また聞きに行こうということでリンとは別れた。

夜はちゃんと眠れるのだろうか、明日の四層突入はどうするべきか。そんなことをいろいろと考えてしまったけど、答えなんて最初から出ていた。ランタにも言ったことだし、明日は四層に突入する。

今のおれたちなら大丈夫だと、そう思えた。イブキたちのことは気にはなるけど、おれにとって一番なのは、仲間たちのことだ。だから、明日になったらイブキたちのことは考えないようにする。無事にオルタナに戻れたら、その時にまた考えればいい。

おれはそんなことを考えつつ、それでもどこか、なんとなくだけど、イブキなら大丈夫な気がした。

＊

仲間が初めて大怪我をした日、私は荒れた。今までろくに飲んだこともないのに、たくさんのお酒を煽った。もしチョコがいなかったら、変な人に連れていかれていたかもしれない。幸いというかなんというか、知らないうちにイブキに絡んでいて、おかげでそういった心配はなくなったけど。

あの時のことを思い出そうとしても、お酒のせいで記憶が曖昧になっている。それでチョコにその時のことを聞いて、少し後悔した。酔っ払ってイブキに絡んで、延々と愚痴を聞かせて、そのうえお代を立て代えてもらって、挙句おぶられて帰ったらしい。本当に私はなにをしていたのだろうか。

そんな感じであの時のことを覚えていないにもかかわらず、あの生意気な後輩を信頼している自分がいる。本当に、訳がわからない。

まあ、そういうこともあって、私はイブキにお礼と謝罪をしようと思っていたのだ。その矢先に、彼らが行方不明。

昨夜のことを思い出して、私は思わずため息をついてしまう。森での狩りを終えて宿舎で待っていた私は、たまたま出会ったユメさんに聞いてみた。イブキたちを見てないかってことを。

結局ユメさんは知らなくて、その後ハルヒロさんに聞いても居場所はわからなかった。おそらくまだダムローにいるのではないか。そして、もしかしたらそこで――。

そういったことだけは、知ることができたけど。

それは決して、ありえない話じゃない。イブキたちよりも経験のある私たちでさえ、罠に嵌められて瓦解した。怪我人だけで済んだのは、本当に運が良かったのだと思う。それよりももっと経験の少ないイブキたちなら、万が一ということは考えられる。

現状神官のいない４人パーティーで狩りを続けている私たちは、森のゴブリンでさえ倒すのがやっとだったのだ。

戦士で壁役（タンク）でリーダーのマツ。攻撃役（アタッカー）で聖騎士のクザク。盗賊のチョコは遊撃で、魔法使いの私はみんなの支援。ここに神官のミツトシが加わったのが本来の形だけど、今はいない。

回復役がいないという不安要素はあったにしても、マツとクザクの二人で一体を倒すのが限界だった。今日の帰り道なんかは、戦線を安定させるためにもう一人戦士を誘うべきかどうか、真剣に話し合ったほどだ。

それなのに、イブキのパーティーはイブキがリーダーで、壁役（タンク）も攻撃役（アタッカー）もこなしているらしい。はっきり言って、無茶苦茶だ。イブキの他のパーティーメンバーはよく知らないけれど、それでも彼以上に強い人はいないんだと思う。これもチョコから聞いただけだけど、こんなことで嘘をつく意味もない。本当のことなんだろう。

正直、心配だった。顔見知りが死んだりとかは、まだ経験したことがない。経験したくもないけど、いつかはそういう時もやってくるんだと思う。でも、それでも、今じゃなければいいとは思った。

森でのゴブリン狩り（狩りと言えるほど倒せたわけじゃないけれど）を終えて、私は沐浴部屋で汗を流し、ハルヒロさんたちを待っていた。

今日も一緒に所長のところへ行こうという話になっていたのだ。でも、もう日が落ちているのにハルヒロさんたちは帰ってこなかった。まさか彼らも、と思ったが、なんとなく違う気がした。案の定、ユメさんとシホルさんは一旦宿舎に帰ってきていたみたいだった。

聞いた話だとなんでもサイリン鉱山で大物を倒したらしく、酒場で盛り上がっているらしい。薄情な、と思わなでもない。でも、これが普通なのだろう。ハルヒロさんたちも自分たちのことで精一杯なのだ。いちいち後輩のことを気にする余裕はないのかもしれない。

だから私は、一人で事務所へ行くことにした。チョコも行きたがっていたけど、慣れない四人での狩りに疲れているようだったので、半ば無理やりに寝かせてきた。

イブキたちが昼間のうちに帰ってきていないのは、はっきりとしている。

宿舎の人に聞いてみたけど、まだイブキのパーティーは戻ってきていないと言われたのだ。宿舎の宿泊料も払われていないので、すでにイブキたちのいた部屋は空き部屋扱い。中にはほとんど物がなかったみたいだけど、数点残っていた衣類は宿舎の人が預かっているとのこと。よくあることなのか、宿舎の人も淡々としてた。

そんなことを考えつつ歩いていると、すぐに事務所に着いてしまった。正直言うと、所長は少し苦手だった。生理的にもそうだし、あの鋭利な雰囲気が苦手なのだ。だか

ら、イマイチ入る勇気が出ない。

そうやって、どれくらい事務所の前で佇んでいたのだろうか。

不意に、事務所の扉が開いた。

「――あら、昨日の子じゃない」

そして中から、所長が出てくる。いつも通りの濃い目のメイクが、ちょっと目に辛い。もちろん、表情には出さないけれど。

「あの、イブキたちって――」

「――ああ、彼ら、さっき帰ってきたみたいよ」

所長は思い出したようにそう言う。本当に、なんでもないことみたいに。私はイブキが帰ってきたということで、少しだけ嬉しくなった。でも、続く所長の言葉にそんな思いもかき消された。

「たぶん彼、今は神殿のほうにいるんじゃないかしら」

▪ pisode. 12

＊

どうやってオルタナまで帰ったのかは、正直、よく覚えていない。気が付いた時にはもう、オルタナへと戻ってきていたのだ。

ダムローの廃屋で目を覚ましてから、3人の死体をなんとかして担いで森へ入ったのは覚えている。たぶん、義勇兵全てが敵に思えたからかもしれない。今襲われれば、根こそぎ奪われ、殺されるかもしれない。そんな恐怖があったから、異常なほど警戒心のまま、異様に時間をかけて3人をオルタナまで運んだのだと思う。

そうしてオルタナの門に付いて、少し騒ぎになったりもした。まあ確かに、血まみれの男が3人の死体を担いで街に入ってきたんだ。そりゃあ誰だって驚く。

道行く人々がこっちを遠巻きに見るなか、俺は黙々と歩いた。3人を焼いて、墓に埋めるために。すでに一晩は経っているし、時間がないかもしれなかったからだ。そうしてオルタナ北区のルミアリス神殿にたどり着く頃には、周囲はすでに日が暮れていた。

３人を担いだまま神殿内へと進むと、神官服を着た男たちに制止された。まあ俺の姿を見りゃそうなるっていうのはわかっていたけど、彼らはタケシの死体を見て急に顔色を変えた。そして、俺に何も言わずに急いで誰かを呼びに行ってしまった。

一体どうしたんだろうか？

正直、立っているだけでもしんどかった。崩れ落ちないように両足を踏ん張ってはいるが、限界も近い気がする。早く彼らを弔って、倒れ込みたかった。

手続きやらを待っている間、他の神官が俺に魔法を使ってくれ身体中の傷はふさがった。だが、失った血や体力までは回復しない。こればかりは時間が経つのを待つしかない。そのため、倒れこみたいほどの疲労には変化がなかった。

三人を弔うお金に治療費までと出費が不安だったが、いつも使っているポーチに三人の財布やゴブリンから取ったものが大量に入っていたので、なんとかなりそうだった。おそらく、ダムローから脱出する前に回収しておいたのだろう。意識は曖昧でも、そのあたりはしっかりしていたようだ。

治療が終わって少ししたら、なにやら厳つい神官が出てきた。彼は三人の死体を見て痛ましそうに表情を歪ませている。

「なんたるっとか……！」

いや、彼の視線はタケシ以外の二人を向いている気がした。

「落伍者がおらねば、助かったかもしれぬものを……！　このような若い命を失うなど何事ぞ！」

「落伍者……？」

それは一体、どういうことなんだ？　俺の疑問を感じたのか、彼はこちらを一瞥して口を開いた。

「なんだと？　長らくともに過ごしたはずなのに、なにも知らないのか？」

彼は驚いたような、それでいて呆れたような、そして怒りを堪えるような表情で俺を睨んだ。怒りたいのは俺のほうだ。そう返したくなったが、なにも言えなかった。タケシだけじゃない。俺は、マイのことも、シュンのこともなにも知らなかった。

「――このタケシは、正式には神官ではない！　規定修練過程で逃げ出した、愚か者ぞ！」

彼の言葉を、信じたくなかった。だが、なぜだかそれが本当のことだというのが理解できてしまった。

「この少女は見たところ、頭部に溜まった血が死の原因であろう。ある程度の神官ならまだしも、落伍者には治すことなどできまい！」

彼はマイの頭部に手を当て、悲しそうにそう言った。その言葉からは命を散らした若者に対する、深い悲しみが感じられた。きっと、この人も悔しいのかもしれない。

でも、俺は、それどころじゃなかった。
やけに治りの遅い魔法、初めての狩りの際の違和感、マイの治療をせずに逃げ出したこと。それ以外にもいくつもあった不審な点が、簡単につながってしまった。
そして同時に、俺がまったくタケシのことを理解していなかった――否、理解しようとすらしていなかったことを思い知らされた。

そこからは、ただ呆然としているうちに進んでいった。
各種手続きから始まり、焼き場の料金や墓の料金などの説明。すでに焼き場は閉まっているとのことで、明日まで神殿で三人を預かってもらうことにもなった。神殿の神官たちは人間的にしっかりとした人が多いらしく、俺が平静ではないことを察していたようで、最低限で帰してくれたみたいだ。代理でできる手続きはやっておくとも言ってくれた。
そうこうあって、神殿の外に出るころには完全に日が落ちていた。そのくせ空には雲ひとつなくて、赤い月がこれでもかと存在を主張していた。飲屋街のほうからは義勇兵たちの喧騒が聞こえ、１日の終わりを感じる。
正直、これからどうすればいいのかわからなかった。明日はとりあえず、三人を埋葬するという目的がある。だが、それ以降はどうする？　正式な義勇兵ですらない見習い

の俺は、どこのパーティーも欲しがらないだろう。ましてや、自分以外のパーティーメンバーを全員死なせた戦士だ。信用されることは、まず、ありえない。

「――イブキ！　無事だったの!?」

神殿の前に佇み途方に暮れていた俺に、聞き覚えのある声がかかる。

「リン、か……」

リン。俺たちのひとつ先輩の義勇兵だ。ショートカットを乱しながらこちらへと走ってくる。言葉と様子から察するに、俺たちが帰ってこなかったことを知っているみたいだ。そして、それで心配をかけていたであろうこともわかる。

だが、彼女とはそこまで親しかったわけじゃない。先日飲み屋へ連れてかれたことくらいしか付き合いはないのだ。だから、ここまで心配してくれる理由はなからなかった。

「昨日帰ってこなかったから、てっきり……」

俺の前までやってきたリンは血まみれの革鎧に驚くが、傷が治っているのを見て安心したようにため息をついている。すでに怪我を治癒してもらったことがわかったのだろう。

彼女は先日の酒代を返そうと思って、宿舎で俺を待っていたみたいだ。それで、帰ってこないことを知って心配していたらしい。なんでも、知り合いが死ぬという経験はま

だなくて不安だったとか。
納得はしたが、そんなことをわざわざ説明してくれる彼女の無邪気な様子が辛かった。
「俺は……」
「――そうそう！　ハルヒロさんたちも心配してたから、ちゃんと声かけておきなさいよ！　今日は宴会で遅くなるらしいけどさ」
――ハルヒロ。俺はハルヒロたちに、どんな顔をして会えばいいんだろうか。シュンやタケシも、一応ハルヒロたちとは顔見知りだ。マイなんて、ユメたちと同じ部屋に泊まっていた。彼らが全員死んで、俺だけがおめおめと生き残った。
本当に、どうしようもない。
「そうだ！　なんならこれからハルヒロさんたちの宴会に――」
「悪い、一人にしてくれ……」
暗い様子の俺を元気付けようとしてくれていたのだろう。でも、そんなリンには悪いが、今は一人になりたかった。
俺はリンの言葉を聞かずに、歩き始める。
「え、ちょ、ちょっと！　なによ、その態度！」
だが、気遣いを無下にされたリンは声を荒らげる。当然だろう。でも、今は放ってお

いて欲しかった。自分自身への嫌悪感が強くて、イライラして、どうにもむしゃくしゃが収まらない。誰かに怒鳴り散らしたくて仕方がなかった。

リンは怒りつつ、でも心配したような表情で俺を見ている。歩く俺の横について、口調だけは不機嫌そうに。だが、足早に歩く俺に並ぶのは難しいようで、リンは半ば無理やり俺を止めようと手を伸ばしてくる。

「ねえってば――」

「――悪い……」

そして俺は、それを手で払った。リンが息を呑み立ち止まったのがわかったが、構わず歩き続けた。どうやら、もうついて来る気はないみたいで、リンの気配はそのまま遠ざかっていく。そのことにほっとしつつも、俺はなにも考えないようにして道を急いだ。

すれ違う人々は血にまみれた鎧姿の俺を一瞥するが、やはり慣れているのだろう。すぐに視線を外して、笑い声を上げながら歩いていく。そんな彼らの姿も、俺を無性に苛立たせた。

義勇兵宿舎に辿り着いた。たった二日留守にしただけなのに、嫌に久しぶりに感じる。部屋の料金は五日ごとに払っていたが、昨日がちょうど更新日だった。ダムローで稼いで、次はもっと長く取ろうとも話していたのだ。そんな話を思い出しつつ、すでに

空き部屋扱いになっていた俺たちの部屋を再度借りた。今までは三人で支払っていた分出費が大きく、明日にでもゴブリンから取ったものを売りに行かないと残金が心もとない。

その際、部屋に置いてあって回収してくれていた衣類を受け取る。宿舎の職員は特になにも思っていないようだ。三人いたはずなのに、一人しか帰って来なかった。そんなことは何度も見ているのかもしれない。今はその無感動さが楽に思えた。

部屋に入って、いつもの干し草のベッドに横になる。

明日は三人を弔って、三人の死を一応事務所に報告、その後は戦利品の売却や三人と友好のありそうな人に話しに行くべきだろう。三人の財布にはそれっぽいものもあったしな。

正直な話、自分自身が思ったよりも冷静なことに驚いていた。いや、たぶん今は麻痺しているだけかもしれない。現実味がなくて、三人の死を未だに直視できていない気がした。それでも、こうして思考ができることには感謝するべきなのかもしれない。思考を止めてしまうとなにもできなくなる。

思考の渦に飛び込んでいると、だんだんと意識が沈んでいくのがわかった。眠れないと思っていたが、そうでもなかったみたいだ。俺はそのまま、夢の世界に落ちていった。

翌日。日が出てすぐに、俺は神殿へと向かった。

本当は朝のうちにハルヒロたちと話しておきたかったのだが、まだ起きていなかったようなので諦めた。宿舎の職員に聞いたところ、昨夜はだいぶ飲んだみたいで朝方に帰ってきたそうだ。仕方がないだろう。

そして、神殿で三人の死体を受け取って焼き場へと向かい、三人を焼く。その後に墓場へと向かった。

オルタナの外にある墓場。丘の上というよりは中腹あたりにあるあいた場所に、白い布で包んだ骨を埋める。抱えて持てるくらいの大きさの石をその上に置いて、それぞれの名前を刻む。そこに義勇兵の証である三日月の紋章を彫って、赤い染料で着色。見習いでも義勇兵扱いになるようだった。

これらの墓を、隣り合わせで三つ。もっとも、区画ごとに分けられたりはしていないため適当な位置になっている。周辺には同じような赤い三日月の刻まれた墓が大量にある。もっともすでに色が落ちているものも多かった。

ここにいると、丘のてっぺんにそびえ立つ塔が目に入る。俺たちの目覚めた、そして数多の先人たちが目覚めたあの塔。俺たちがあそこから出てきて、まだ一月も経ってい

*

なかった。そんな短時間で、あの三人は死んでしまった。……いや、俺が殺したのかもしれないな。

とりあえず、これで三人の埋葬は終わった。本当に、あっけない。焼き場で５０カパー、墓石で５０カパー。一人あたりたった1シルバーで終わる作業。人が死ぬというのはこんなに簡単なことなのかと、拍子抜けしてしまった。

オルタナのほうから鐘の音が聞こえる。合計７回。午前７時を告げる鐘だ。

これからのことを考えながら、俺はオルタナへと戻るために歩き出した。

シュンの遺品には特になにもなかったが、マイとタケシの遺品には誰かしらの連絡先が書かれたメモがあった。連絡先とはいっても、待ち合わせのメモみたいなものだ。人のプライベートを盗み見るようで申し訳なかったが、その相手には伝えたほうがいいだろう。

マイのは「マライカ　午前８時～　３日おき」とだけ書かれたメモ。マライカのことは知っていた。花園通り近くにある店だ。マライカさんが切り盛りしている料理屋で、女性客が多い。というよりも、客のほとんどが女性客らしい。ユメが話していたのを覚えていた。そのマライカで、誰かと待ち合わせていたのだろう。

そして、タケシは「天空横丁　マダムス　アベリー」というカードのようなもの。天空横丁はいわゆる風俗街のようなものだ。キャバレーから性サービスまで、そういった

店々が多く存在する通り。存在は知っていたが行ったことがなかった。というよりも、そんな余裕はなかった。相場こそわからないが、俺は戦士ということもあり、他の三人よりも装備にお金がかかっていた。それは、タケシも同じだったはずだ。

気にはなったが、正直タケシについてはもうどうでもよかった。マイやシュンが死んだのをタケシのせいだけにするつもりはない。そもそも俺がリーダーとして中途半端だったのが原因だ。だが、それがわかっていてもタケシを許せる気はしなかった。

タケシのところは今は考えなくていいだろう。客と店員の関係だろうし、別段知らせる必要は感じなかった。

とりあえず、マイの待ち合わせの人物に会いに行くべきだな。三日おきということだから、何度か通えば会えるはずだ。今のまま一人で狩りを続けるのは難しいだろうし、とにかく今は落ち着いて考える時間が欲しかった。

先行きに不安を感じつつも、俺はやれることをやっていくしかなかった。

▪pisode.13

＊

三人を弔い、オルタナへと戻って来た。市場に乱立する屋台の一つで朝食を簡単に済ませて、とりあえずゴブリンから剥いだものを売りに行った。選ぶのはいつもと同じところ。初回に売りに来たあのじいさんがいる店だ。毎回狩りの帰りにシュンと共に売りに来ていた。

「……」

俺が近付いてきたのを見て、爺さんは無言で顎をしゃくる。買い取るものを出せ、ということだろう。初回以降は毎回こうだ。俺も慣れているので、特に何も言わずに買い取って欲しいものを出す。

牙が2個と綺麗な石が5個、その他よくわからないものも数個ある。

「――そうだな。全部で3シルバーと11カパーだ」

意外と高く売れて驚いた。これでゴブリンたちの持っていた銀貨と合わせて9シル

バーと２９カパー。これ以外にも一応三人の財布があるが、まだ中身には手をつけていない。もっとも、今のところは手をつける予定もないが。

まあとにかく、今後どうなるか決まっていない状態だ。金があって困ることはない。

「……お前さん、いつものチビはどうした？」

俺が礼を言って帰ろうとすると、爺さんが小さく尋ねてきた。

「……っ」

死んだ、などとは言えなかった。だが、爺さんは俺の顔色から何かを察したようで、ため息をついて呟いた。

「――ふん。自棄にはなるんじゃあねえぞ」

どこか重みのある言葉だった。だが、俺はそんなことにはなりそうもなかった。薄情、なのだろう。仲間が死んだくせに、こうも冷静でいられるのだから。

俺は爺さんに一礼して、店を後にした。

花街通りの一角。やけに女性の多いその場所にマライカという料理屋はあった。看板が出ているわけではなく、初見の人間には非常に見つけにくかった。外からチラリと覗いてみたが、客や従業員はほとんどが――いや、全員が女性だ。「男性客お断り」と書

かれているわけではないが、男である俺には入るのに相当な勇気が必要だった。

まだ早めの時間なのだが、店にはそこそこ客が来ている。この中に、メモの人物がいるのだろうか。とにかく、このままうろうろしていても仕方がない。不審者に思われそうだしな。

俺は覚悟を決めて、店へと入る。店内は複数の大テーブルがあり、ある程度の席は空いていた。座っているのは、全員が女性だ。

入った途端に向く敵意の視線。

……ここって別に男子禁制ではないよな？　だがまあ、女性の花園に男がずかずかと乗り込んでくるのは気分が良いものじゃないだろう。早めに退散したほうがいいな。

少し驚いた様子のウェイトレスを捕まえ、マイについて聞いてみる。

「最近、見習い義勇兵がよく来なかったか？　マイっていう名前なんだが……」

「……え、えっと、義勇兵のことでしたら、たぶん、荒野天使隊（ワイルドエンジェルス）の方なら知ってるかと……」

荒野天使隊（ワイルドエンジェルス）は、有名な義勇兵のクランだ。女性義勇兵のみで構成されていて、リーダーのカジコは相当な使い手らしい。彼女たちもこの店を利用しているらしく、顔も広いみたいだった。

「なら、ここに荒野天使隊（ワイルドエンジェルス）の人間はいるか？　いたら教えて欲しい」

「――え、でも……」

「待ちな。くそったれな男なんかが、荒野天使隊（ワイルドエンジェルス）になんか用でもあるのかい？」

ウェイトレスと話していた俺に、一際強い敵意がこもった声がかかる。そちらを向くと、体格の良い女性が俺を睨んでいた。彼女は白い羽ストールを首に巻き、髪を留めているバンダナにも白い羽根飾りをつけている。荒野天使隊（ワイルドエンジェルス）に所属する者の特徴だ。彼女の向こうにあるテーブルにも、同じような格好をした女性義勇兵が数人いる。

彼女の視線からは、幾度も死線を超えたであろう者の凄みが感じられた。正直、今の俺では戦ったとしても倒せる気がしない。

「……ああ、人を探しててな。見習い義勇兵のマイって言うんだが」

「へえ、あの子の知り合いか。それで、なんの用があったんだ？」

どうやら彼女はマイのことを知っているらしい。もしかしたら、マイの待ち合わせ相手のことも知っているかもしれない。

「彼女がここで、誰かと待ち合わせていたみたいなんだ。それで、その――」

「……なるほどね」

俺の表情から察してくれたのか、彼女は小さくため息をついた。そして、先ほどよりも強く俺を睨んできた。恨みのこもった、殺意すらも感じられる視線で。

「ちょっと付いてきな」

彼女はそう言うと、店を出て行ってしまう。俺はどうすることもできないので、とりあえず彼女に付いて店を出た。後ろを振り向くことなく足早に進む彼女からは、俺に対する明確な嫌悪感が感じられた。

少し歩いて、人通りのない裏路地へと入った。そこで彼女は足を止め、こちらを振り返る。こんなところに男を連れ込むのは危険なような気もするが、襲われても返り討ちにできる自信があるんだろう。

「こんなところまで連れてきて、どういうつもりだ？」

「自惚れるんじゃないわよ。あたしだって男となんか話したくないけど、あのままじゃ店の子たちに迷惑だろう？」

言葉こそ親しげに感じるが、彼女からは敵意や軽蔑を感じる。俺――というよりは、男という存在が嫌いなのだろうか。

「まず、一応自己紹介はしてあげる。あたしは荒野天使隊（ワイルドエンジェルス）のキクノ。たぶん、マイと待ち合わせしていたのはあたしね。先に言っておくけど、あたしは男が大嫌いだ。でも、マイのことで何かあるんなら聞いてあげるわ」

横暴な言い方だが、マイのことは気にかけてくれていたみたいだ。その声音は純粋にマイを気遣っているように聞こえる。きっと、クランの中でも上に立つ者なんだろう。

腕を組んでこちらを睨む彼女からは、ある種の貫禄のようなものも伺えた。

だからこそ、マイの死を伝えるのが辛かった。いや、怖かったのかもしれない。だが、伝えるしかないのだ。少し時間をかけながら、俺はキクノにあの時のことを伝えた。

「――アンタ、何も知らないんだね」

「――え……？」

全てを聞き終えたキクノは、俺に憐れみのこもった目を向ける。敵意や軽蔑ですらなく、憐れみ。

「マイはあたしに、クランに入れて欲しいって言ってきたんだよ。同じパーティーのシュンっていうやつとは相談してるって言ってたけどね」

それは、本当なのか……？　マイのこともそうだが、シュンも知っていて俺に何も言わなかったと、そういうことなのか……？

「元々見習い義勇兵は死ぬ確率が高い。正式な義勇兵になったところで、女の身じゃ危なくって仕方ないしね。義勇兵宿舎なんて、いつ男に襲われるか気が気じゃないわ」

だから、マイは正式な義勇兵になったら荒野天使隊（ワイルドエンジェルス）に入りたいとキクノに相談していたのだと。

「あたしたちのクランは全員が女だ。アンタみたいな、無能でくそったれな男なんていない。女だけで結束して、楽しく生きる。それがクランの方針さ」

「……っ」

それは当てつけのようにも聞こえ、心臓を氷の刃で貫かれたような、冷たい痛みが胸に走る。

「だけど、マイはもうそれもできない。アンタら男が無能なせいで、死んじまったんだからね」

キクノはそこで言葉を区切り、一瞬で俺の胸ぐらを掴んで壁に叩きつけた。

「がは……っ！」

その衝撃は想像以上で、叩きつけられた瞬間一気に息が詰まり、目の前がチカチカと点灯した。

「こんな仲間のことすら知ろうとしないやつがリーダーだなんて、仲間が可哀想だわ。しかも、その仲間を全滅させておめおめと逃げ帰ってくる。――戦士としても、最悪ね」

彼女の言葉に、なぜだか自然と身体が震える。

「アンタはマイの未来、そしてついでに他の２人の未来も奪ったんだ。合計で３人分のね。確かに仕方がないって言い訳はできるかもしれない。でも、防げたはずのことを見過ごしていたのはアンタだ。それなのに、よく俺は悪くないって顔ができるね」

ガツンと、頭を殴られたような気がした。

確かに俺は、自身の無力さを呪ったが、仕方がなかったと自己弁護もした。昨夜寝る

ときも、後悔は抱えつつもどうしようもなかったと割り切った。俺のせいではなく、セイヤたちのせいだと。俺は悪くないんだ、と。それで自分を落ち着かせた。無意識のうちに、そう考えていたのだ。そして、何食わぬ顔で冷静でいる自分に自己嫌悪を抱き、三人への免罪符とした。

だが、俺はそうすることで逃げていたのだ、と。彼女はそう、言い切った。

人が簡単に死ぬ世界。言葉として、情報としては理解していた。そして、実際に三人が死んで、理解させられた。否、理解したフリをした。そういうことなのか……？

思考が堂々巡りを繰り返し、ズキズキと頭が痛む。全身からは冷たい汗が流れ、いつの間にか俺は壁に背を預けたまま地面に座り込んでいた。

ふと前を向くと、すでにキクノの姿はなかった。いつの間に消えたのかと思ったが、12時を告げる鐘が鳴ったことで我に帰る。いったいどれくらい、俺はここに座り込んでいたのだろうか。日が高く昇っていて、俺のいる路地は影になっている。

「とりあえず、宿舎に戻らなきゃな……」

正直、まだ頭を整理できていない。

マイが移籍を考えていたことも初めて知ったし、シュンがその相談を受けていたことも知らなかった。タケシだけじゃなく、2人のことも何も知らなかったのだと改めて思い知らされた。頭では理解していたのだ。3人のことを何も知らなかったと。だがこ

うして事実を突き付けられると、それがとても罪深いことだったのだと考えてしまう。
ふらふらとした足取りで、俺は花街通りへと出る。行き交う人々は活気にあふれていて、自分がひどく場違いに思えた。
「……およ？　イブキくん？」
「か、顔色が悪いけど、大丈夫？」
そして、こういう時ほど会いたくない人物と出会ってしまう。ユメとシホル。マイを部屋に泊めてくれていた、俺たちの先輩だ。
「……ああ、大丈夫だ」
俺は、そう答えるので一杯一杯だった。
「あ、それよりなあ、またマイちゃんが帰って来かったんやんかあ。ていうか、イブキくんも久しぶりやんなあ。イブキくんはマイちゃんがどこにいるか知らんかなあ？」
「あの、私たち……今、マイちゃんのこと探してて……」
彼女たちは、こういう、本当に善意の塊みたいな人たちなのだ。そんな彼女たちにも、ちゃんと伝えなければならない。それが礼儀だし、伝えないといつまでも探しまわってしまいそうだ。
「マイは――」
だが、言葉が出ない。マイが死んだ理由を聞いても、２人は俺のことは貶さないだろ

う。むしろ、俺も被害者だと同情してくれるかもしれない。それが、辛かった。
「――マイは、死んだ」
「え……？」
「シュンも、タケシも……。俺以外は、みんな死んだ」
「それって、え……？」
「マイちゃんたち、死んじゃったん……？」
ユメは、まるで自分の仲間が殺されたかのような、沈痛な面持ちをしている。シホルもシホルで、そんなユメを見て悲しそうな顔をしていた。二人はマイの面倒を見てくれていて、下手したら俺よりもマイと近くで接していた。だからこそ、悲しみも大きいのかもしれない。
「――……っ、いろいろと、ありがとうございました」
そんな二人を見ていられずに、俺は逃げ出した。一言、お礼だけを言って。
去り際の彼女たちの顔は、怖くて見ることができなかった。

そうしてしばらく走ると、宿舎が見えてきた。ちょうど宿舎から出てきた、3人の姿も。ハルヒロ、モグゾー、ランタ。ハルヒロのパーティーの男メンバーだ。本当に、巡り合わせっていうのはあるみたいだ。3人も俺に気がついたようで、少し驚いた様子で

こちらに向かって歩いてくる。
「イブキ、帰ってきてたんだ」
「僕も、みんなも心配してたんだ。」
「はっ、俺は別にどーだってよかったけどな」
ハルヒロとモグゾーは普通に挨拶してきてくれたが、ランタだけはいつも通りの憎まれ口だ。リンが言う通り、彼らにも心配をかけたみたいだった。
「ていうか、聞いて驚け！　昨日はなあ！　なんとこのランタ様が！　このランタ様の活躍で、俺たちは死の斑（デッドスポット）を倒したんだぜ！　おら、すげえだろ！」
ランタはいつもの調子で、俺を煽るようにそう言う。死の斑（デッドスポット）のことは知っていた。サイリン鉱山を住処としている凶悪なコボルド。やつは幾人もの義勇兵を屠ってきた。俺なんかじゃ、相手にならないだろう。
そんな強大な敵をハルヒロたちは倒したのか。
それに比べて、俺は――っ！
「――なあ、ハルヒロ」
「ん？　どうかした？」
ハルヒロは俺の様子がおかしいことに気が付いたみたいで、気遣ったような声でそう返す。

「実は――」

そして俺は、3人にあの時のことを話した。自嘲するように、自身への嘲りを込めて。たぶん俺は、ハルヒロたちにも責められたかったんだと思う。キクノの時のように、お前が悪かったんだと。そうすれば、いくら俺の心が俺の罪を否定しても、逃れることはできないだろうと。

でも、ハルヒロたちの顔に浮かんだのは、同情だった。仲間を一気に失った、かわいそうな後輩だと。あのランタまでもが、そんな目で俺を見てきた。

それが悔しくて、しんどくて、情けなかった。

俺はそれ以上何も言わず、自身の部屋へと歩き出した。ハルヒロたちも、何も言ってはこなかった。

少し歩き、俺たちが3人で寝泊まりしていた部屋に着くと、不意に寒気がしてきた。昨夜は普通に寝ていたはずなのに、今はこの部屋で寝泊まりするのがどうしようもなく怖く感じる。正直、もう、この部屋で眠れる気がしなかった。ここは、この宿舎は、3人の記憶が強すぎる。

俺は干してあった皮鎧を着込み、置いてあったハルバードを背負った。部屋にある荷物はこれくらいだ。財布などは懐に入っているし、ゴブリン袋も畳んでポケットに入れている。

それらの装備を一通り確認して、俺は宿舎を後にした。
宿舎を出ると、入り口付近にはすでにハルヒロたちの姿はない。そのことにホッとしつつも、俺はあてもなく歩き続けた。とりあえず、宿を探そう。多少割高でもお金にはまだ余裕がある。なんとかなるだろう。
何かから逃げるように、俺はオルタナ中を歩き続けた。

▪ｐｉｓｏｄｅ．１４

＊

俺たちは、よく言えば中堅の義勇兵だ。戦士二人、聖騎士一人、神官一人に魔法使いを一人、最後に盗賊の俺を加えた六人パーティー。全員がすでに２０代の半ばを過ぎた。

普段はサイリン鉱山をメインに活動して、こうしてたまにダムローでゴブリンを狩っては初心に帰っている。稼ぎにはならないが、連携の確認にはなるのだ。こういうところをしっかりしないと、簡単に命を落とすからな。

「ゴブリン3体だ。行けるか？」

俺は斥候として前方にいたゴブリンの数を仲間たちに伝えた。仲間たちは力強く頷く。標的のゴブリンはここから三十メートルほど先にたむろしていて、それぞれ武装していた。だが、俺たち六人なら朝飯前だ。

適度な緊張感を保ちつつ、俺たちは進んだ。まずは戦士二人が突っ込み、聖騎士が遊撃。魔法使いが詠唱し、神官は周囲の警戒。俺は背面打突（バックスタブ）狙いでゴブリンたちの裏へと回る。これが必勝パターンだった。

だが――

「……なんだ、あいつは？」

俺たちが標的にしていたゴブリンは、すでに他の人間と戦っていた。否、蹂躙といっても良いかもしれない。

黒ずんだ皮鎧を着た黒髪の大柄な男。装備からして、たぶん戦士だろう。そいつが手に持ったハルバードを振り回すたびに、ゴブリンの一部が吹き飛んでいく。武器だったり、削がれた肉片だったりが。ゴブリンがなんとかしてハルバードでの殴打を防ごうとしても、いきなり突きに切り替えて突き刺す。避けても転ばされ、トドメを刺される。

ゴブリン相手に一方的な展開になるのはよくあることだ。パーティーで分担して、各個撃破していく。見習いを卒業した義勇兵たちなら簡単なことだし、俺たちだって余裕だ。だが、この戦士の周囲には仲間の気配はなかった。そう、たった一人なのだ。

俺たちが唖然としているうちに、三体のゴブリンは全身から血を流して事切れていた。本当に、一瞬のことだった。

「……あんたら、なんか用か？」

その戦士は俺たちを睨み、静かに問う。こいつはおそらく、俺たちがゴブリンの戦利品を奪おうとしていると勘違いしているみたいだ。

狩場でのブッキングなんてよくあることだ。そして、先に手を出したほうが優先っていうのが暗黙の了解になっている。だから今回の場合、先に見つけたのが俺たちだとしても、先に戦闘を始めていたこいつが優先される。

それに元々、俺たちは奪おうという気はない。正直いうと、俺は返り血に塗れたその戦士の姿を見て少しビビっている。他の仲間たちも同じみたいだ。まるで手負いの獣のような、獰猛な雰囲気。身長も高いが、盛り上がった筋肉がなおさら彼のことを大きく見せていた。身体全体に傷を負っているようで、ゴブリンの返り血と相まって一層の迫力があった。

「い、いや、別に……」

俺は乾いた口で、言葉を紡ぐ。

「……ならいい」

彼はそれだけ言って、ゴブリン袋などを剥いで去っていく。

「あいつ、〝死にたがり〟だ」

「死にたがり？」

仲間の戦士が、ポツリと呟いた。

「ああ。ハルバードを持った黒髪の戦士らしい。なんでも一人でモンスターに突っ込んで、仲間も全員死なせたんだとよ。んで、仲間が死んだ後もああやってモンスターに突っ込んでいくから、〝死にたがり〟」

なんだそれ。まるで狂戦士（バーサーカー）じゃねえか。

「あいつ、見習い義勇兵だったぞ……？」

「は……？」

「さっき、胸元に見習い義勇兵章しかなかった……」

仲間の言葉に、俺はなにも言えなかった。あんなのが、見習いなのか？

「俺たちも、頑張らないとな……」

俺はみんなを元気づけるように、思ってもないことを口に出す。みんなもそれに答えて、動き出す。覇気のない、沈んだ声で。

ああいうのは、別だ。俺たちみたいな落ちこぼれとは違う。今までだって、何度も見てきたんだ。

俺たちは、こうして今日も必死に生きていた。

俺たちなりに、精一杯。

死ぬまでの日を、指折り数えて。

*

俺がハルバードをふるうと、それを防ごうとしたゴブリンは棍棒を吹き飛ばされた。ついでに手首もイカれたらしく、プラプラになった右手首を抑えてうめき声を上げている。

残った二体のゴブリンを牽制しつつ、隙だらけのそいつの頭部をハルバードの柄で横殴りにする。これで残り二体。ぐしゃり、という骨のつぶれた感触を尻目に、牽制を掻い潜りこちらへ躍りかかって来た剣持ちを蹴りつける。ゴブリンの胸の真ん中。人間でいうみぞおちのあたりに踵がめり込んで、剣持ゴブリンは汚い唾液を撒き散らしつつ吹き飛ぶ。

この間に、様子をしていた残りの一体へと肉薄。そいつは手に持った小剣をがむしゃらに振るうが、恐怖心からかその太刀筋は拙く、驚異ですらない。

一旦距離を取り、ハルバードの間合いを生かして一方的に攻撃する。突いて、ひっかけて、殴って。小剣とハルバードで数度打ち合うが、体格の違い、膂力の違いでゴブリ

ンはすぐに追い詰められる。焦りから小剣の握りが甘くなったようで、ハルバードを防ぐと同時に小剣が手から弾かれた。もちろん、その隙を逃すわけがない。一息に首を突き刺し、捻りあげる。ゴブリンは血を吹き出しながら数秒暴れるが、次第に力が抜けていった。

さて、これで残りは一体。そいつは右手で小剣を構えてはいるが、未だに左手では胸を抑えて嘔吐(えず)いている。俺は鉄製のブーツを装備しているし、相応のダメージといえるだろう。……これは相手にならなそうだな。

そのゴブリンにゆっくりと近付く。それを見てゴブリンは威嚇するように声を上げるが、ただ哀れなだけだった。ハルバードをふるって、そのゴブリンと打ち合うこと数合。あっけなく転ばされたゴブリンにトドメを刺すことで、戦闘は終わった。その間は１０分にも満たなかった。

これで今日狩ったゴブリンは全部で７体。小さな怪我も増えてきたから、そろそろ帰るべきだな。

「あんたら、なんか用か？」

ここで、先ほどからこちらを伺っている集団に声をかけた。２０代半ばくらいの義勇兵たちだ。戦士二人、聖騎士一人、神官一人に魔法使いが一人、リーダーらしい盗賊の六人パーティー。そいつらは臨戦態勢で俺のほうを睨んでいる。

……こいつらは敵なのか？

俺は警戒を解かず、いつでも戦闘を始められるように構える。六人相手だとだいぶ厳しいが、逃げることくらいならできるかもしれない。

「い、いや、別に……」

だが、その義勇兵たちには敵意はないようだった。リーダー格の盗賊が戸惑ったようにそう言ったことで、その仲間たちからも張り詰めた空気が霧散した。

「……ならいい」

敵じゃないのなら、どうでもいい。警戒は解かないが、それ以上はいいだろう。俺は三体の屍からゴブリン袋などを剥ぎ取って、その場を後にする。

ソロでのゴブリン狩りを始めて、一ヶ月が経っていた。

いつも通り、俺は〝白い月〟で酒を飲んでいた。カウンター席の一番左。テーブル席から一番遠いそこが俺の指定席だ。もっとも、最近は毎日そこで飲んでいるから誰も座れないだけなんだけどな。

「――今日はどうなさいますか？」

「……適当に」

毎回、マスターに任せている。どうせ何も飲んでも、味なんてわからないのだ。

このところの俺は、毎日一人でゴブリンを狩っていた。

昼間にダムローへと向かい、少数のゴブリン集団を倒してオルタナへと帰る。市場のおっさんのところで戦利品である見慣れた牙やら石やらを売って、そのまま適当な酒場で適当に酒を飲む。そして、飲み足りなくなったらここで静かに酒を飲む。この繰り返しだ。

あの日から寝つきが悪く、酒を浴びるように飲んでも眠れないことが多々あった。宿舎を出てある程度のランクの宿で部屋を取ったが、そこで寝たことは数える程度しかない。鍵付きということもあって、今では物置のようなものになっている。狩りの時に着ていた血の跡の残った黒ずんだ皮鎧や、愛用のハルバードも部屋に置いてある。

そして今日も今日とて、俺は安い大衆酒場でバカみたいに度数の高い酒を飲んでからここに来ていた。それでも、酔えた気は全くしない。

マスターが用意してくれたグラスを煽って、ただ時間が過ぎるに任せる。

今日は俺以外に客はいないため、店内は静かだった。マスターがグラスを拭く音だけが店内に響く。

不意に、ギィとドアの開く音がした。

その音を聞いて、なんとなくセイヤが来た時のことを思い出した。あれ以来、セイヤたちには会っていない。最近はろくに情報集めすらしていないから、あれからの動向すら知らないのだ。

「――あの……」

そんなことを考えつつ酒を飲んでいると、声をかけられた。振り向くと、扇情的な印象の女性が立っていた。金髪のポニーテールに派手なアイライン、なぜか彼女の着ているローブはミニスカートのようになっていて、その下にはショートパンツを履いているようだった。

ともに塔で目を覚ました同期の義勇兵で、セイヤたちのパーティーに入った派手な女――マイカだ。

「……なんの用だ？」

そして、俺たちのパーティーにゴブリンを押し付けた義勇兵の一人。もっとも、覚えている限り彼女は怪我を負ってショウヘイに背負われていた。おそらく、気を失った状態で。

大方、後にそのことを知って罪悪感にかられたとかそんなところだろう。現に彼女は悲痛な表情を浮かべている。俺に声をかけたまま、泣きそうな目でこちらを見ていた。

「あの、私……私たち……ご、ごめ――」
「――謝るな……！」
思わず、声を荒らげてしまった。なぜだか、彼女の態度が嫌に気に障った。
「で、でも……」
「……あんたが謝っても意味はない。もう、済んだことだ……」
確かに、セイヤたちに押し付けられたことで俺たちは壊滅した。あの混乱さえなければ、少なくともあそこでみんなが死ぬことはなかっただろう。
だが、そんなことがなくても、結果はおそらく変わらなかった。とうにバラバラだった俺たちが、あのパーティーのまま生き残れるとはどうしても思えなかった。
それにだ。仲間が、あの三人が死んだのは、俺のせいだ。中途半端な判断で、肝心なことから目を逸らしていた俺の。
確かにセイヤたちのせいにするのは簡単だし、気が楽になるのかもしれない。そして彼女も、俺に謝ることで楽になりたいんだろう。
でも、俺は自身の責任から目をそらしたくはなかった。
俺も彼女も、何も言わずに時間が過ぎる。とりあえず酒を飲もうとグラスを持つが、すでに中身は空になっていた。
「――もう一杯、いかがですか？」

マスターの声に、俺は頷いた。

黙ったままのマイカを座らせ、隣同士で酒を飲む。

マイカは相変わらず泣きそうな顔をしているが、俺自身は思うところはなかった。セイヤの判断は、正しい。ああいう非情な決断ができるのは、リーダーとして重要な素質だ。俺にはなかった、パーティーをまとめる上で大切なもの。そのことを思うと、どうにも責めることができなかった。

もちろん、セイヤとは今まで通りの関係ではいられないだろう。

マイカはあまり飲みなれていないようで、一杯飲んだだけでだいぶ顔が赤くなっている。それでもグラスを煽る手は止まらずに、ちびちびと酒を飲み続けていた。何かを飲み込むように、ぎゅっと目を閉じて。

そして、しらばくすると、声を殺して泣き始めた。

――マイカは家庭的なお母さん。

セイヤの言葉が、不意に浮かんだ。たぶん彼女も、いろいろと抱え込んでいたんだろう。セイヤたちは、俺たちにゴブリンたちを押し付けることで生き延びた。だが、そんなことをして今まで通りでいられるはずはない。

マイカ静かに泣きながら、ポツポツと話してくれた。

あれからやはり、セイヤたちのパーティーはギクシャクしているようだった。ショウヘイは自身の不甲斐なさを恥じ、ケンボーはセイヤを責め、トミはケンボーに突っかかって、セイヤは鬼気迫る様子で毎日を過ごしているらしい。狩りに行ってもバラバラで、パーティー内での会話すらも少なくなったみたいだ。

マイカは以前の雰囲気、セイヤが言っていた家族のような雰囲気が好きだったのだと。

正直、それを俺に話したところで何も変わらない。それどころか、セイヤたちに押し付けられた側の俺がそれを聞かされるなんて、皮肉もいいところだ。

だが、なんとなく放っておくことはできなかった。それからしばらく、ただ俺はマイカの話を聞き続けた。

だいたい深夜０時を過ぎた頃。相当お酒の回ったマイカを伴い、俺はマスターにお代を払って店を出た。外の空気を感じたことで、彼女も少し酔いが覚めたみたいだった。

「――ご、ごめん。謝るどころか、話まで聞いてもらっちゃって……」

「……いや、別にいい」

足取りこそフラフラとしているが、受け答えは意外としっかりしていた。だが、夜道では不安が残るだろう。ミニスカ風に改造されたローブは相当に扇情的だし、身体つき

だって女のそれだ。そんな女性が酔っ払って歩いていたら、いらんことに巻き込まれるのが目に見えている。

「宿はどこだ？　送っていく」

「え、でも……」

「あんたになんかあったら寝覚めが悪いからな」

「お、送り狼……？」

「――はあ……？」

うだうだと言うマイカを連れて、彼女の宿へと歩いていく。セイヤから聞いた宿のままなら一応場所はわかる。道中、マイカから誤解したことについて謝られたりはしたが、あのことについてはもう謝ろうとはしてこなかった。

そのまま宿屋街へと辿り着き、マイカたちの泊まる宿の前までやってきた。

別れ際、お互いに今日あったことは誰にも言わないでおくことにした。言いふらす意味もないし、セイヤだって俺の名前が出ればいろいろと思うところがあるだろう。

「――じゃあ、あの、今日はありがとう……」

「……ああ」

俺もマイカも、それ以上は何も言わなかった。

マイカが宿へと入っていったのを確認して、俺は再び歩き始める。

行き先は天空横丁。
オルタナの夜は、長かった。